

魚津滑川バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(5)

富山県魚津市  
**吉野遺跡発掘調査報告書**

2000

魚津市教育委員会

## 序

魚津市教育委員会では、国道8号魚津・滑川バイパス建設事業に伴いまして、平成7年度より出地区から吉野地区までに所在する遺跡の発掘調査を行ってきました。これまでに原始・古代・中近世にいたる貴重な遺構や遺物の発見がありましたが、これにより記録の残されていない先史の人々の暮らしぶりを知る上でも、また文献記録が残されることの少ない地域の歴史の解明にも一躍を担ってきました。

今年度に調査を行った吉野遺跡は、縄文時代の大集落があった早月上野遺跡や古代の集落跡の佐伯遺跡など、従来より遺跡の宝庫として知られている上中島地区の洪積台地上に所在します。この遺跡はバイパス建設予定地の分布調査を行ったところ、新たに発見されたのですが、その性格や広がりなどの詳細な事柄が不明でした。

発掘調査の結果、縄文時代から近世にわたる様々な遺物と遺構が出土し、この地域の歴史の空白を埋めるものとして注目を集めています。

本書は記録保存を目的として、発掘調査を実施した吉野遺跡の報告書です。この発掘調査報告書が地域学習の教材として多くの人々に活用され、地域の歴史研究と埋蔵文化財に対する理解に役立てば幸いです。

平成12年 3月

魚津市教育委員会

## 例　　言

1. 本書は魚津滑川バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査の平成 11 年度吉野遺跡発掘報告書である。

2. 調査は建設省北陸地方建設局富山工事事務所の委託を受け、魚津滑川バイパス建設事業に先立ち、魚津市教育委員会が実施した。

3. 調査事務局は魚津市教育委員会社会教育課に置き、文化係が担当した。

発掘の作業は社団法人魚津市シルバー人材センターに委託した。

4. 試掘調査期間 平成 10 年 11 月 25 日～27 日、平成 11 年 3 月 26 日

5. 発掘調査期間 平成 11 年 5 月 13 日～11 月 30 日

6. 遺物整理期間 平成 11 年 12 月 1 日～平成 12 年 3 月 26 日

7. 調査担当者

試掘調査 塩田明弘 魚津市教育委員会社会教育課

本調査 麻柄一志 魚津市教育委員会社会教育課

塩田明弘 ク

尚、発掘現場では奈良大学学生柳下ゆうき、駒沢大学学生吉中大介の協力を得ている。

本書の執筆は麻柄と塩田、田中学（富山大学大学院生）が担当した。遺物の実測、写真撮影は麻柄、塩田、田中、佐々木健二（富山大学学生）が行った。このほか報告書作成にあたり、浦田佳子、石坂理恵、宮崎友貴子がトレース、拓本、表作成等の作業をおこなっている。

8. この調査で設定した基準杭は国土座標を用い、水平基準は標高である。なお、図版中の方位は真北を示す。

9. 出土遺物および発掘調査の記録は、すべて魚津市教育委員会が保管している。

10. 調査期間中及び遺物整理期間中に下記の方々から指導と助言をえている。記して謝意を表したい。

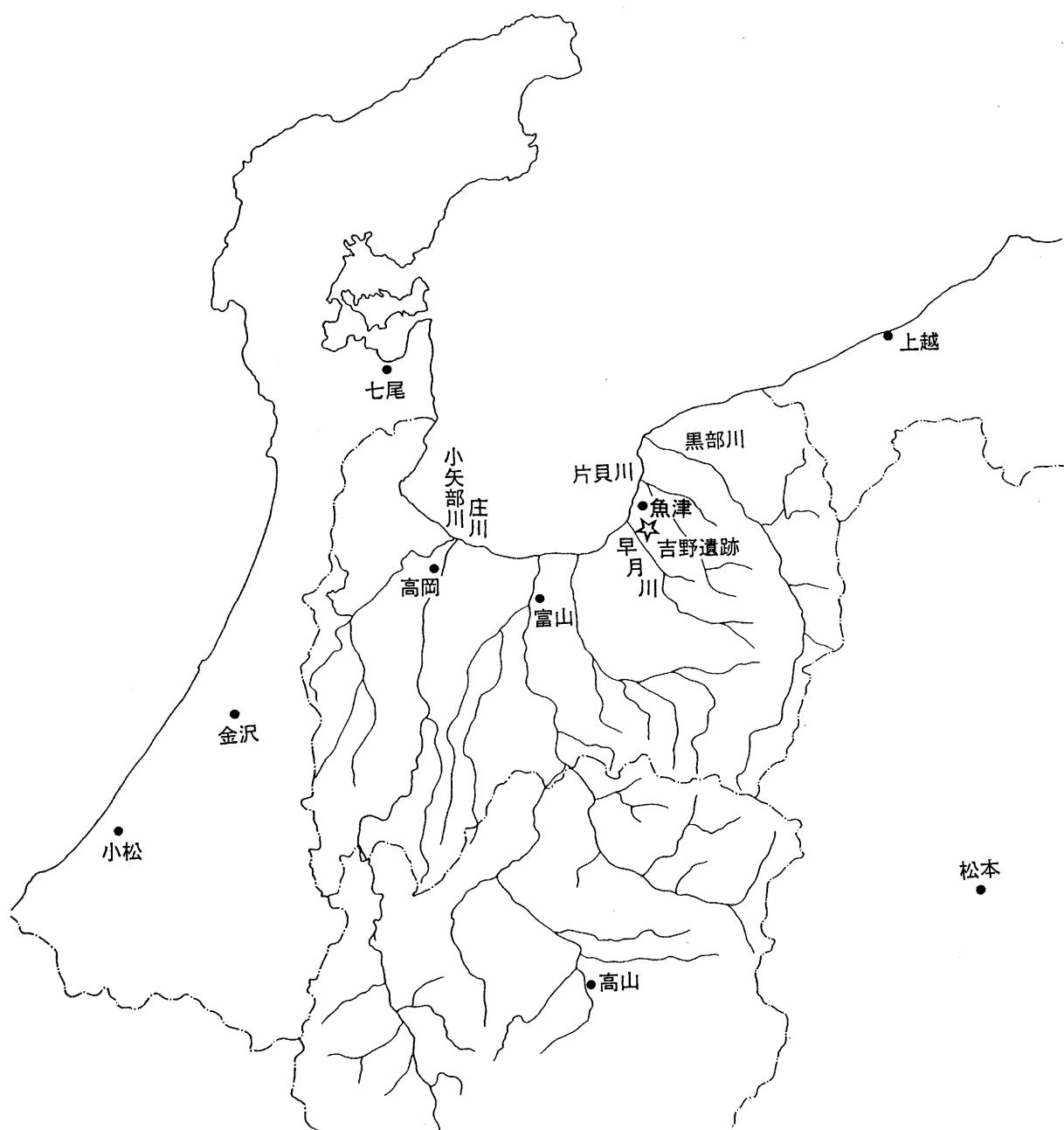
宮田進一（富山県埋蔵文化財センター）、富山正明（福井県埋蔵文化財調査センター）、  
田中学（富山大学大学院）

# 目 次

序	
例 言	
1. 調査の経緯	1
(1) 分布調査	2
(2) 試掘調査	2
(3) 本調査	4
2. 位置と環境	8
3. 層 位	10
4. 遺 構	10
(1) 井戸 (SE01)	10
(2) 溝 (用水) 跡	10
(3) 土 坑	10
(4) 掘立柱建物跡	10
(5) 川 跡	10
5. 遺 物	19
(1) 縄文時代	19
縄文土器	19
石器	19
(2) 弥生～古代	35
(3) 中・近世 (鎌倉～江戸時代)	37
1区川跡出土遺物	37
2区用水跡出土遺物	38
3区川跡出土遺物	38
包含層出土遺物	41
石製品	54
(4) 出土遺物の検討	57
①石器組成からみた遺跡の性格	57
②中・近世の遺物について	57
6. 調査のまとめ	58
写 真 図 版	61
報告書抄録	

## 1. 調査の経緯

富山県を東西に縦貫する国道8号の交通渋滞緩和を目指して建設省富山工事事務所によりバイパス建設工事が進められている。1979年に事業化された魚津市江口～住吉間の魚津バイパス建設工事は1994年に暫定2車線が供用開始され、現在は魚津滑川バイパス、入善黒部魚津バイパスの建設工事が進められている。建設工事に伴う埋蔵文化財の調査は、1985年に建設省の委託で魚津市教育委員会が本江地内の遺跡調査を実施しており、1989年度より事業化された魚津市住吉～滑川市稻泉の魚津滑川バイパス建設工事に伴う埋蔵文化財発掘調査事業は、平成5年度に建設省より魚津市教育委員会に委託され、魚津市教育委員会では富山県埋蔵文化財センターの協力を得、分布調査を開始した。



第1図 吉野遺跡位置図

## (1) 分布調査

魚津バイパスの分布調査は昭和57年度に実施しており、分布調査に基づき、本江B遺跡、友道神明社遺跡の発掘調査が行われている。魚津滑川バイパスの魚津側は富山県埋蔵文化財センター主任岡本淳一郎他が担当し、国道建設予定地の設計及び杭打ちの完了している地区から行い、平成5年度に魚津市住吉・慶野地内に対して実施し、慶野地内でUNB-1遺跡（後に慶野遺跡と命名）を発見した。

平成6年度は1995年3月22日に魚津市出、佐伯地内及び吉野地内の一帯の約1200mの範囲を対象とし、富山県埋蔵文化財センター企画調整課長宮田進一、同文化財保護主事高梨清志、同河西健二（現県文化財課）、魚津市教育委員会社会教育課麻柄一志が担当して分布調査をおこなった。この分布調査では、調査対象範囲に周知の埋蔵文化財包蔵地として佐伯遺跡、山下遺跡、山下II遺跡が知られており、これらの遺跡の範囲内に国道建設予定地が含まれるか否かの確認、及び国道建設予定地において未確認の埋蔵文化財包蔵地の発見に努めた。しかし、吉野地内では用地買収、道路予定地の杭打ちが一部にしか実施されていないため、吉野地内の分布調査は北部に限定した。この分布調査では新たに出地内でUNB-2遺跡（後に吉野遺跡と命名）、吉野地内でUNB-3遺跡（後に吉野遺跡と命名）を発見したが、吉野遺跡についてはこの年の調査範囲の外に遺跡が広がっている可能性が指摘された。吉野遺跡では珠洲焼、土師質土器の破片が採集され、中世の遺跡と考えられた。

翌平成7年度は7・8月に魚津市教育委員会が主体となり、富山県埋蔵文化財センターより職員の派遣を受け、出、佐伯、山下II遺跡の試掘調査を実施した。さらに1996年3月25日に吉野地内の残りの部分、早月川までの分布調査を実施した。調査は富山県埋蔵文化財センター企画調整課長宮田進一、同文化財保護主事池田恵子、同島田修一、同越前慶祐、魚津市教育委員会社会教育課麻柄一志等が担当した。分布調査では道路建設予定地内に土師質土器片や越中瀬戸片、近世陶磁器片などを採集した。

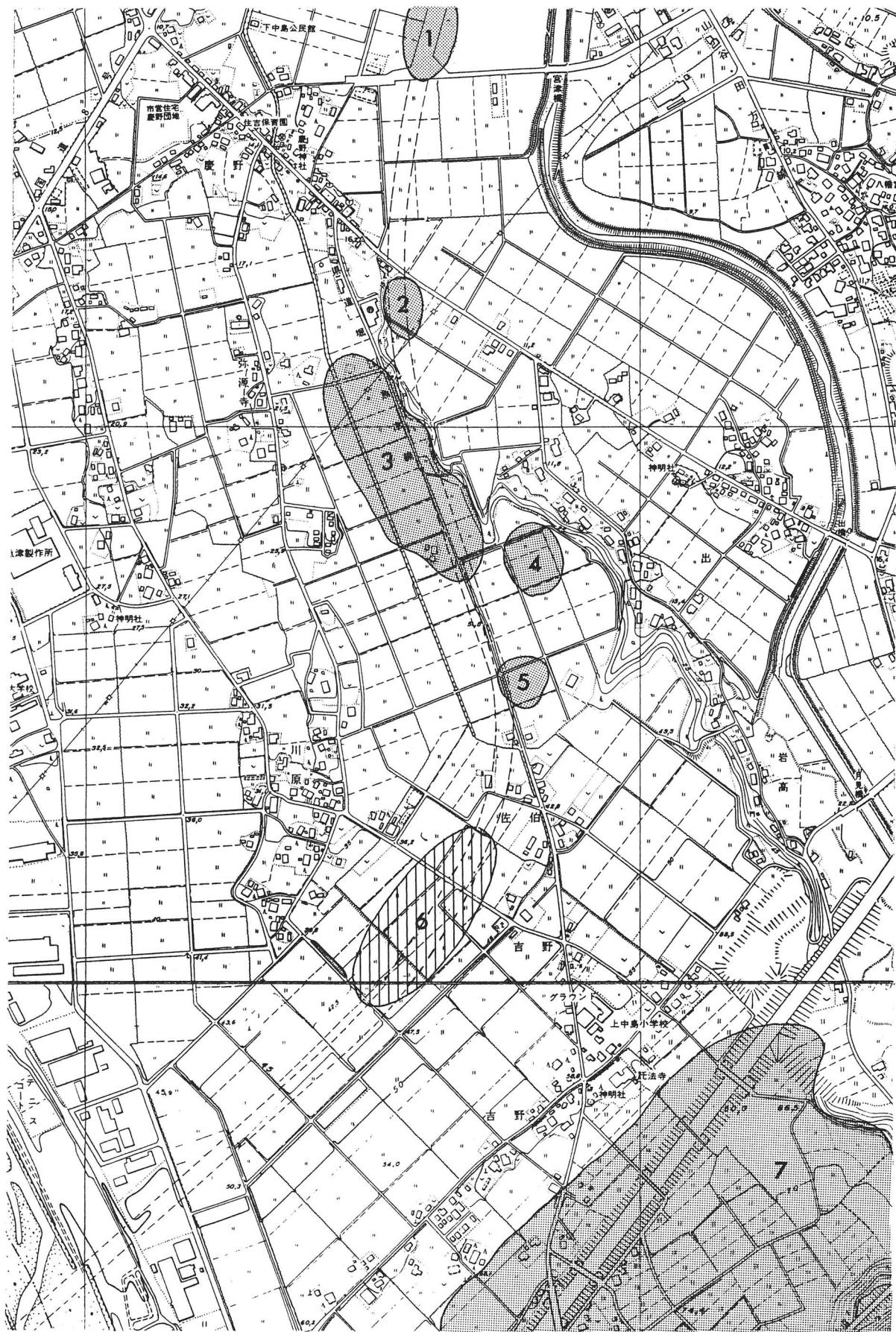
この2回の分布調査で、吉野遺跡の範囲は国道建設予定路線上で市道を挟み500m余りの範囲で早月川近くまで広がっていることが推定された。但し、吉野地内は昭和40年代に圃場整備が実施されており、遺跡の破壊が進んでいることが考えられ、採集された遺物も本来の位置から移動している可能性が強い。また、遺物の分布は散漫で、遺跡の周辺部であることが考えられた。散漫な遺物分布の中でも、比較的多く遺物が採集できる地点は吉野塞神社の北西一帯で、この付近に中心部を推定できる。

## (2) 試掘調査

平成7年4月及び平成8年4月に分布調査の概要報告が富山県埋蔵文化財センターによって纏められ、この報告書に基づき、建設省北陸地方建設局富山工事事務所、富山県教育委員会文化課、富山県埋蔵文化財センター、魚津市教育委員会社会教育課は、建設予定地内の埋蔵文化財の取り扱いについて協議を行い、魚津市教育委員会が事業主体となって試掘調査を実施することになった。調査は教育委員会社会教育課塩田明弘が担当し、平成10年11月と平成11年3月を行った。

試掘調査の対象地域は、分布調査で吉野遺跡の範囲と推定された範囲の内、8号バイパス建設に係る国道本線部分にあたる水田部分の約12,000m<sup>2</sup>である。しかし、実際に試掘調査を行なった箇所は用地買収が終了していた範囲に限られ、買収の完了した区域を順次調査していく、平成10年12月と平成11年3月に対象範囲の約9割の水田に対して調査を行った。

試掘調査は重機による掘削を行い、遺跡の拡がりや残存状況、遺物の有無の確認に努めた。掘削は黒褐色粘質土の下の黄褐色粘土層（ローム層）までおこない、黄褐色粘土層上面の精査は人力で行っ



第2図 吉野遺跡と周辺の遺跡分布 (1/10,000)

- 1. 慶野遺跡
- 2. 出遺跡
- 3. 佐伯遺跡
- 4. 山下遺跡
- 5. 山下II遺跡
- 6. 吉野遺跡
- 7. 早月上野遺跡

た。トレンチは地形や土地区画に合わせ、任意に 23 カ所に設定し（第 3 図）、掘削時及び廃土中の遺物の発見と収集に努めた。遺物は第 1、4 ~ 7、11、12、17 トレンチより出土し、遺物から縄文時代から近世までに及ぶ複合遺跡である事が確認された。

遺跡の層位は約 30 cm の耕作土の堆積の下に黒褐色粘質土が認められ、黄褐色粘質土（ローム層）と堆積が続く。ただ第 8、9、13 ~ 16 トレンチは耕土の直下がローム層となっており、過去の圃場整備で大規模な削平があったことがわかる。逆に第 5、6、11、12 トレンチにおいては耕土下に 70 cm を越える厚い盛土が行われていることも確認でき、本遺跡では地形の改変が著しい。さらに第 1、11 トレンチでは砂層や礫が見られ、圃場整備前の川の存在が見受けられた。

出土遺物は縄文土器や石器、弥生～古墳時代の土器、中世土師器皿、珠洲、越中瀬戸、肥前系磁器、砥石などである。

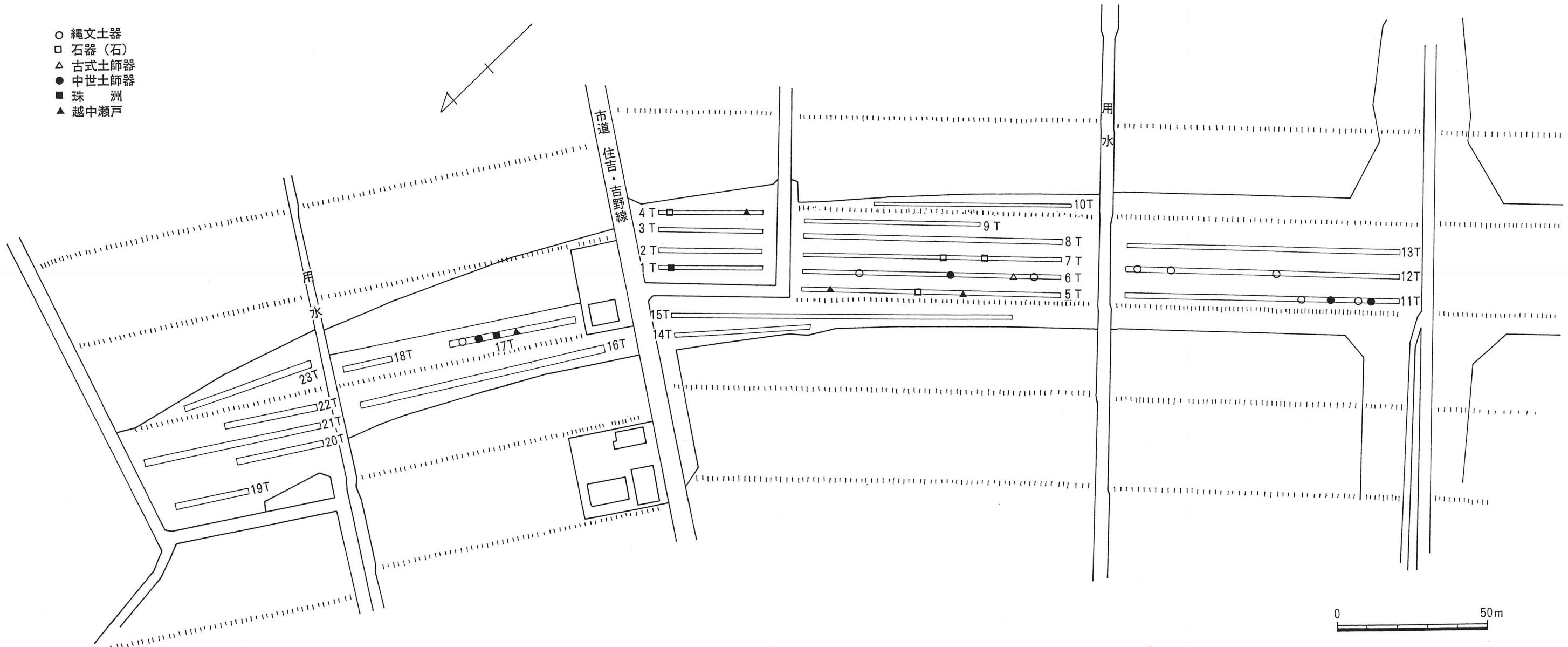
これらのことより、遺物の出土したトレンチのうち、第 11、12 トレンチは当初推定されていた遺跡の範囲外ではあるが、試掘調査の結果を重視し、第 1 ~ 9 トレンチを含む約 6,500 m<sup>2</sup>を今年度の本調査の対象とした。なお第 17 トレンチの水田と隣接する未買収地の本調査は次年度とした。

### （3）本調査

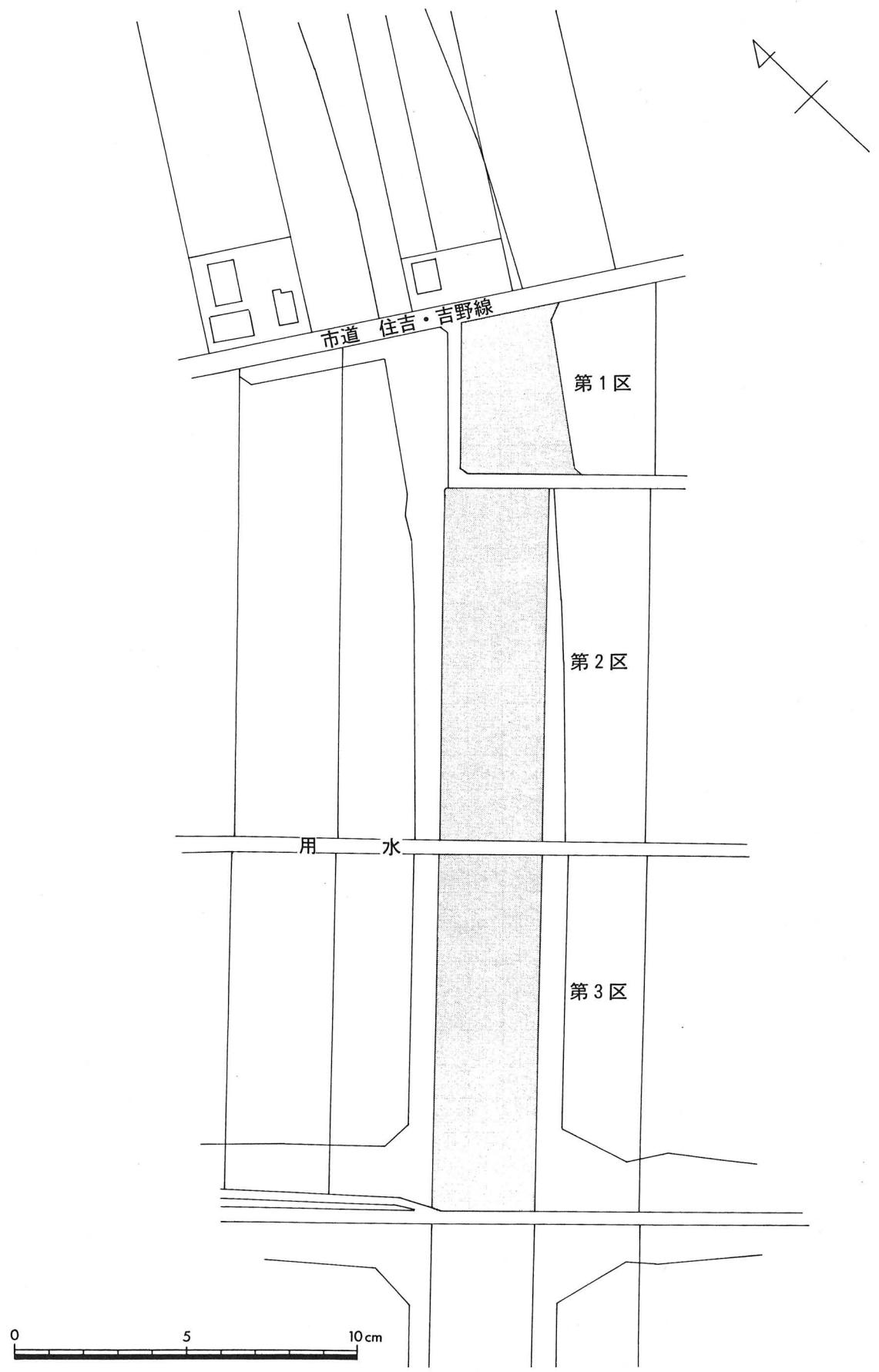
試掘調査の結果を受け、魚津市教育委員会と建設省北陸地方建設局富山工事事務所と協議し、平成 11 年度の本調査対象地を決めた。これにより平成 11 年 4 月 22 日付けで委託を受け、吉野遺跡の発掘調査委託契約書を締結し、同日より着手した。調査は魚津市教育委員会社会教育課文化係に事務局を置き、現地での調査は社会教育課麻柄一志、塩田明弘が担当した。

発掘調査は未買収地とそれに隣接する水田の本調査を翌 12 年度に行うこととし、まず平成 11 年 5 月 13 日より重機による表土剥ぎを開始した。調査範囲は現状は水田となっており、作業はまず重機で耕作土約 20 ~ 60 cm を除去した。5 月 21 日より基準杭打ちなどをおこない、5 月 24 日より(社)魚津市シルバー人材センターから派遣された作業員による発掘作業を開始した。発掘作業は、試掘で地山とみなした黄褐色ローム層の上面まで手掘りで行い、黒褐色粘質土層中より遺物を採取し、黄褐色ローム層上面で遺構検出をおこなった。排土にはベルト・コンベアを使用し、出土遺物は 1 m グリッドごとに取り上げている。調査区が広範なため、水田の区画ごとに北側から第 1 区、第 2 区、第 3 区に分けて順次調査を行った。なお、第 2 区の東側半分については、グリッド杭に沿って南北方向に幅 1.5 m のトレンチを入れて、遺物・遺構の再確認を行った結果、調査は行わず、第 1 区の廃土置き場とした。各調査区の精査を終了させ、航空写真撮影の後に平板と通り方実測で遺構図を作成した。発掘調査は道具類やプレハブなどを撤去し 11 月 30 日に終了した。その後 12 月 1 日から平成 12 年 3 月 31 日まで埋蔵文化財調査室にて遺物整理、報告書作成業務を行なった。

- 縄文土器
- 石器（石）
- △ 古式土師器
- 中世土師器
- 珠 洲
- ▲ 越中瀬戸



第3図 試掘トレンチの位置及び遺物出土状況 (1/1,000)



第4図 平成11年度 発掘調査区位置

## 2. 位置と環境

富山県魚津市は富山平野の北東部に位置する。立山連邦からは僧ヶ岳を水源とする布施川、剣岳を水源とする早月川の他に、毛勝山から流れる片貝川や角川が市内を貫流し、富山湾へと注いでいる。魚津市は広い洪積台地と多くの河川によって形成された開析扇状地により占められている。市の平野部（沖積地）は狭く、洪積台地が発達しており、地形の傾斜は強いといえる。河川が多く、河岸段丘が顕著に見られるが、本遺跡の所在する上中島台地も両側を早月川と角川に挟まれた段丘を呈している。段丘崖の比高差は角川側で約30m、早月川側で約10mとなっている。この台地は河床面の低い角川に面して下流の慶野地内まで、河岸段丘崖が発達し、河床面の高い早月川に面した段丘崖は中流域の上野地内で消滅している。

吉野遺跡は市の西部、上中島地区の吉野地内に所在する。角川に面した段丘崖の縁辺部から西側へ500m程の洪積台地上奥部に位置する。遺跡の南東部約700mには縄文時代の大集落である早月上野遺跡がある。また北東部500mには縄文時代と中世の小規模集落と思われる山下Ⅱ遺跡が約500m北東部に所在する。これら両遺跡と吉野遺跡との関連性が期待できる。

吉野遺跡の標高は41～43mを測り、地形は南（山側）から北（海側）へ傾斜し、調査区東側が42～43m、西側が41～42mを測り、東から西方向に傾斜している。

この洪積台地上には旧石器時代から近世まで数多くの遺跡が集中している。角川に面した台地上には佐伯遺跡、山下遺跡、山下Ⅱ遺跡、早月上野遺跡が並び、角川の沖積微高地には慶野遺跡、出遺跡がある。これら周辺の遺跡について時代ごとに外観していく。

**旧石器時代** 早月上野遺跡で後期旧石器時代後半のナイフ型石器、搔器、石核、剥片などが出土している。

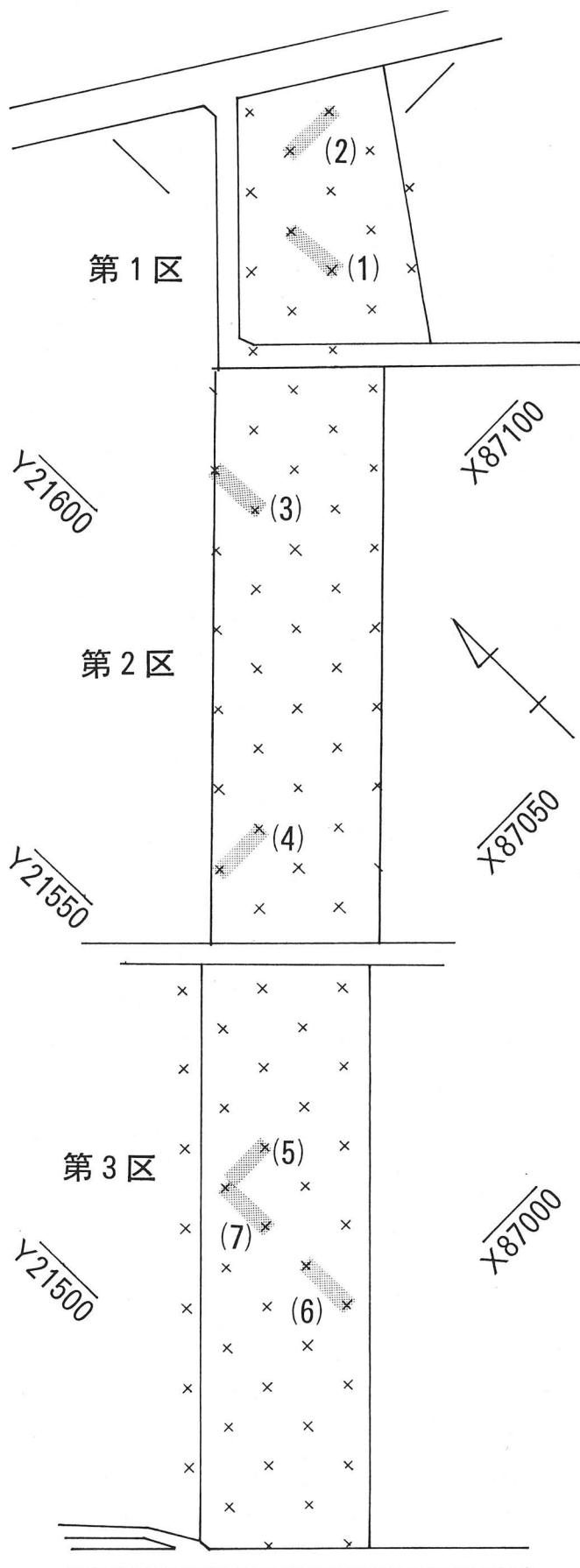
**縄文時代** 佐伯遺跡より早期の押型文土器が出土している。前期後葉にあたる土器は佐伯遺跡、山下遺跡、山下Ⅱ遺跡で出土・採集されている。中期の土器は佐伯遺跡、山下Ⅱ遺跡で出土。中期以降から晩期に至るまで早月上野遺跡に集落が形成され、大量の土器・石器が確認されている。

**弥生～古墳時代初頭** 中期から後期に至る土器が佐伯遺跡、早月上野遺跡、沖積地の出遺跡において出土している。なお、佐伯遺跡より弥生時代後期から古墳時代初頭の集落跡が検出されている。

**古代** 佐伯遺跡に平安時代の集落が形成され、早月上野遺跡、出遺跡で概期の遺構・遺物が検出されている。また古代の北陸道が近世以降の海岸沿いでなく上中島台地を通っていた可能性が指摘されている。

**中世** 佐伯遺跡、山下Ⅱ遺跡、早月上野遺跡、沖積地では慶野遺跡、出遺跡において遺物が見られるが、明確な遺構の検出例は少ない。また上中島台地の南側に接する山地には松倉城の支城であった升方城、水尾城などの山城が並ぶ。

多くの遺跡が所在する上中島台地は近世（江戸時代）以後、水田不足を補うため盛んに水田開発が行われた。さらに昭和50年代には吉野地区において大規模な圃場整備が実施され、発掘調査区内においても各箇所で削平、盛土が行われていた様子が確認できた。本遺跡の現状は水田であるが、近世以後の開田作業、圃場整備による大規模造成により地形の改変が著しく、旧地形の判断は難しい。



第5図 層位図位置

### 3. 層 位

遺跡の層位は圃場整備が原因と考えられる削平、盛土が各箇所で行われており、ばらつきがある。遺跡の地形は南（山側）から北（海側）へ傾斜し、東西方向は第1区付近が最も高く、第2区方面へ向かってなだらかに傾斜している。各調査区の代表的な層位を第6図に示し、その位置は第5図のとおりである。但し、手掘り掘削の前に重機により、耕土や盛土を20～80cm剥ぎ取っているため実際の水田面は層位図には示していない。

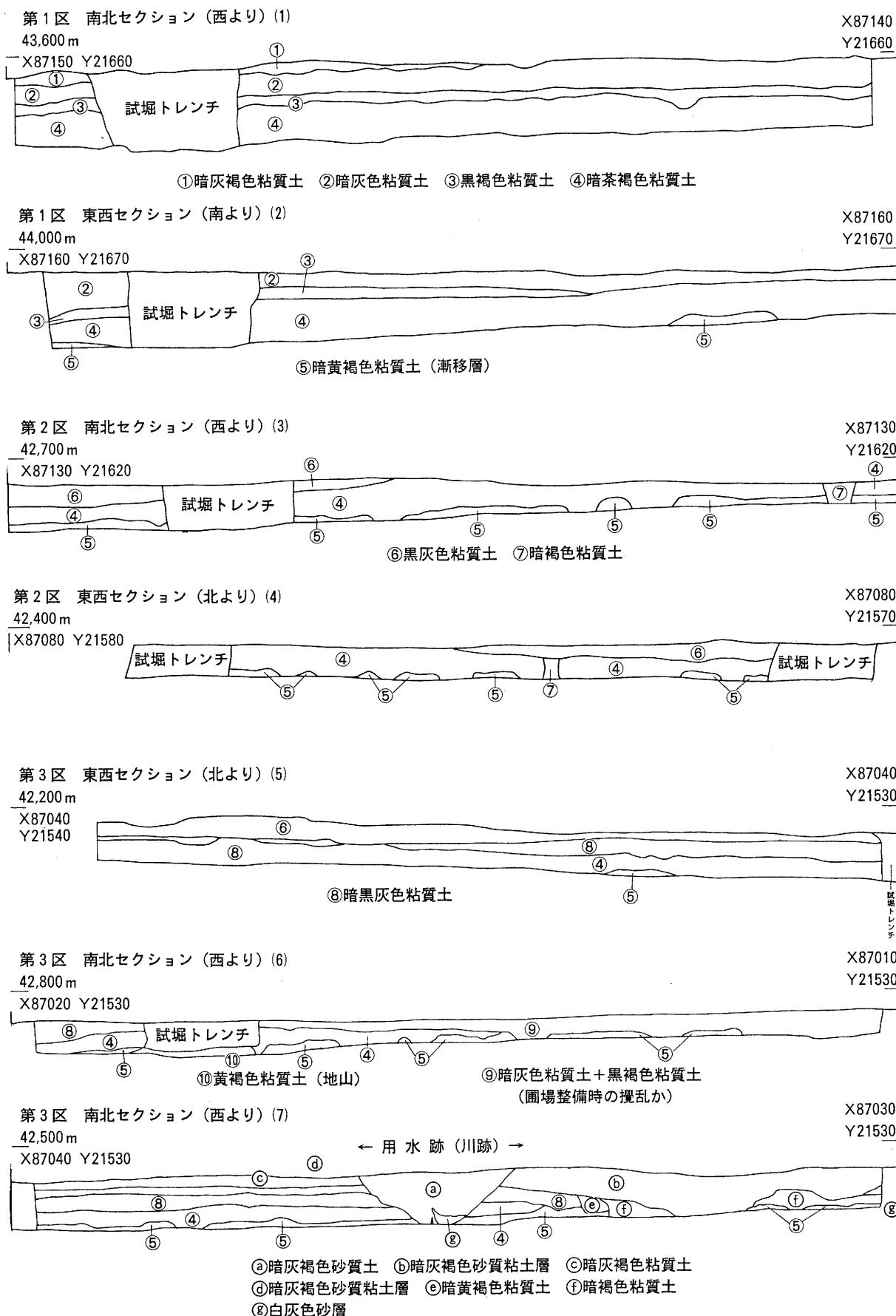
遺跡の基本層序は第1区の(1)・(2)に見られるように、床土と思われる①層（暗灰褐色粘質土層）、近世～近現代の遺物を含む②層（暗灰色粘質土層）、縄文時代から中世の遺物包含層である③層（黒褐色粘質土層）と④層（暗茶褐色粘質土層）、漸移層である⑤層（暗黄褐色粘質土層）、黄褐色粘質土が地山となる。この層序は同じ上中島台地に位置する他の遺跡の層位とほぼ一致する。なお、第1区北東部の②層直上には、圃場整備の際に行ったと見られる、黒褐色粘質土及び黄褐色粘質土がブロック状に混ざり合った盛土が20cm程認められた。また調査区南東端部から南西部にかけて、川跡と思われる砂質土と暗黒褐色粘質土の堆積があった。さらにこれに直交する川跡も認められた。埋土からは中世から現代にかけての遺物が出土しており、圃場整備時に埋められたものと考えられる。河川の流れは東から西で、第2区北東部で続きを確認した。

第2区は第1区と比べ約1mのレベル差があり、(3)・(4)のように削平によるものか、②・③層が見られず④層から確認できた。④層の直上には場所により床土（盛土）と見られる⑥層が認められた。なお、第2区の南側は、耕土下20cm程で地山削平面に達しており、掘削範囲からは除外した。④層からは縄文土器や打製石斧、中世土器が出土している。遺物は④層上部から多く出土し、下部ではほとんど出土していない。第1区で見られた河川跡は無かったが、用水と思われる砂質土と褐色土の堆積が一部認められた。

第3区は第2区とのレベル差はほとんど見られない。遺物包含層である④層は確認できるが、その直上の土層は圃場整備時の搅乱や盛土、耕土・床土であり、遺跡の残りは良好とはいえない。2区同様、④層から縄文土器や打製石斧、中世土器が出土した。直上の⑥・⑧層や耕土からも打製石斧や中近現代の遺物は出土する。調査区のほぼ中央部には小河川と思われる砂質土や灰褐色粘質土の堆積が認められた((a)～(g))。埋土からは多量の礫と縄文時代から現代までの遺物が出土した。川底からは杭列が川跡に沿って確認された。この河川も圃場整備前まで機能していたと考えられる。

### 4. 遺 構

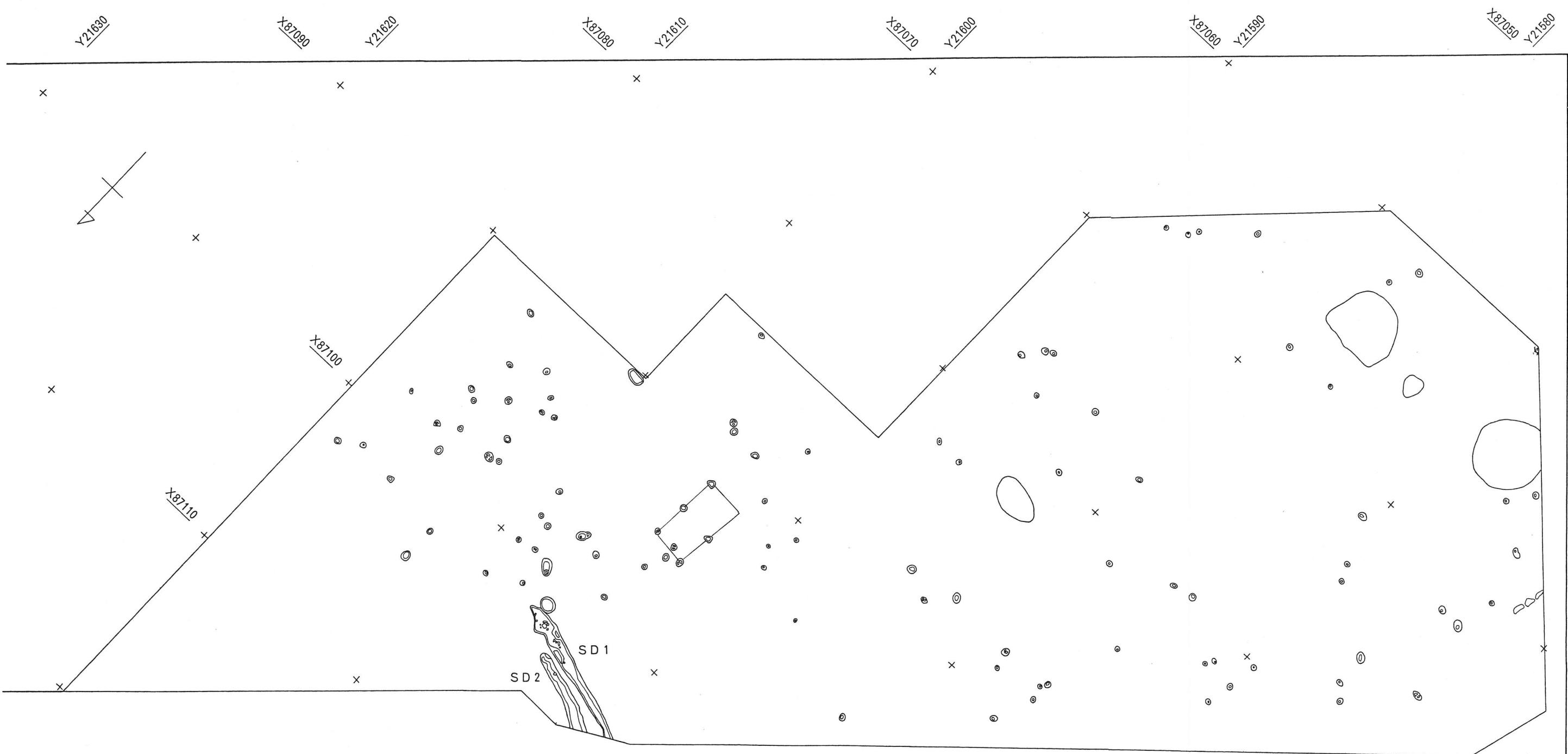
本遺跡において検出した遺構は井戸跡1基、溝（用水）跡3基、土坑2基、柱穴状ピット群で、他に大小の河川跡、風倒木痕も認められた。このうち時期の判明している遺構は近世末の溝跡2基と川跡のみである。他の遺構は伴出遺物が全く無いため、時期の特定は出来ない。ピット群などは第1・2区に集中しているが、遺物の出土量は調査区全体を見ても、それほど偏りは見られない。遺物の年代は縄文時代中期から晩期と中近世が主体で、弥生時代から古代の遺物が若干出土する。また第2・3区の南東部は圃場整備に伴うものと思われる削平が著しく、耕土下20cmで削平を受けた地山面やキャタピラ跡が見受けられた。



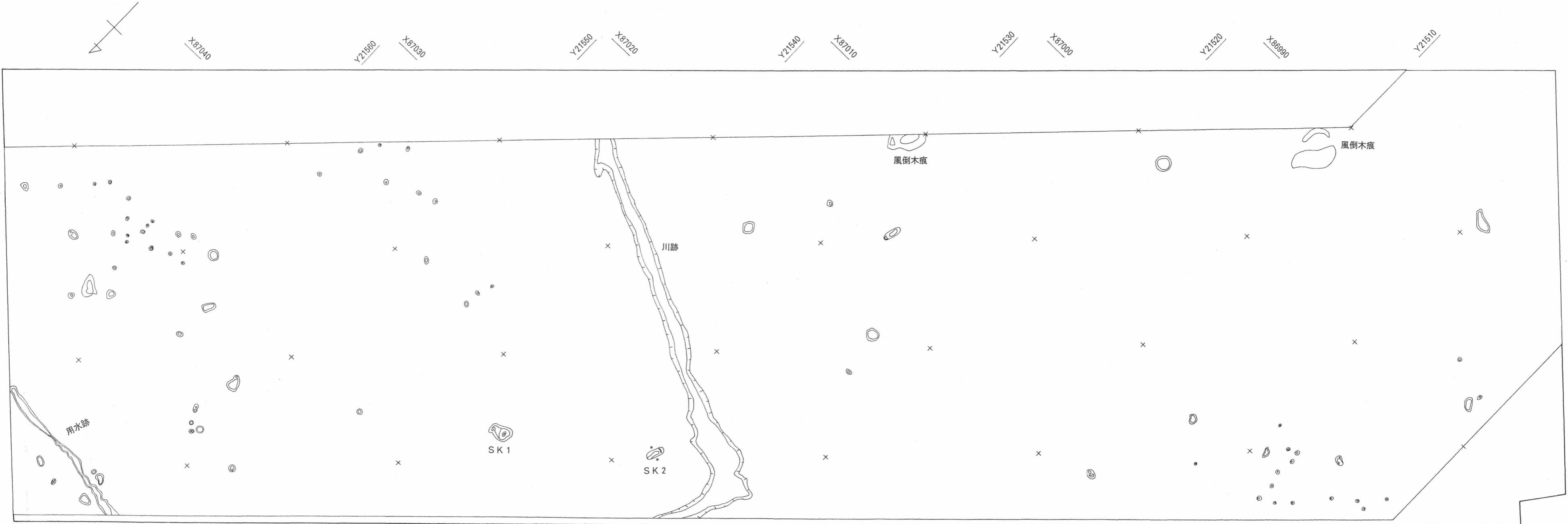
### 第6図 調査区層位図



第7図 第1区 遺構全体図 ( $S = 1/200$ )



第8図 第2区 遺構全体図 ( $S = 1/200$ )



第9図 第3区 遺構全体図 ( $S = 1/200$ )

### (1) 井戸 (S E 1)

第1区の南東端部において1基検出した。調査区際のために全体のプランは検出できなかったが、直径約1.6m、深さ約1.2mの円形を呈する素掘りのものである。石組や木組は見あたらない。井戸掘り方は壁面のセクションの観察より②層（暗灰色粘質土）直下の④層（暗茶褐色粘質土）から掘り込まれており、少なくとも近世以降の所産と考えられる。埋土はしまりがなく、時期的に新しいものと考えられるが、遺物が全く出土しないため時期の特定はできない。埋土からは20～40cm程の礫（河原石）が検出面から掘り方底部にわたって大量に出土している。遺物の混入が見られないことからも、井戸は礫を投げ込み人為的に埋めたものと考えられる。底部分からは現在も湧水が見られ、礫も多いためそれ以上の掘削は行わなかった。

### (2) 溝（用水）跡 (S D 1・S D 2)

第2区の中央西部で2基検出した。S D 1は検出長7.2m、幅30～90、深さ cmを測る。S D 2は検出長4m、幅50～65cm、深さ cmを測る。S D 1の東寄り、底中央部には10～20cmおきの杭列と10～30cm程の円礫が認められた。杭列のうち、竹筒を用いたものと木を用いたもの二つがあった。ふたつの溝はさらに東側につづくと思われるが、削平のためプランの検出は出来なかった。おそらく用水機能時は現在より地表面が高く、勾配があったために地山面まで掘り込みが達しなかったものと考えられる。溝の埋土はいずれも灰白色砂層で、18世紀後半から19世紀初頭にあたる肥前系陶器と越中瀬戸が定量出土した。二つの溝はほぼ並行に作られており同時期に機能していたものと思われる。

### (3) 土坑

3の土坑は3地区中央北東部で検出した。長軸1.5m、短軸90cm、深さ27cmを測る不整楕円形を呈する。漸移層直上の包含層（茶褐色粘質土）から縄文土器の深鉢が出土しており、その層からの掘り込みと考えられる。ただ検出した土坑の近隣に風倒木痕があるためにそのつづきである可能性もある。現時点では、他の風倒木痕からは縄文土器の出土が見受けられなかったので土坑と位置付ける。

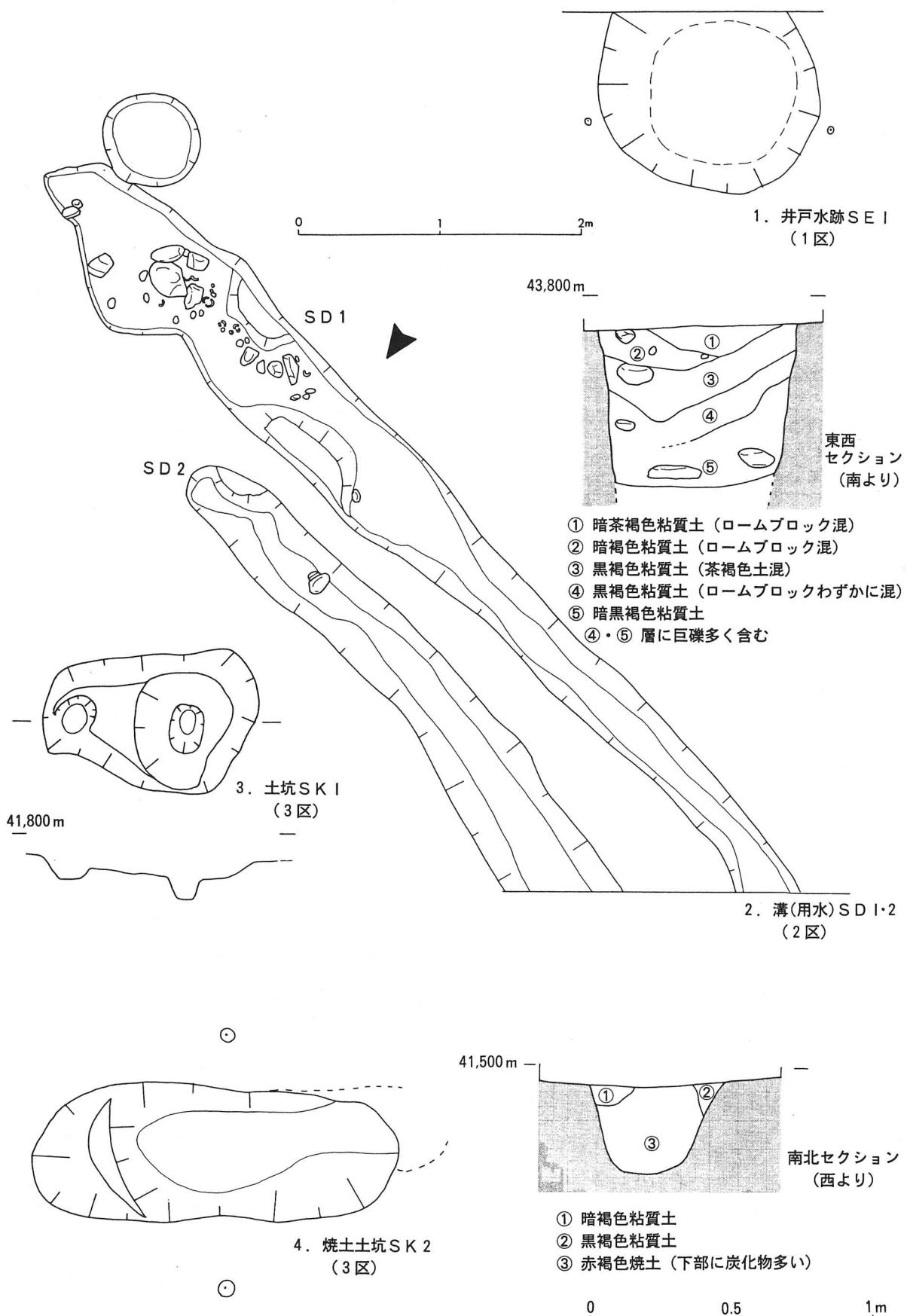
4の焼土土坑は3の土坑から約10m西側の地点で検出した。長軸1.3m、短軸45cm、深さ30cmを測る長楕円形を呈する。検出時は中央部に焼土が認められ、その周囲を黒褐色粘質土がドーナツ状に巡るものであった。埋土は黒褐色粘質土が上部に僅かに見られ、他は大量の焼土と炭化物が出土した。土坑は北側に向かって袋状に掘り込まれていた。時期を特定させる遺物は出土していない。

### (4) 掘立柱建物跡（第8図）

調査区第2区中央部より、南北2間（3.5m）×東西1間（2.0m）の南北棟の側柱建物が確認できた。柱穴の掘方は径25～35cm程の円形や不整円形で、深さは10～20cm程である。床面積が約7m<sup>2</sup>と非常に小型で、簡素な小屋のような建物かもしれない。遺物の出土は無く、時期の特定はできない。建物跡の周辺で縄文土器片が比較的集中して見つかったが、建物との関連性は判然としない。

### (5) 川跡

調査区第1区と第3区において比較的大きな川跡が検出された。圃場整備前まで機能していたもので、埋土から現代の遺物も多数見つかった。出土遺物には中・近世のものもあるが、摩滅の著しいものは多くなく、川の周囲を耕作中に出土したもの投げ捨てた可能性もあるだろう。



第10図 検出遺構図 (1・2・3, S = 1/40, 4 S = 1/20)

## 5. 遺物

### (1) 縄文時代

#### 縄文土器 (第 11 図)

縄文土器はコンテナ 3 箱程で、いずれも時期判別の難しい小破片である。破片は接合できるものは少なく、器形の復元ができるものは出土していない。土器の文様は縄文を施すものが多く、次いで無文となり、僅かに条痕文土器が見受けられる。遺構からの出土は無く、土器はすべて黒褐色粘質土層及び暗茶褐色粘質土層中からである。

2 は沈線による渦巻文を施す。1 と同一個体である。5、7、9 は沈線により区画された中に細かい縄文を施すもので、これらは後期前葉にあたる。また 8、15 の体部片や 21、22 の底部は中期後葉に属する。6、16、17 の体部片は概ね中期、20 は後期、12 は晩期と思われる。これにより出土土器からは、中期中頃から後期中頃までが定量見受けられ、一部晩期まで残ることが考えられる。

#### 石器 (第 12 ~ 25 図)

吉野遺跡からは総計で 54 点の石器が出土している。内訳は打製石斧が 47 点、磨製石斧 5 点、石皿 1 点、石錘 1 点にすぎない。この他に凝灰岩、粘板岩の剥片や碎片が十数点ある。石材から打製石斧の製作又は使用によるものと考えられる。ある限られた時期の所産とすれば、極めて偏った石器組成といえる。遺構からの出土はなく、いずれも包含層からの出土で、調査区の全体からむらなく出土している。

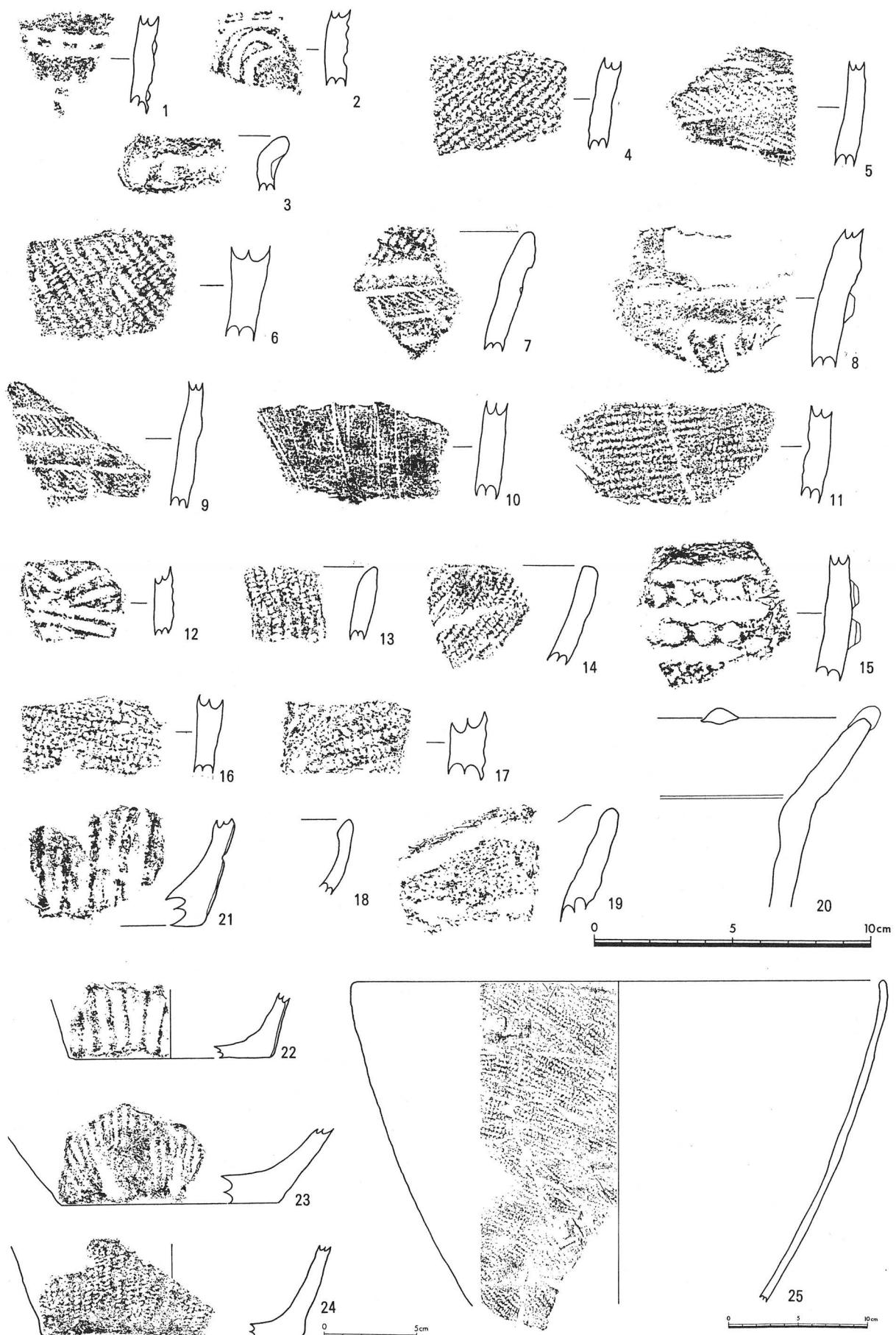
##### ①打製石斧 (第 12 ~ 25 図 47)

吉野遺跡からは 47 点の打製石斧が出土している。打製石斧の分布は調査区全体から散漫な出土で、特に出土が集中する地区は存在していない。特定の遺構との関係も明確ではなく、その年代は出土状況からは推定できない。打製石斧は、北陸地方では縄文時代中期初頭から晩期末まで存在し、さらに弥生時代後期にも大型のものが存在しており、年代幅は大きい。吉野遺跡の打製石斧は、伴出した土器などの他の出土遺物からは弥生時代のものとは考えにくく、さらに形態的には弥生時代後期の打製石斧が大型で扁平な撥形を中心であることなどから、短冊形や比較的小型のものも一定量含まれる吉野遺跡の打製石斧を一応すべて縄文時代の所産と考えたい。

石材は粘板岩と凝灰岩が大部分を占めるが、新川地方の縄文時代の打製石斧のあり方としては一般的である。いずれも角川上流に原産地が存在しており、下流域でも礫として採集できる。凝灰岩を素材とするものは、大型の剥片を剥離し、周辺部に整形加工を施して斧形にしたものが多い。素材の大型剥片は横長のものが大多数であるが、縦長剥片を利用したものも存在する。粘板岩製の打製石斧は扁平な礫素材が多く、8、10、14、17、22、24 のように厚さ 2 cm 程度の板状の礫の周辺を斧形に整形している。

凝灰岩製の打製石斧は片面の一部に自然面を残しているものが多く、適當な大きさの円礫から表皮を剥ぎ取るように薄手の剥片を剥離している。粘板岩製のものは厚さの調整がほとんどみられず、素材の獲得段階から完成予定の打製石斧の厚さと合致するものが、選択されていることがわかる。

打製石斧の形態は短冊形と撥形が主体で、打製石斧としては中型又は長さ 10 cm 以下の小型が目立



第11図 繩文土器 (1~21 S = 1/2, 22~24 S = 1/3, 25 S = 1/4)

つ。また 44, 45 のようにやや分銅形に近いものも存在する。分銅形に近い形態の打製石斧は 42, 43, 44 のように周辺加工がほとんど施されず、僅かに括れ部の抉りに二次加工が認められるものが多い。また、41 も縦長剥片の形状をほとんど変形せず、両側片に僅かに二次加工を施した打製石斧である。これらに打製石斧の刃部には若干ではあるが、使用による摩耗痕も観察され、一応完成品として使用されていたと考えられる。

また、4 は粘板岩製の扁平な長楕円形礫の周辺に二次加工を施したもので打製石斧の未完成と考えられる。こうした未完成品や石斧製作途中の破損品と考えられるものとしては、他に 40, 46 などがある。打製石斧全体の中では、量的に少ないが、吉野遺跡において石器製作をおこなっていたことがわかる。さらに打製石斧製作の際の剥片と考えられる凝灰岩と粘板岩の剥片の存在もこのことを裏付ける。

出土した打製石斧の遺存状態は完形品が半数以下で、多くは破片、破損品、一部欠損品である。剥片に分類したものの中にも打製石斧の部分破片が含まれている可能性も高い。遺存状態や未完成品の割合から、調査地点は打製石斧の製作地や保管場所とは考えにくく、一般的には使用の場としての蓋然性が高いといえよう。

## ②磨製石斧（第 25 図 49～51）

磨製石斧は 5 点出土しているが、図示した 3 点以外には蛇紋岩製の刃部破片が 2 点ある。凝灰岩製の 49 を除きすべて蛇紋岩製である。図示した 49～51 も破損品で、比較的残存部の大きい 49 を除き、50, 51 は破片といつてもよい。吉野遺跡出土の磨製石斧はすべて破損品である。49 も頭部が欠損しており、この遺跡では刃部側しか出土していないことになる。

これらの磨製石斧の出土状態は遺跡の性格を表している可能性がある。新川地方の縄文時代中期から晩期の住居跡を伴う集落跡の発掘調査では、大概蛇紋岩製の磨製石斧の未完成品が出土するのが通例で、蛇紋岩製磨製石斧の製作はこの地域の生産活動の特色の一つでもある。蛇紋岩製の磨製石斧の未完成品が出土していないことは調査された範囲が当時の集落の中心部ではないことを表している。このことは縄文土器の出土の仕方や、遺構の状態からもいえることである。

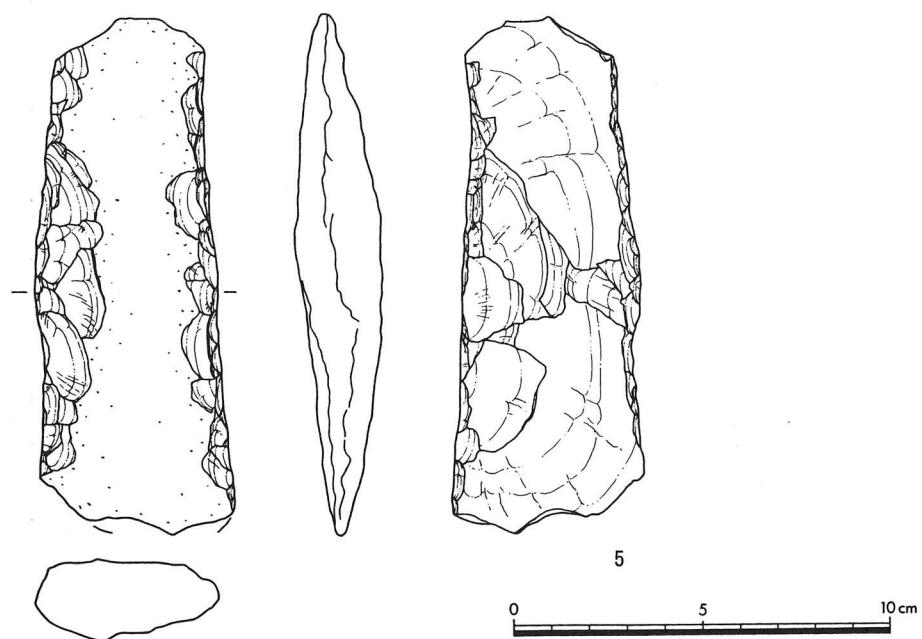
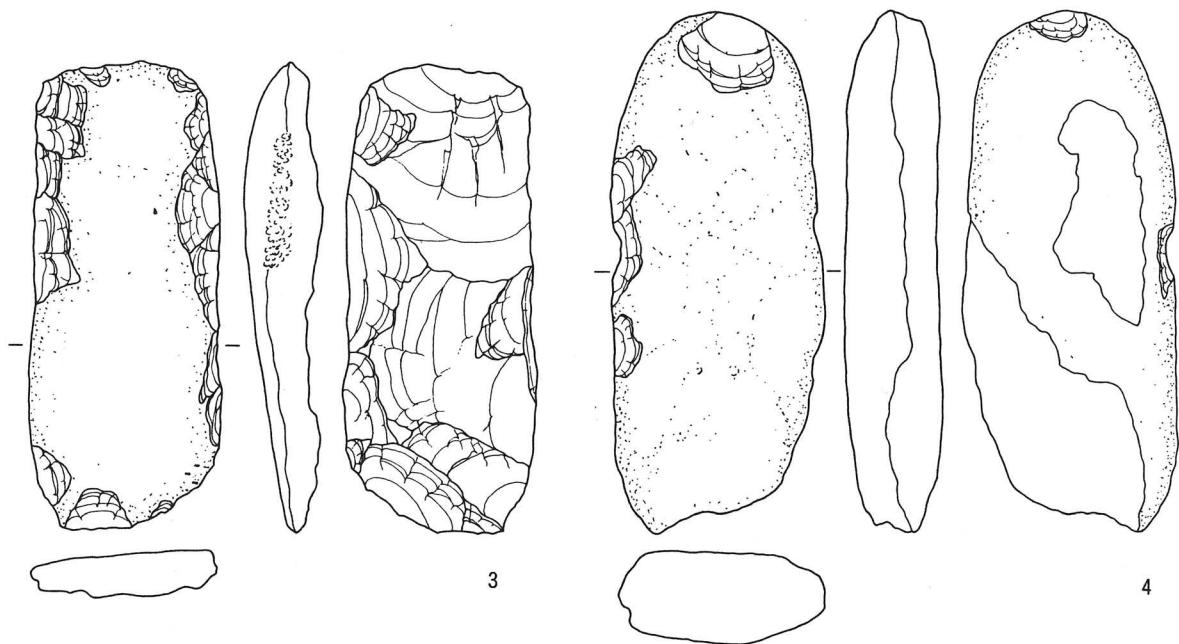
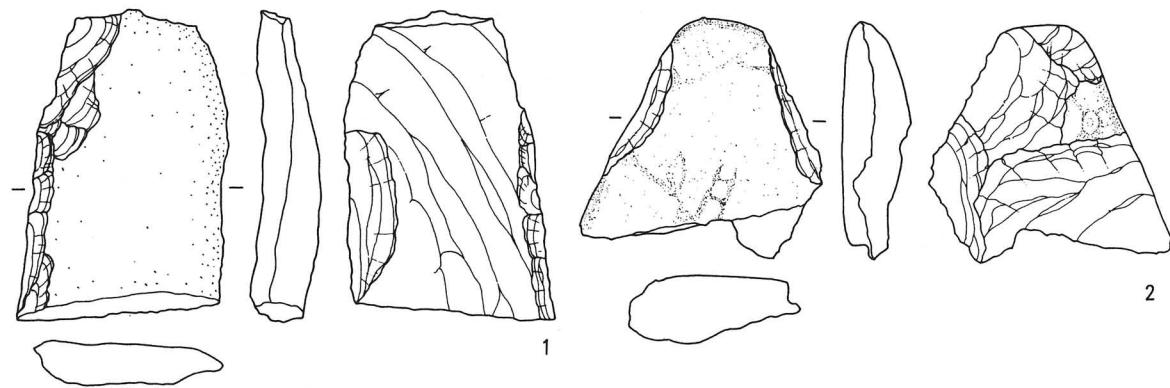
また、磨製石斧が柄に装着されているとの前提に立てば、作業中に破損した石斧は柄と共に石器製作又は修理の場へ運ばれ、そこで石斧の交換か石斧の再生作業がおこなわれることが予想される。石斧を使った作業の場には刃部破片や碎けた胴部破片が残されることになる。つまり刃部側の破片のみしか出土していない吉野遺跡の今回発掘調査箇所は磨製石斧を使用した作業の場であったことが想定できよう。

## ③石錘（第 25 図 48）

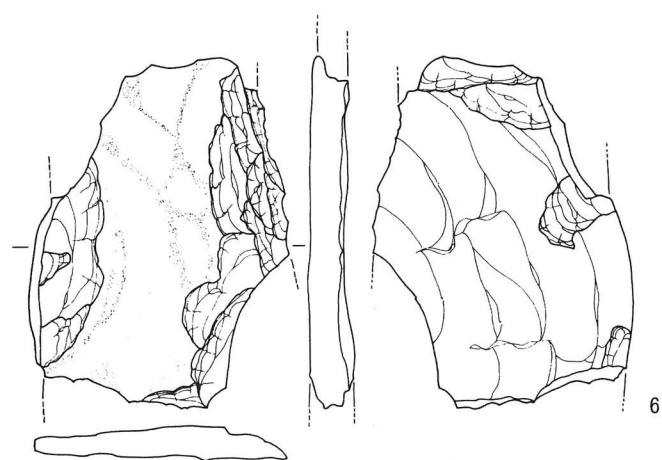
楕円形の扁平礫を半裁し、長軸の両端に簡単な剥離を施し、抉りをいたしたもの。わずか 1 点しか出土していない。上中島の台地上の縄文時代の遺跡は、両側を早月川と角川に挟まれており、水産資源の豊富なこの地域の遺跡からは石錘がこれまでに多数出土している。吉野遺跡での石錘の出土量は上中島台地の縄文時代遺跡としては極めて少ないと見える。

## ④石皿（写真図版 14）

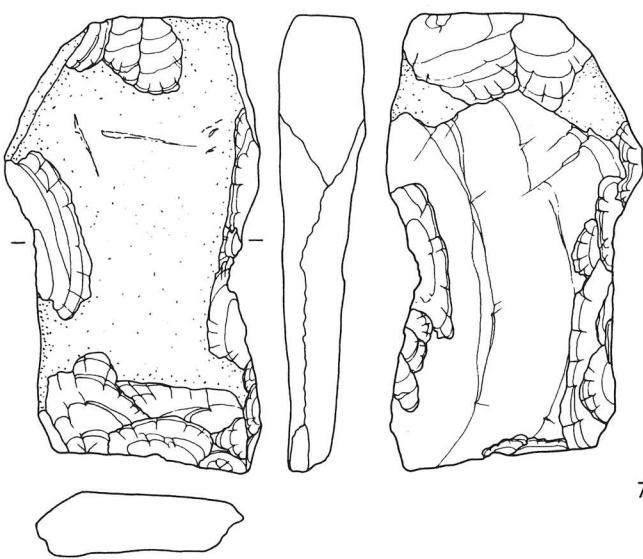
砂岩製の大型品。扁平な礫の両面に研磨面が認められ、両面とも僅かに窪みが観察できる。窪みの面は緩い曲線を描いており、砥石ではなく、石皿に分類できる。石皿の周辺にはほとんど加工が認められず、窪みも小さく、摩耗痕もそれほど顕著ではないことから長期間の使用とは考えられず、一時的な利用と思われる。



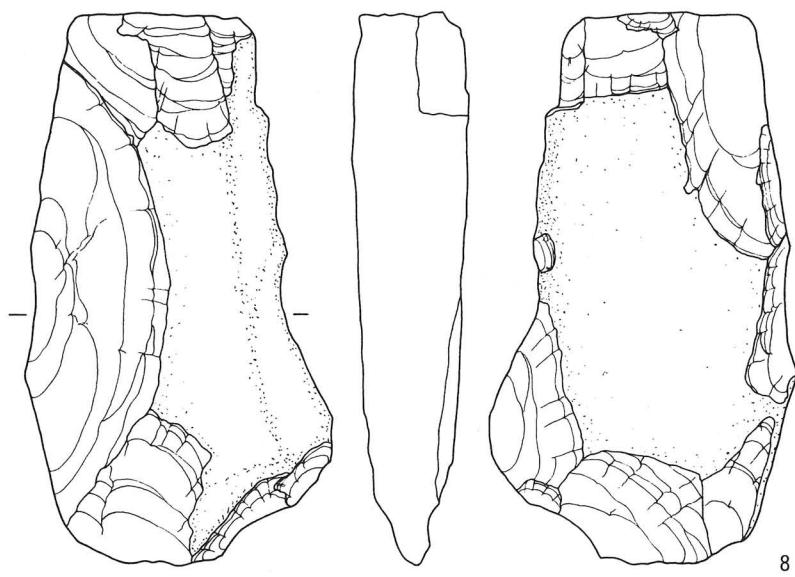
第12図 石器 (1) S = 1 / 2



6



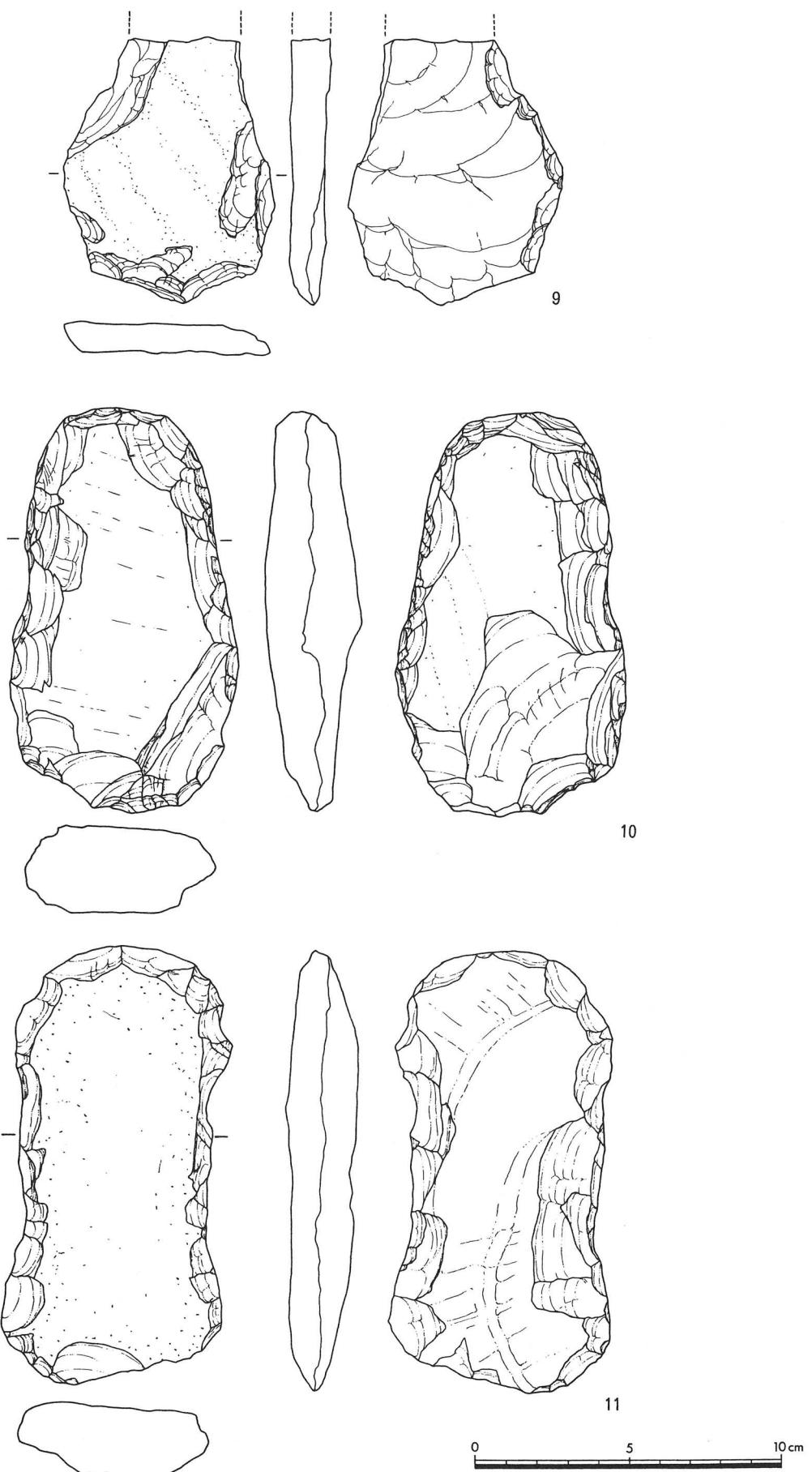
7



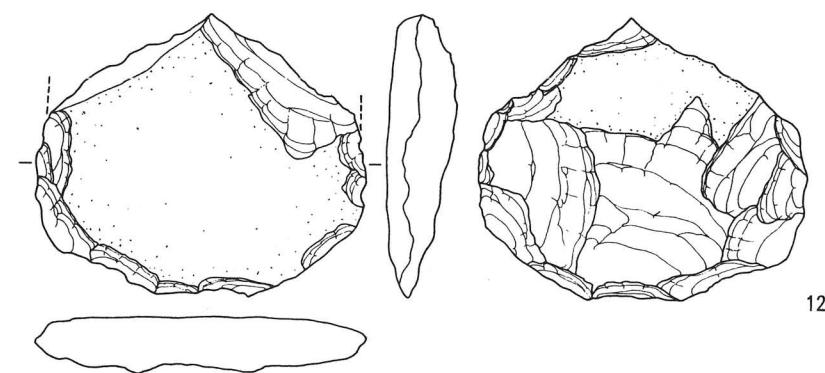
8



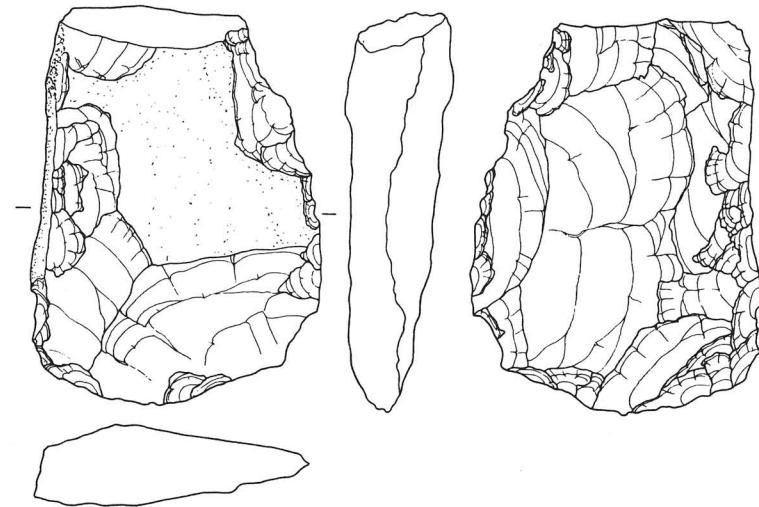
第13図 石器（2）S=1/2



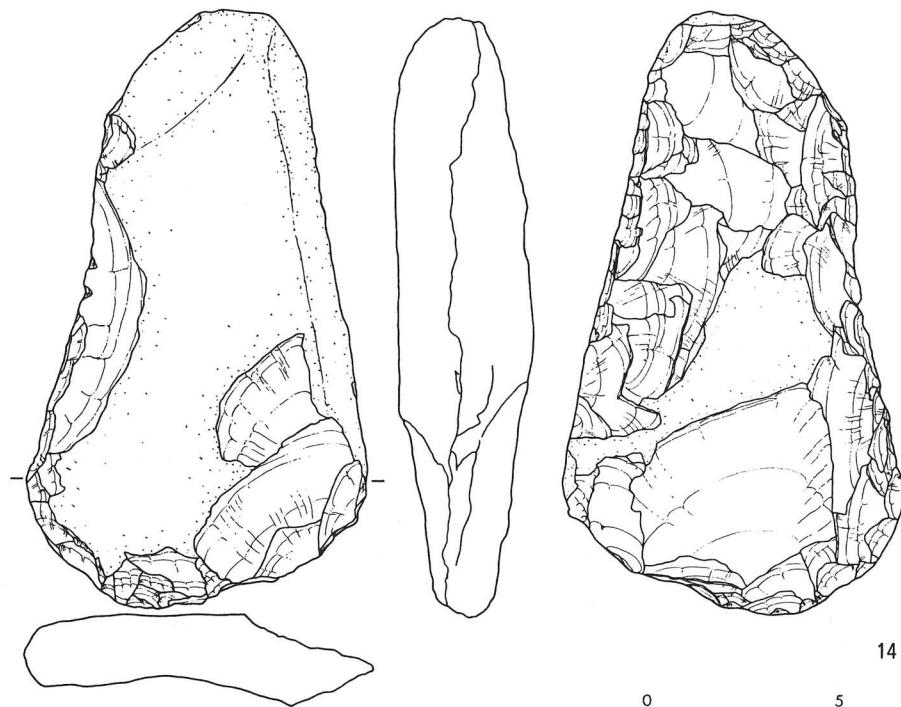
第14図 石器 (3) S = 1 / 2



12



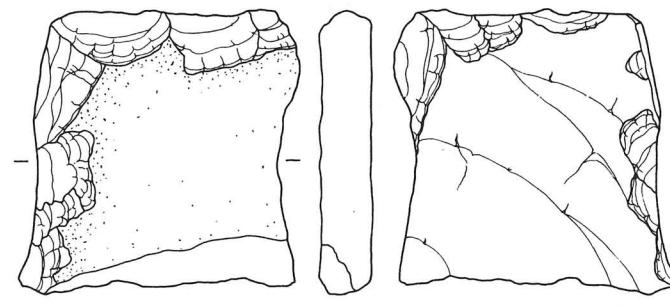
13



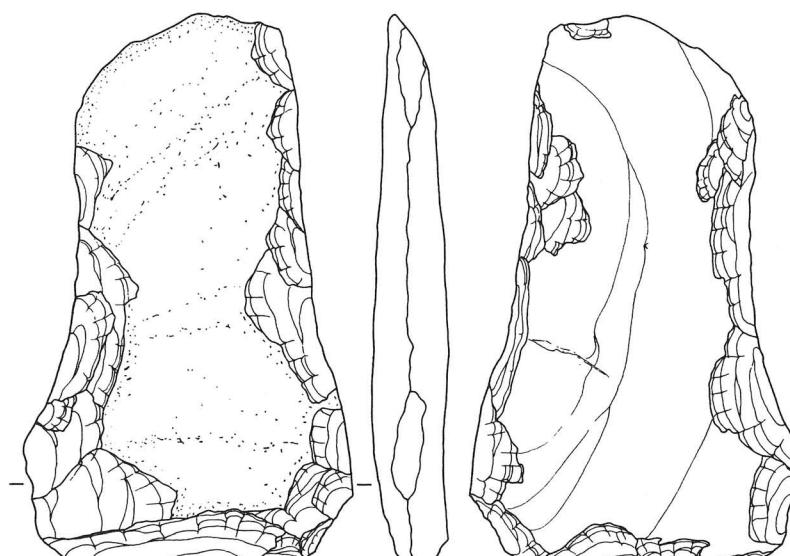
14

0 5 10cm

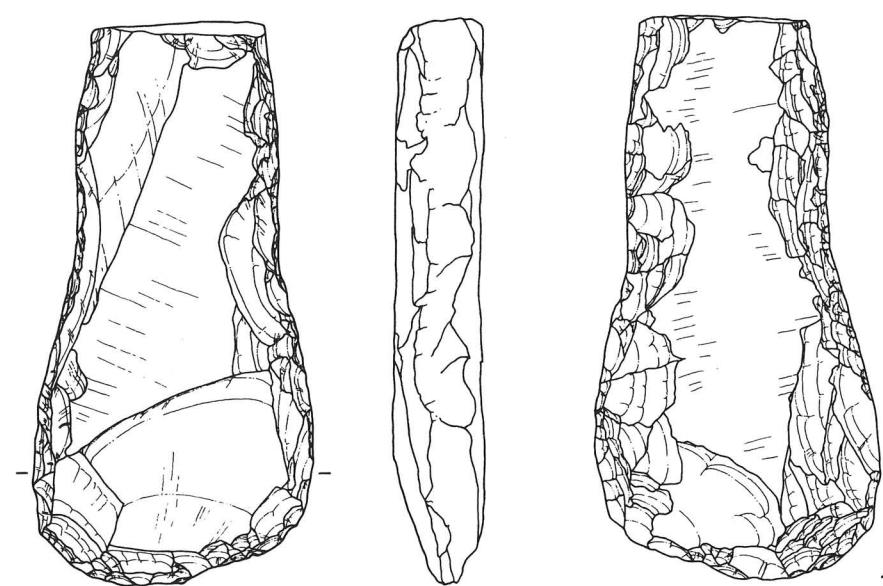
第15図 石器 (4) S = 1 / 2



15



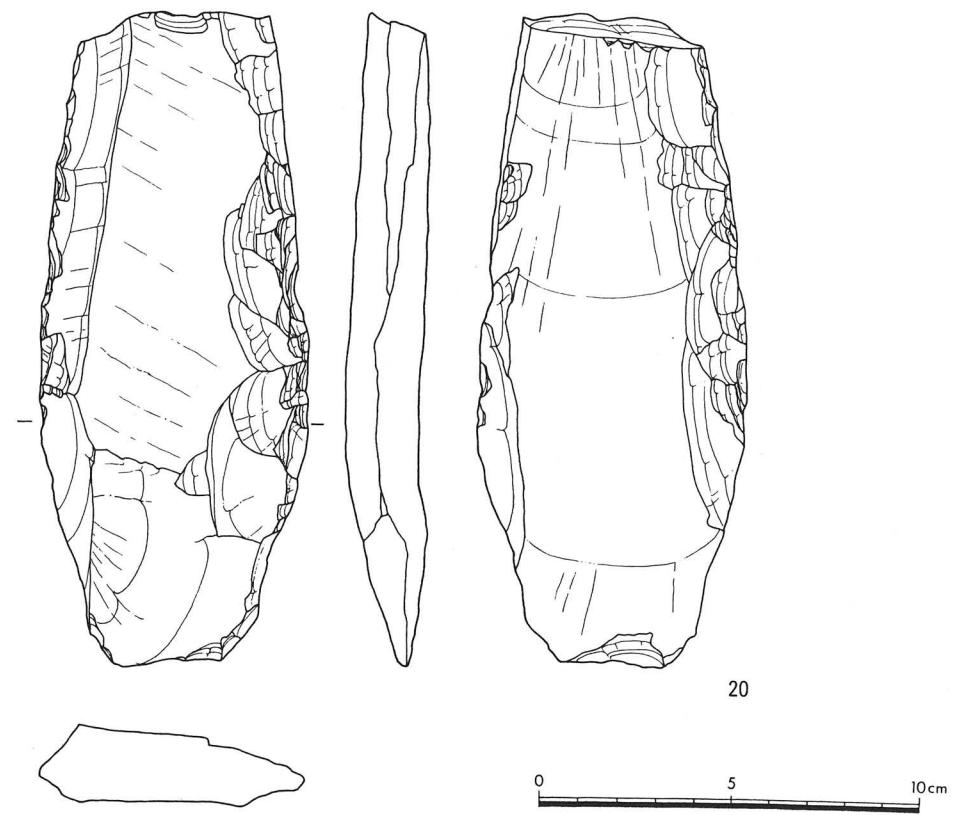
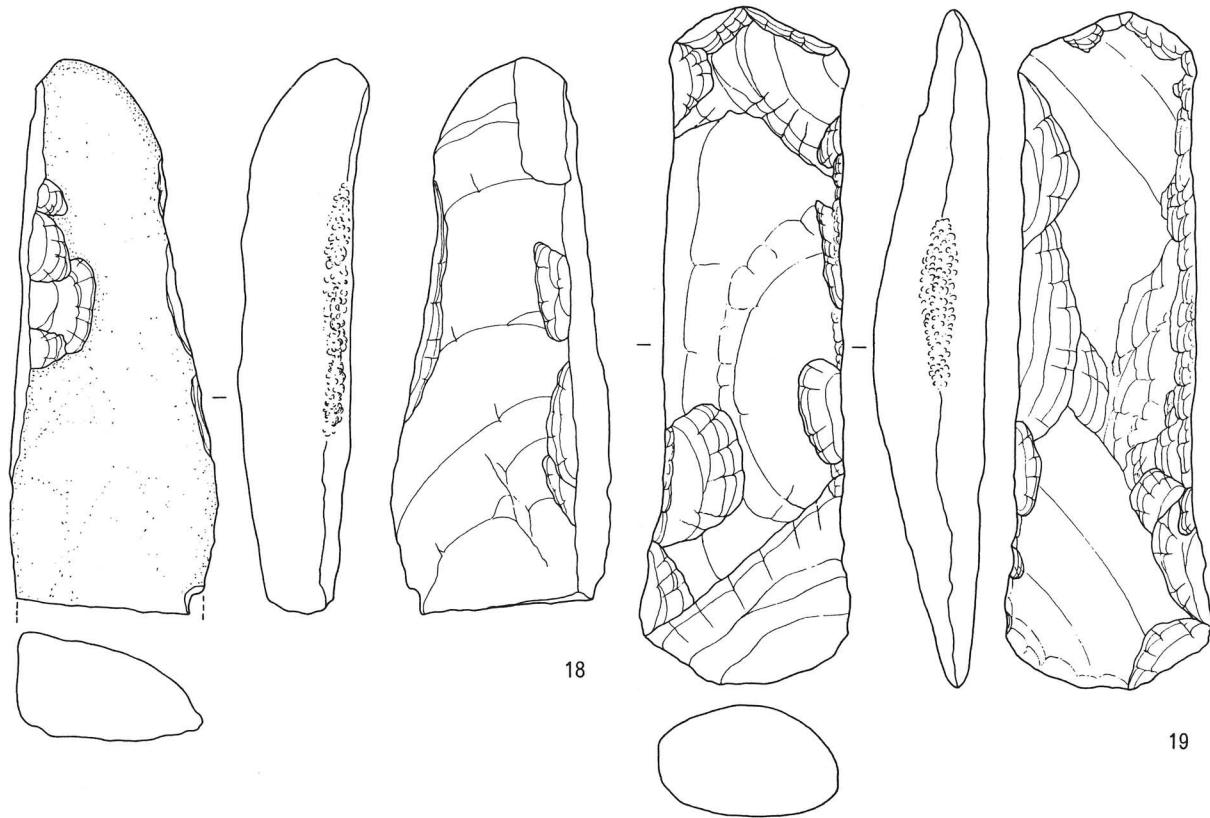
16



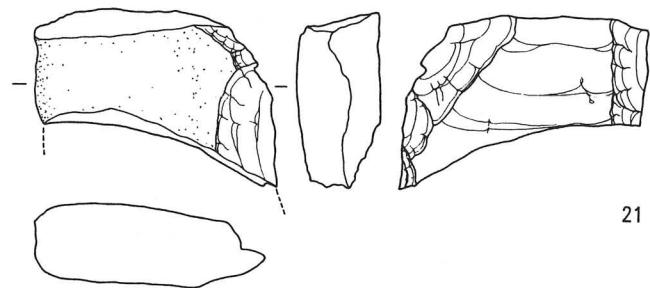
17



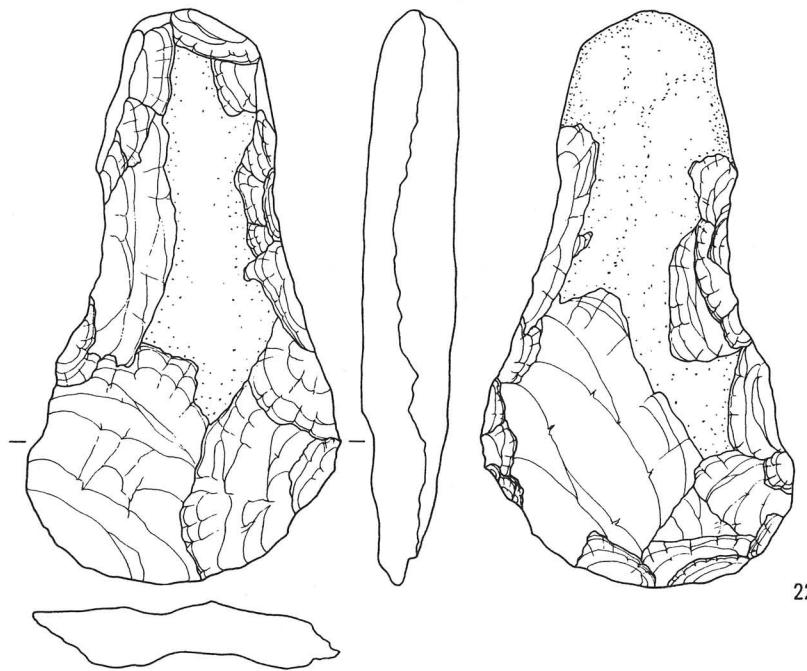
第16図 石器 (5) S = 1 / 2



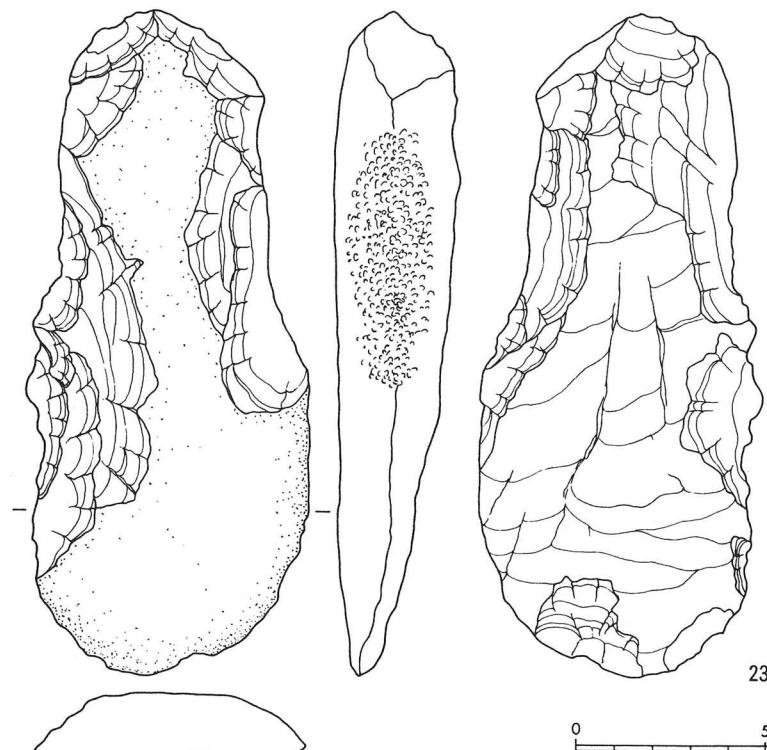
第17図 石器 (6) S = 1 / 2



21



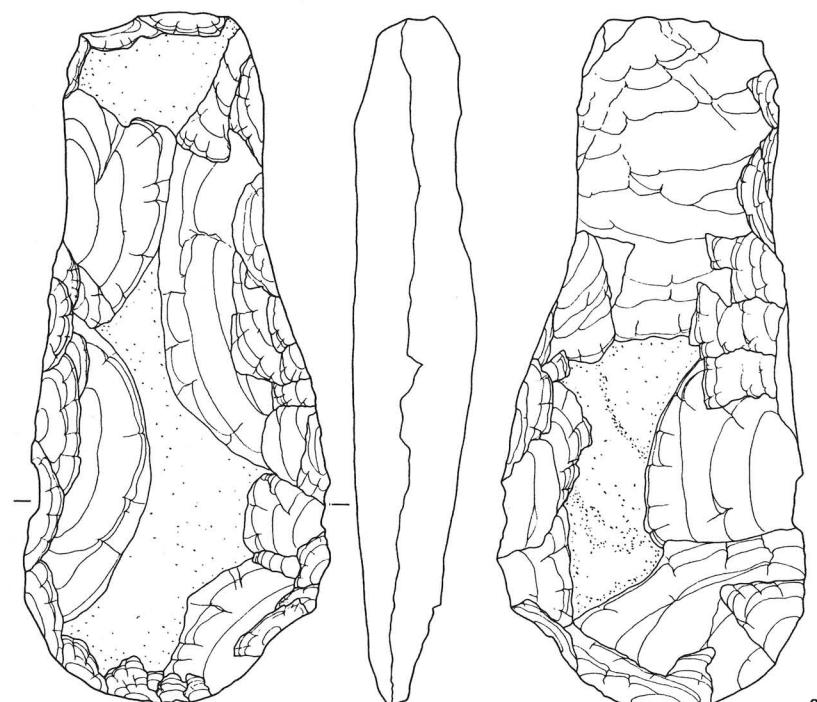
22



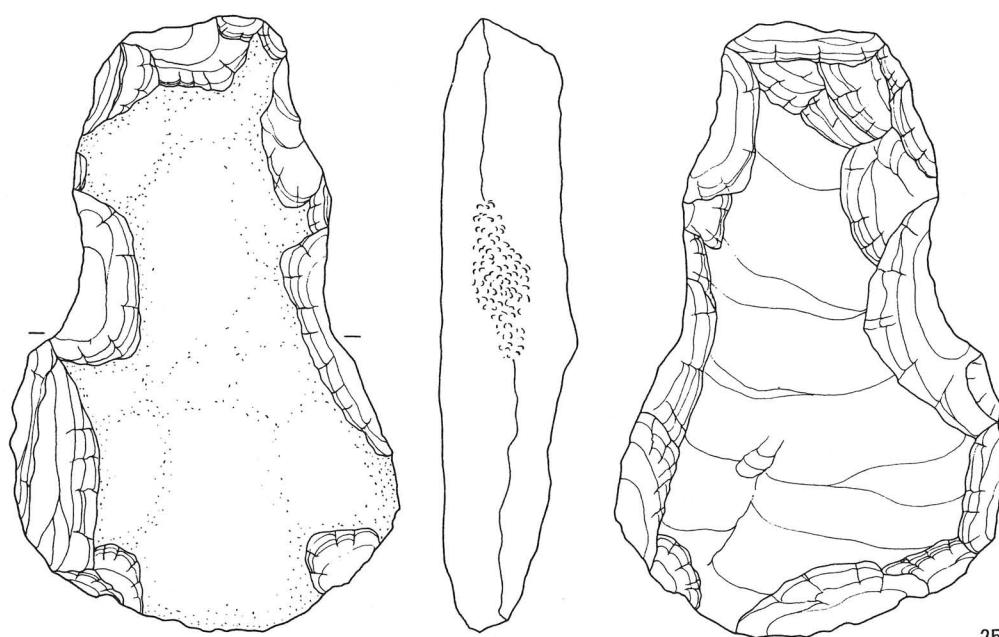
23



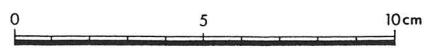
第18図 石器 (7) S = 1 / 2



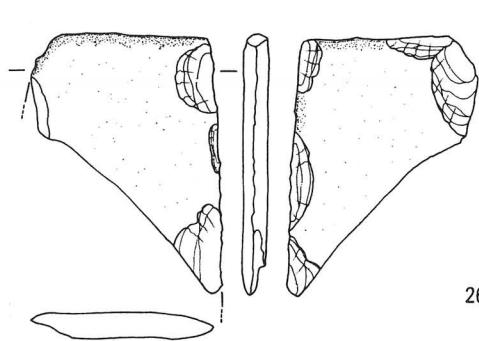
24



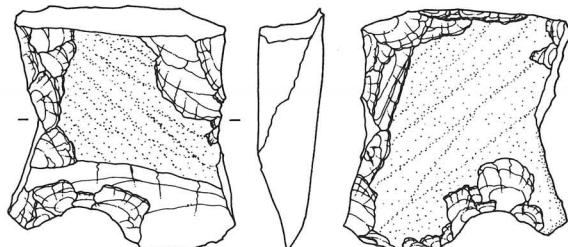
25



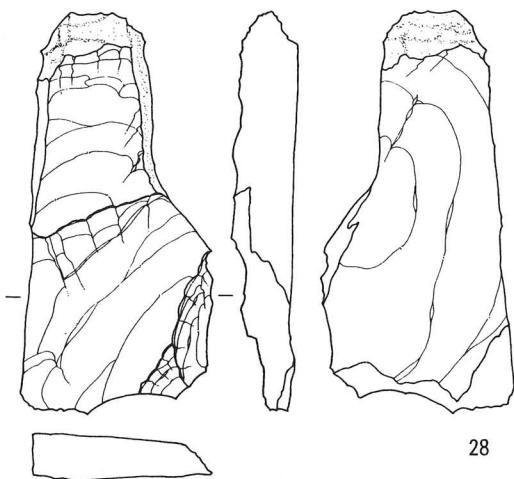
第19図 石器 (8) S = 1 / 2



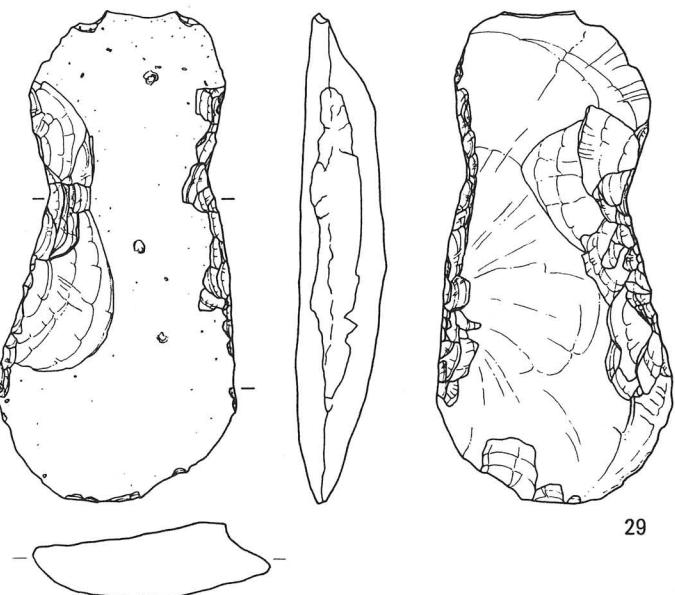
26



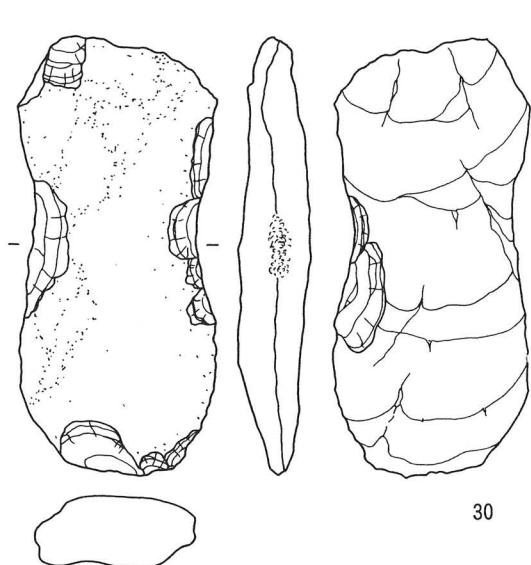
27



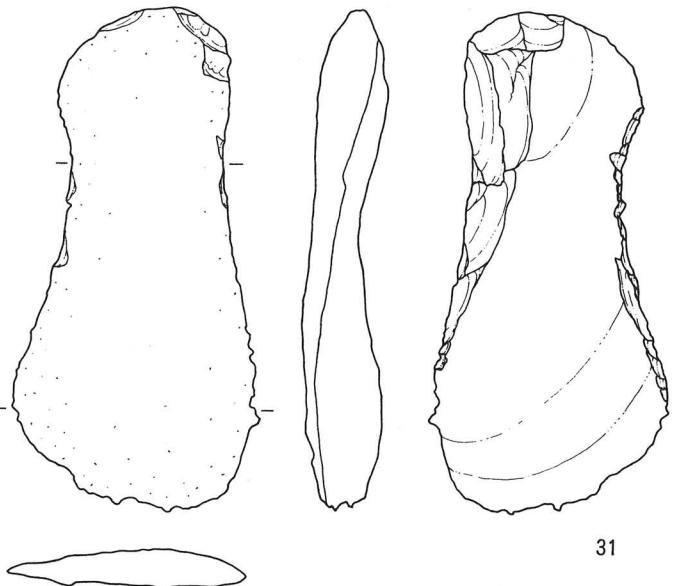
28



29



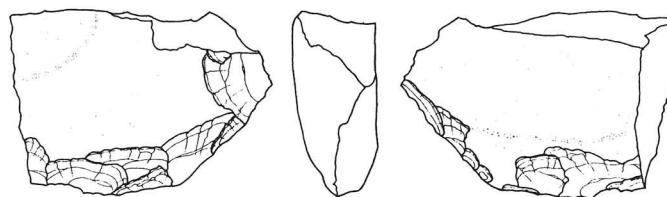
30



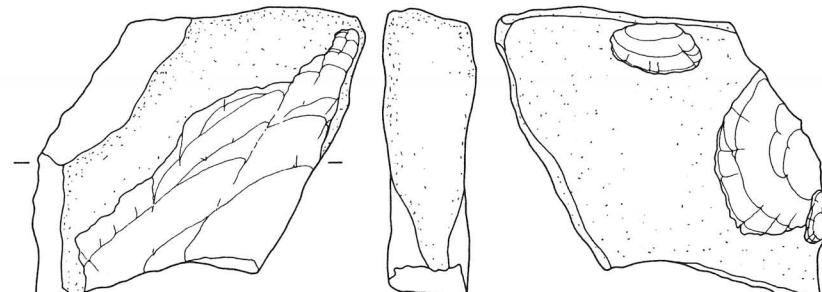
31



第20図 石器 (9) S = 1 / 2



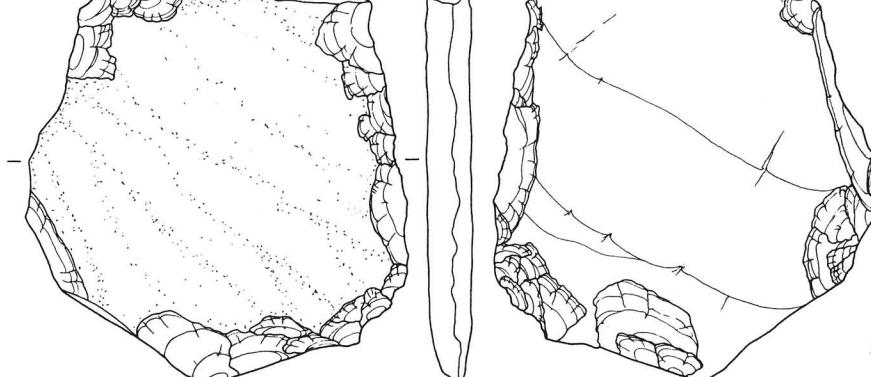
32



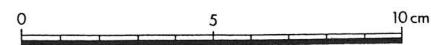
33



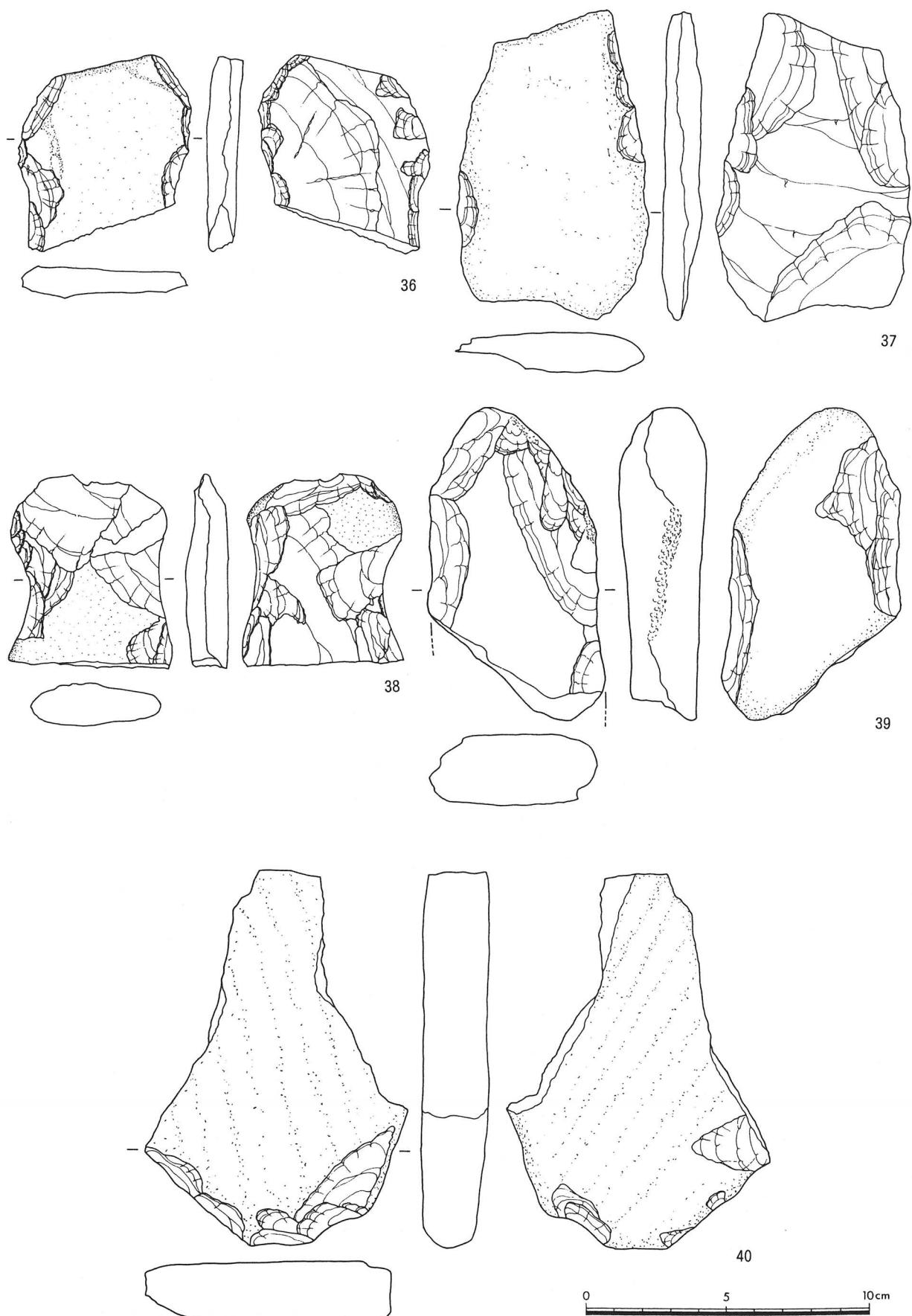
34



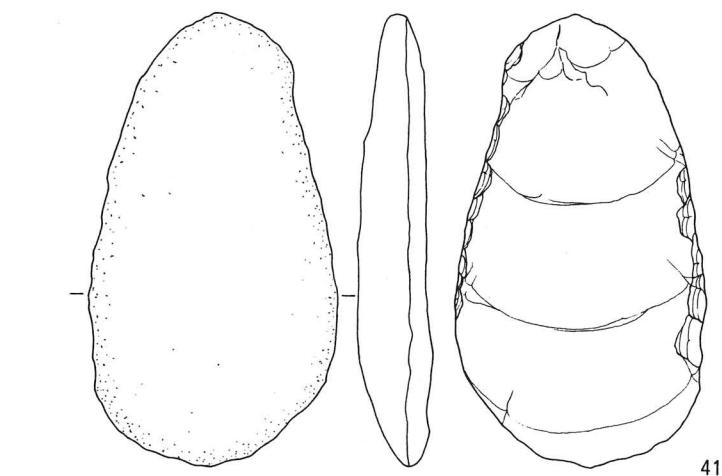
35



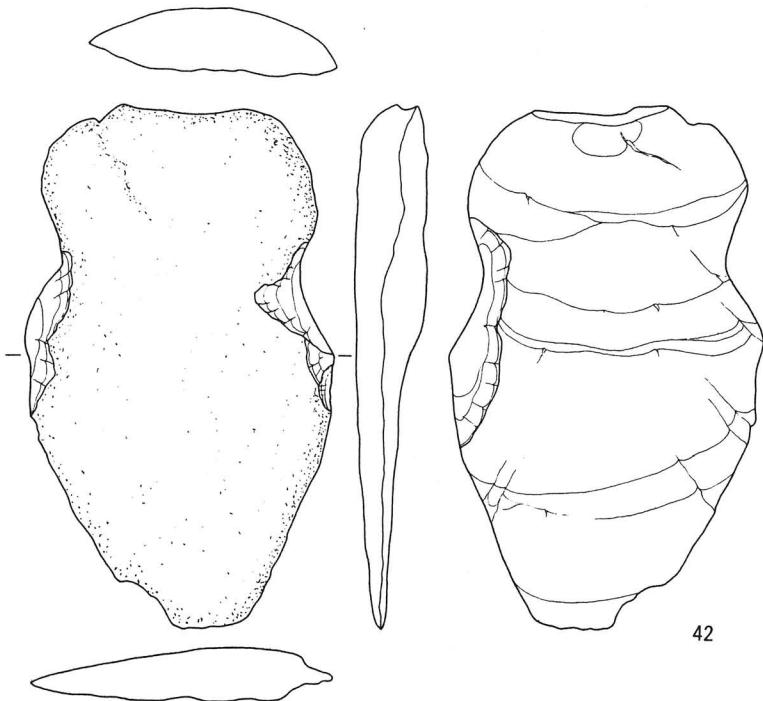
第21図 石器 (10) S = 1 / 2



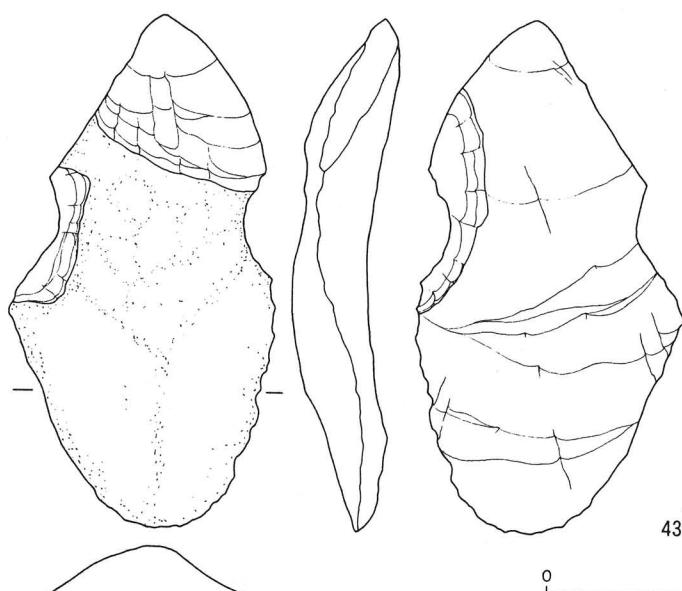
第22図 石器 (11)  $S = 1/2$



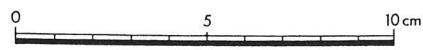
41



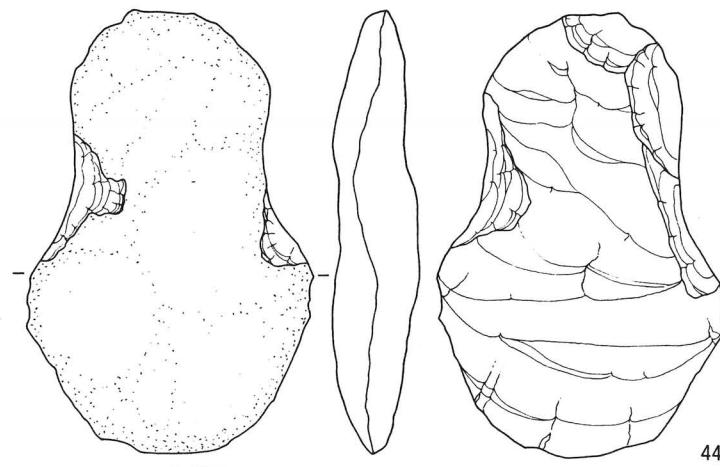
42



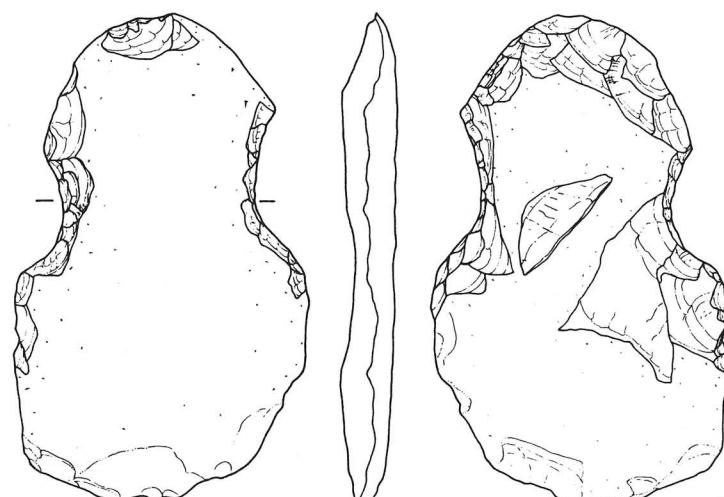
43



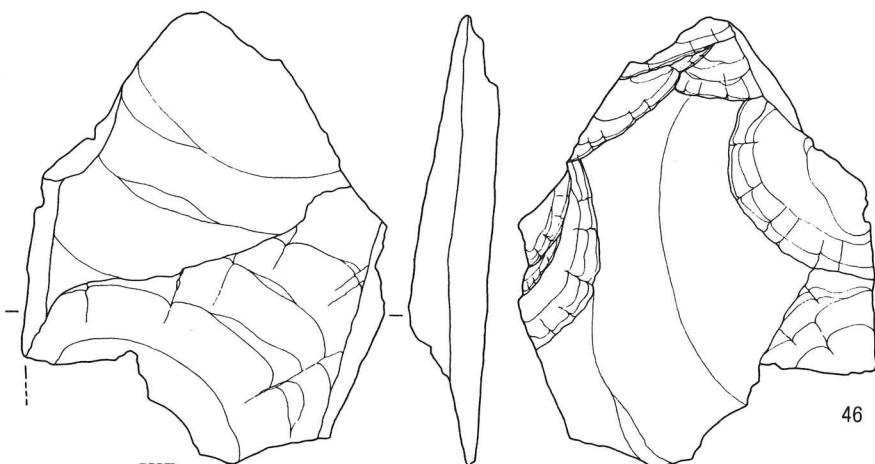
第23図 石器 (12) S = 1 / 2



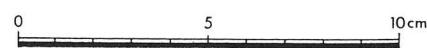
44



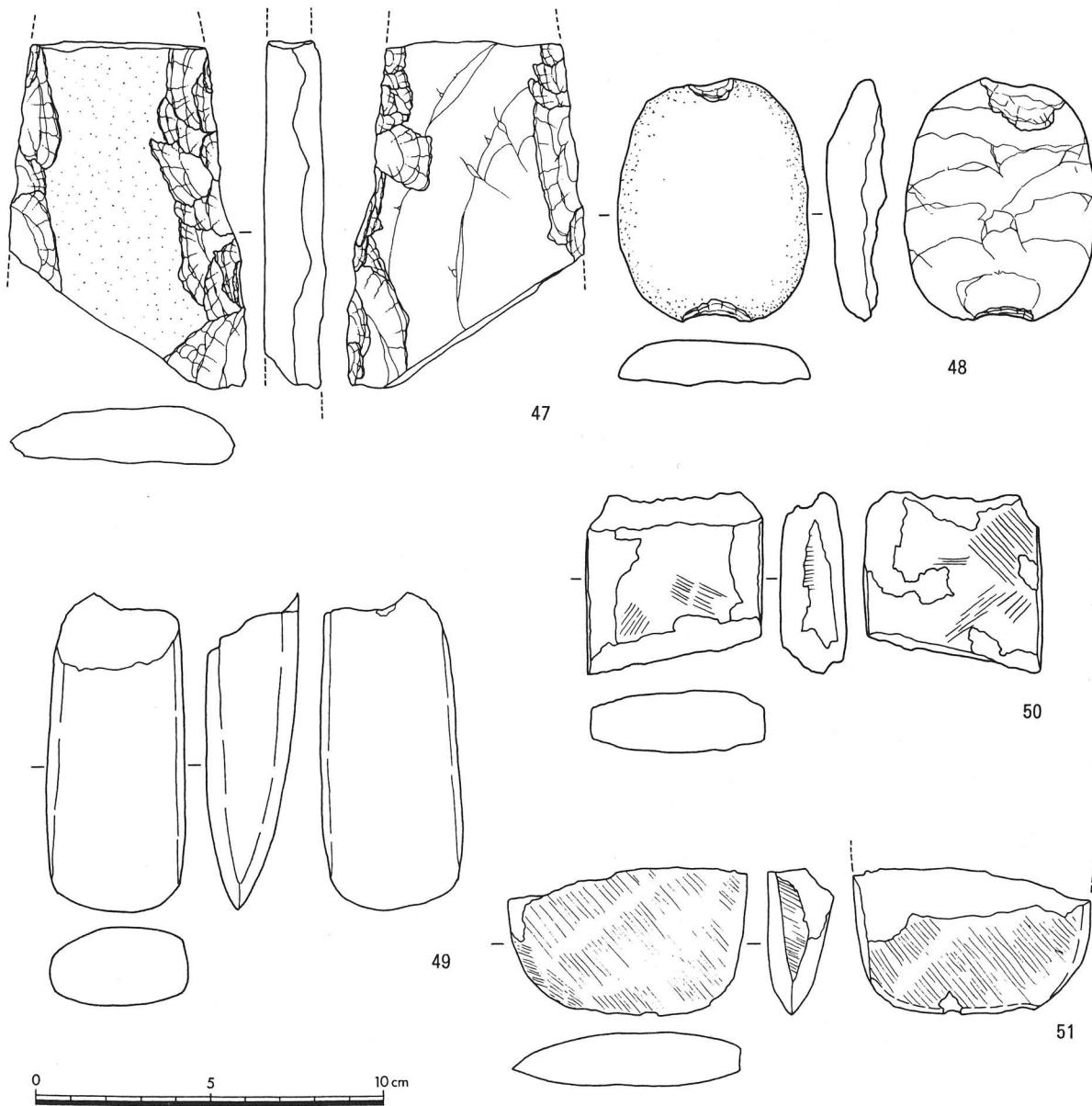
45



46



第24図 石器 (13) S = 1 / 2



第25図 石器 (14) S = 1 / 2

## (2) 弥生～古代

報告書の図版には掲載していないが、調査では、弥生土器や古式土師器と思われる壺や甕の体部や底部片が38点、古代の須恵器の甕の体部破片が1点、土師器の体部片6点といずれも少量かつ小破片ではあるが出土した。出土地点は1地区と2地区が大半である。時期の判別は難しく、摩滅の著しいものもある。

図版	No.	種類	地区	X	Y	最大長	最大幅	最大厚	重量	石質
第12図	1	打製石斧	3	87009	21507	8.20cm	5.70cm	1.90cm	105.8g	凝灰岩
	2	打製石斧	1	87165	21667	6.30cm	6.40cm	1.85cm	80.4g	粘板岩
	3	打製石斧	3	川跡埋土		12.40cm	5.10cm	2.20cm	165g	凝灰岩
	4	打製石斧	1	川跡埋土		13.80cm	5.70cm	2.50cm	250g	粘板岩
	5	打製石斧	3	表採		13.60cm	5.10cm	2.20cm	178g	凝灰岩
第13図	6	打製石斧	2	87090	21582	9.25cm	6.90cm	1.20cm	90g	粘板岩
	7	打製石斧	2	用水跡埋土		12.10cm	6.80cm	2.30cm	245g	粘板岩
	8	打製石斧	2	87098	21594	14.70cm	8.20cm	3.10cm	435g	粘板岩
第14図	9	打製石斧	2	87087	21578	8.70cm	6.85cm	1.40cm	100g	粘板岩
	10	打製石斧	1	87140	21666	13.20cm	7.50cm	2.90cm	338g	粘板岩
	11	打製石斧	2	87081	21577	14.40cm	7.30cm	2.30cm	309g	凝灰岩
第15図	12	打製石斧	2	87128	21618	7.50cm	8.70cm	1.90cm	115g	粘板岩
	13	打製石斧	1	87144	21666	10.60cm	7.60cm	2.85cm	235g	粘板岩
	14	打製石斧	2	87098	21594	15.90cm	9.10cm	3.60cm	444g	粘板岩
第16図	15	打製石斧	3	87043	21536	7.50cm	7.40cm	1.40cm	136g	粘板岩
	16	打製石斧	2	87064	21583	14.80cm	8.70cm	2.10cm	325g	粘板岩
	17	打製石斧	3	87021	21523	15.00cm	7.50cm	2.30cm	372g	粘板岩
第17図	18	打製石斧	1	川跡埋土		14.70cm	2.70cm	3.50cm	325g	凝灰岩
	19	打製石斧	3	川跡埋土		18.00cm	5.50cm	3.10cm	355g	凝灰岩
	20	打製石斧	3	87001	21492	16.90cm	7.00cm	2.10cm	329g	粘板岩
第18図	21	打製石斧	2	87002	21502	4.60cm	6.40cm	2.20cm	80g	凝灰岩
	22	打製石斧	3	川跡埋土		15.30cm	8.30cm	2.60cm	310g	粘板岩
	23	打製石斧	3	87049	21549	17.60cm	7.50cm	3.40cm	435g	蛇紋岩
第19図	24	打製石斧	3	87011	21513	18.30cm	8.20cm	3.25cm	520g	粘板岩
	25	打製石斧	2	87091	21577	16.30cm	10.30cm	3.65cm	700g	凝灰岩
	26	打製石斧	1			6.90cm	5.10cm	0.70cm	35g	凝灰岩
第20図	27	打製石斧		廃土		6.40cm	5.90cm	1.75cm	90g	粘板岩
	28	打製石斧	3	87002	21502	10.60cm	5.10cm	1.80cm	105g	粘板岩
	29	打製石斧	3	87021	21523	13.00cm	6.20cm	2.30cm	208g	凝灰岩
	30	打製石斧	3	87054	21546	11.60cm	5.30cm	2.00cm	150g	凝灰岩
	31	打製石斧	3	87054	21545	13.30cm	6.20cm	1.20cm	143g	凝灰岩
第21図	32	打製石斧	3	87017	21511	4.90cm	6.80cm	2.50cm	105g	粘板岩
	33	打製石斧	3	87035	21542	7.80cm	8.65cm	2.50cm	200g	粘板岩
	34	打製石斧	1	87151	21655	9.10cm	9.00cm	1.90cm	150g	粘板岩
	35	打製石斧	3	87022	21532	10.35cm	10.10cm	1.24cm	190g	粘板岩
第22図	36	打製石斧	3	廃土		7.05cm	6.15cm	1.45cm	209g	粘板岩
	37	打製石斧	2	表採		11.00cm	6.80cm	1.90cm	150g	凝灰岩
	38	打製石斧	2	87084	21572	6.90cm	5.80cm	1.50cm	85g	粘板岩
	39	打製石斧	3	87007	21500	11.10cm	6.20cm	3.50cm	270g	粘板岩
	40	打製石斧	1	87131	21659	13.30cm	9.40cm	2.45cm	365g	粘板岩
第23図	41	打製石斧	2	87076	21569	12.00cm	6.60cm	2.10cm	200g	凝灰岩
	42	打製石斧	3	87001	21503	13.95cm	8.15cm	2.00cm	240g	凝灰岩
	43	打製石斧	1	87155	21665	13.65cm	7.00cm	2.70cm	235g	凝灰岩
第24図	44	打製石斧	3	87005	21491	11.70cm	7.50cm	2.30cm	235g	凝灰岩
	45	打製石斧	1	87167	21673	13.11cm	7.80cm	1.40cm	154g	粘板岩
	46	打製石斧	2	87107	21600	12.00cm	9.70cm	2.40cm	190g	粘板岩
第25図	47	打製石斧	3	86993	21508	10.10cm	6.80cm	1.30cm	170g	粘板岩
	48	石錐	3	87056	21548	7.00cm	5.50cm	1.70cm	85g	
	49	磨製石斧	1			9.20cm	4.00cm	2.80cm	150g	凝灰岩
	50	磨製石斧	2	87077	21566	5.20cm	5.10cm	1.90cm	90g	蛇紋岩
	51	磨製石斧	2	87062	21572	4.20cm	6.90cm	1.90cm	85g	蛇紋岩
写真図版		石皿	3	87042	21539	32.00cm	22.00cm	6.30cm	7.0kg	砂岩

表1. 出土石器計測表

### (3) 中・近世（鎌倉～江戸時代）

#### 1区川跡出土遺物（第26図1～9）

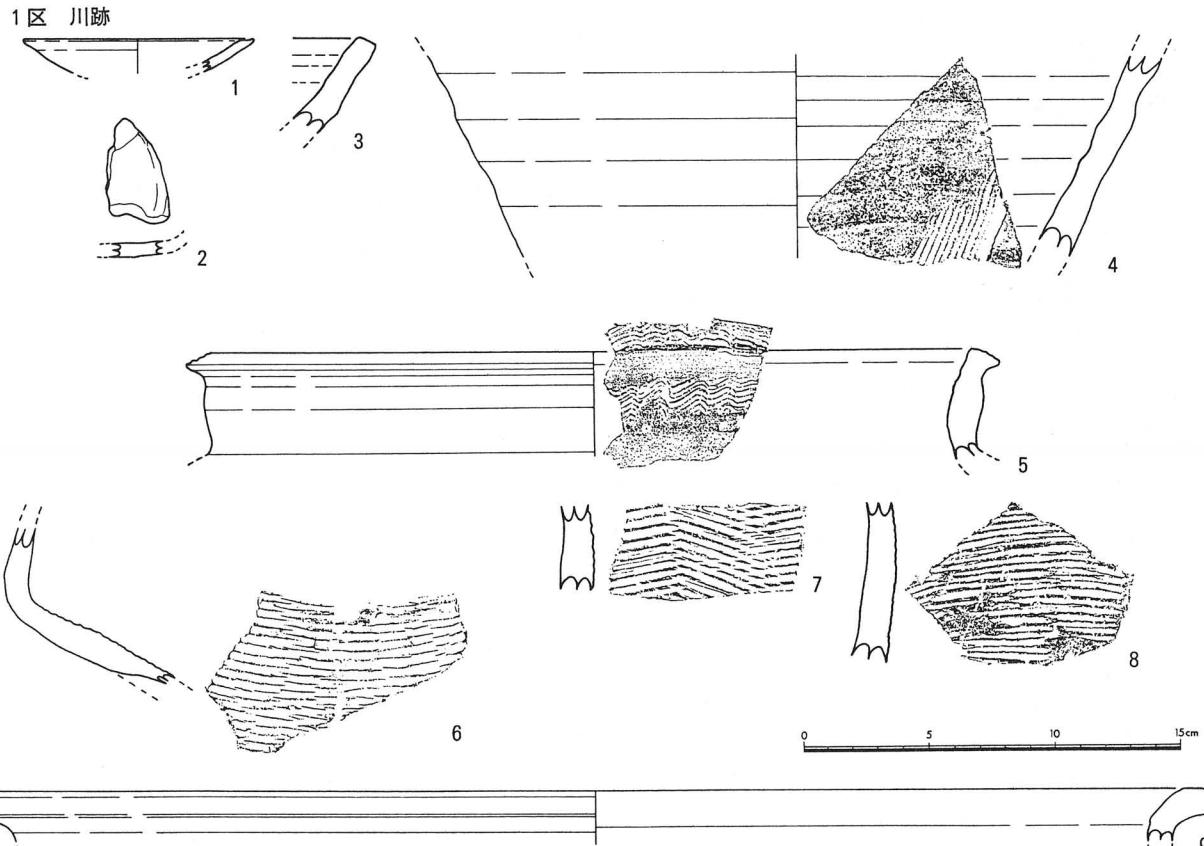
##### ①土師器皿（1・2）

1は口径9.0cmを測る。非轆轤成形であり、口縁部を一段横撫です。口縁部は外反し、端部を外上方へ小さくつまみ上げる。焼成は酸化軟質であり、色調は褐色を呈す。胎土は砂粒をわずかに含む。16世紀前半のものである。

2は底部破片である。轆轤成形であり、外面を回転糸切りによって切り離したと推察する。内面にはほぼ全面に煤が付着する。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土は石英粒などを含む。

##### ②珠洲（3～9）

3は擂鉢である。口縁端部は断面方頭状を呈し、外傾する面を形成する。焼成は還元軟質であり、色調は灰白色を呈す。胎土は砂粒を多く含み、海綿状骨針を含む。珠洲IV期に属し、14世紀代のものである。破片の角は摩滅している。



第26図 1区川跡、2区用水跡出土遺物 (S = 1 / 3)

1・2 土師器皿, 3～9 珠洲, 10・11 越中瀬戸, 12 肥前系陶器

4は擂鉢の体部破片である。単位幅2.6cmあたり11目の卸目を確認できる。1目の幅は2.5mmである。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒を多く含み、海綿状骨針を含む。

5は壺である。口径29.8cmを測る。口縁部は頸部より緩く内湾しながらたちあがり、端部は断面冠頭形を呈す。口縁端部外面と頸部内面に櫛目波状文を施す。焼成は還元硬質であるが、内胎はやや軟質である。色調は灰色を呈す。胎土は砂粒をわずかに含む。13世紀代のものであろう。

6は壺T種の頸部から肩部付近の破片である。頸部は長頸と推定でき、緩く内湾しながら外上方へたちあがる。外面に3cmあたり9目の平行叩きを施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。

7は壺T種の体部破片である。外面に3cmあたり9目の平行叩きを綾杉状に施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。

8は壺甕類の体部破片である。外面に3cmあたり9目の平行叩きを施す。焼成は還元やや軟質であり、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。破片の角は摩滅している。

9は甕である。口径46.6cmを測る。口縁部は大きく内湾し、端部は肥厚して丸くおさめる。焼成は還元軟質である。色調は灰色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。13世紀後半のものであろう。

## 2区用水跡出土遺物（第26図10～12）

### ①越中瀬戸（10・11）

10は内禿皿である。高台径4.1cm、高台高0.2cmを測る。外面に浅黄色の釉が僅かにかかり、底部内面には重ね焼き痕が残存する。高台部を削り出して作出す。焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈す。胎土は石英粒を含む。17世紀前半のものである。摩耗し、破片の角はすり減っている。

11は小壺である。口径12.1cmを測る。体部は外湾し、口縁部はやや内湾ぎみにたちあがり、端部を上方へ丸くおさめる。内外面に暗赤褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、色調は浅黄色あるいは、灰白色を呈す。胎土は砂粒をわずかに含む。

### ②肥前系陶器

12は唐津皿である。口径22.0cmを測る。口縁部は内湾ぎみに外上方へのび、端部付近でたちあがる。端部は丸くおさめる。内外面に灰色の藁灰釉を施し、端部周辺にオリーブ灰色の灰釉を二重がけする。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈す。胎土はやや密である。17世紀代のものであろう。

## 3区川跡出土遺物（第27図1～23）

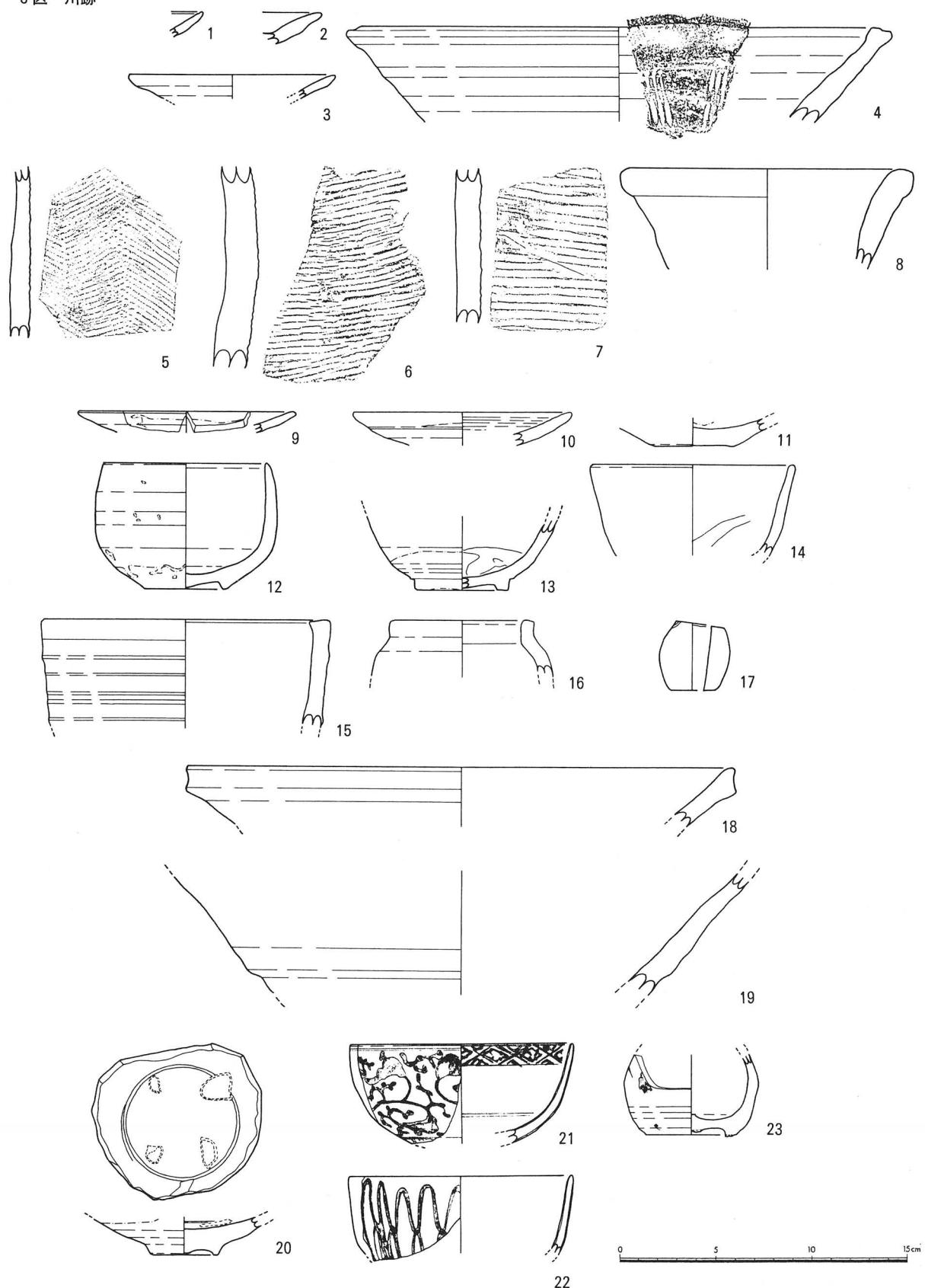
### ①土師器皿（1～3）

1は口縁部破片である。外反し、端部を上方へ小さくつまみ上げる。非輦轆成形であり、口縁部を一段横撫です。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈す。胎土は石英粒を含む。16世紀前半のものである。

2は口縁部破片である。外反し、端部を丸くおさめる。器壁は比較的厚い。非輶轆成形であり、口縁部を二段横撫です。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈す。胎土は砂粒を多く含み、橙色粒、角閃石を含む。15～16世紀代のものである。

3は口径10.5cmを測る。口縁部は外反し、端部外面に面を形成する。非輶轆成形であり、口縁部を二段横撫です。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈す。胎土は石英粒を含む。15～16世紀代のものである。

3区 川跡



第27図 3区川跡出土遺物 ( $S = 1/3$ )

1~3 土師器皿, 4~7 珠洲, 8 越前, 9~19 越中瀬戸, 20~23 肥前系陶磁器

## ②珠洲（4～7）

4はすり鉢である。口径 26.1cm を測る。口縁端部は断面方冠頭形を呈す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒を多く含み、径 2～3 mm の砂礫も含む。珠洲IV期に属し、14世紀代のものである。

5は壺の体部破片である。外面に 3 cmあたり 11 目の平行叩きを綾杉状に施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒をわずかに含む。

6は壺甕類の体部破片である。外面に 3 cmあたり 10 目の平行叩きを施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒をわずかに含み、径 7 mm の砂礫を 1 個含む。

7は甕の体部破片である。外面に 3 cmあたり 7 目の平行叩きを施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。

## ③越前（8）

8は壺である。口径 13.8cm を測る。口縁部は内湾ぎみに外反し、端部は丸く肥厚する。焼成は酸化硬質であり、色調はにぶい赤褐色を呈すが、内胎はにぶい褐色を呈す。胎土は石英粒などを多く含む。15世紀後半のものであろう。破片の角は摩滅している。

## ④越中瀬戸（9～19）

9、10は皿である。口径はそれぞれ 11.0cm、11.3 cmを測る。口縁部は内湾ぎみに外反し、端部を丸くおさめる。9は内外面に浅黄色の灰釉を、10は内外面に暗赤褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈す。胎土は石英粒を含む。17世紀代のものであろう。

11は皿である。底径 5.0cm を測る。底部外面を回転糸切りによって切り離す。内面に黒褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土は橙色粒、石英粒を含む。18世紀代のものであろう。

12は丸碗である。口径 8.3cm、高台径 4.2cm、器高 6.5cm を測る。口縁部は外湾ぎみに上方にたちあがり、端部はやや尖りぎみに丸くおさめる。高台部は削り込んで作出する。また重ね焼きの結果、接地部分を剥落している。内外面に黒色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、色調はにぶい黄褐色を呈す。胎土は砂粒をわずかに含み、径 2 mm の砂礫を 1 個含む。

13は碗である。高台径 4.9cm、高台高 0.6cm を測る。高台部は削り出して作出する。また重ね焼きの結果、接地部分に釉や粘土が付着している。内外面に褐色の鉄釉を施し、部分的に厚く釉だれする。焼成は良好であり、灰白色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。

14は碗である。口径 10.2cm を測る。口縁部は内湾ぎみに外反し、端部を丸くおさめる。内外面に暗赤灰色の鉄釉を施し、内面下部に白色の釉を筆塗りする。内外面ともに二次的に被熱している。焼成はやや不良であり、色調は浅黄橙色を呈す。胎土は砂粒をわずかに含み、橙色粒を含む。

15は匣鉢である。口径 12.8cm を測る。口縁部は外湾ぎみに上方にたちあがり、端部は僅かに内傾して面を形成する。外面に暗オリーブ褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。

16は小壺（茶入）である。口径 6.4cm を測る。体部は内湾し、口縁部は上方へたちあがり、端部を丸くおさめる。外面の釉は剥落している。焼成はやや不良であり、色調はにぶい橙色を呈す。胎土は砂粒を多く含み、石英粒を含む。

17は陶錘である。孔径約 1.3cm、器高 5.6cm を測る。外面に暗オリーブ褐色の灰釉がかかる。焼成は良好で、色調は灰色を呈す。胎土は砂粒を多く含み、石英粒を含む。摩耗は著しく釉が一部剥げる。

18はすり鉢である。口径28.0cmを測る。口縁部は外反し、端部は断面三角形の口縁帯を形成する。内面に1目の幅2mmの卸目を4目確認できる。内外面に暗赤褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、浅黄橙色を呈す。胎土は砂粒を多く含む。

19はすり鉢の体部破片である。内面に単位幅1.8cmあたり11目の卸目を2条確認できる。1目の幅は2mmである。内外面に暗赤褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、色調は橙色を呈す。胎土は砂粒を多く含み、砂礫をわずかに含む。

#### ⑤肥前系陶磁器（20～23）

20は唐津皿である。高台径3.0cm、高台高0.5cmを測る。高台端部は重ね焼きの結果、1部分欠けている。内面に胎土目跡を4個残す。内外面にオリーブ黒色の灰釉を施す。焼成は良好で、色調は灰色あるいは、褐色を呈す。胎土は石英粒などをわずかに含む。16世紀末から17世紀代のものである。

21は伊万里碗である。口径11.4cmを測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部はやや尖りぎみに丸くおさめる。外面に唐草文、内面に菱文と界線を描く。焼成は良好である。胎土は密である。18～19世紀代のものである。

22は伊万里碗である。口径11.5cmを測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部はやや尖りぎみに丸くおさめる。外面にややくずれた一重網目文を描く。焼成は良好である。胎土は密である。17世紀後半のものである。

23は伊万里瓶類である。底径4.7cmを測る。高台端部や底部外面は重ね焼きの結果、砂が付着している。外面に文様を描く。焼成は良好である。胎土は密である。18世紀代のものであろう。

#### 包含層出土遺物（第28～31図）

##### 1区（第28・29図）

###### ①土師器皿（1～14）

1は口縁部破片である。内湾ぎみに上外方へのび、端部はやや尖る。輶轆成形であり、一段撫である。内面に煤が付着する。焼成は酸化軟質であり、色調は橙色を呈する。胎土は精良である。15世紀代のものである。

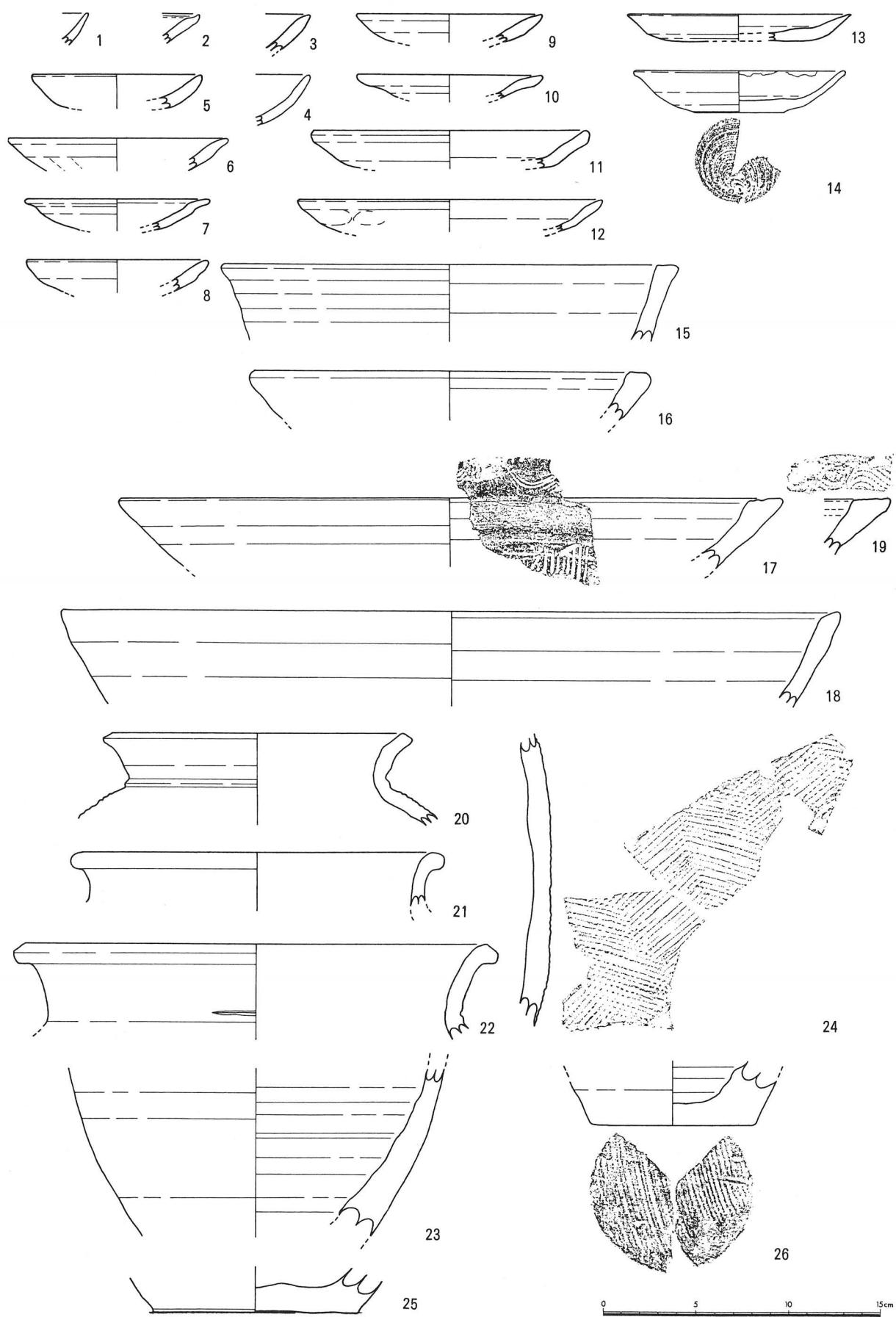
2は口縁部破片である。外反し、端部を上方へつまみ出して、外面に面を形成する。非輶轆成形であり、一段撫である。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい黄褐色を呈する。胎土は石英粒などを含む。16世紀前半のものである。

3は口縁部破片である。内湾して上外方へのび、端部をやや尖らせ、外面に面を形成する。器壁は比較的厚い。非輶轆成形であり、一段撫である。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒、角閃石粒を含み、砂粒をわずかに含む。15世紀後半のものである。

4は口縁部破片である。内湾して上外方へのび、端部を丸くおさめる。非輶轆成形であり、一段撫である。焼成は酸化軟質であり、浅黄橙色を呈する。胎土は黄橙色粒、石英粒を含む。13世紀後半～14世紀初頭のものである。

5は口径9.0cmを測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部は丸くおさめる。器壁は比較的厚い。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫である。焼成は酸化軟質であり、にぶい橙色を呈する。胎土は橙色粒、石英粒などの砂粒を含む。13世紀後半のものである。

6・7はそれぞれ口径11.7cm、9.6cmを測る。口縁部付近を強く撫で、大きく外折させる。端部は丸くおさめる。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫である。6の底部外面に上方へ撫で上げた痕跡を



第28図 1区出土遺物① (S = 1 / 3) 1~14 土師器皿, 15~26 珠洲

残す。焼成は酸化軟質であり、浅黄橙色を呈する。胎土は酸化軟質であり、黄橙色粒、石英粒、角閃石粒を含み、砂粒を多く含む。15世紀後半のものである。

8は口径9.7cmを測る。口縁部付近を強く撫で、外面を屈曲させる。端部はやや丸くおさめる。器壁は比較的厚い。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫です。口縁端部の内外面に煤が付着する。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒を含む。15世紀後半のものである。

9は口径9.8cmを測る。口縁部付近で弱く外反する。器壁は比較的厚い。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫です。焼成は酸化軟質であり、色調は明黄褐色を呈する。胎土は石英粒、角閃石粒を含み、砂粒を多く含む。15世紀後半のものである。

10は口径9.9cmを測る。口縁部は外湾ぎみに上外方へのび、端部付近は肥厚する。端部は丸くおさめる。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫です。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい橙色を呈する。胎土は石英粒を含み、砂粒をわずかに含む。16世紀前半のものである。

11は口径14.6cmを測り、大型の皿である。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部上方を弱く上方へつまみ出して、外面に面を形成する。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫です。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色である。胎土は石英粒を含み、砂粒を含む。13世紀前半のものである。

12は口径16.3cmを測り、大型の皿である。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部外面に面を形成する。端部はやや尖る。非輶轆成形で、口縁部を一段撫で、部分的に指頭痕を残す。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は橙色粒、石英粒を含む。16世紀前半のものである。

13は口径11.8cm、底径8.4cm、器高1.4cmを測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部を尖らせる。底部との境は明瞭である。輶轆成形であり、口縁部を一段撫です。底部は回転範切りで切り離した後、撫でて調整する。内面を不整方向に撫でて調整する。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい橙色あるいは、橙色を呈する。胎土は精良である。外面の摩滅が著しい。15世紀代である。

14は口径10.1cm、底径8.7cm、器高2.2cmを測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部を丸くおさめる。底部との境は明瞭である。輶轆成形であり、口縁部を二段撫です。底部は回転糸切りによって切り離す。口縁端部の内外面に煤が付着する。色調は浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒を含み、砂粒をわずかに含む。焼成は良好で、堅緻なことから近世以降の陶器と考えられる。

以上これらの土器皿は口縁部の形態を見ると、4、5は内湾口縁を持つもので13世紀後半に、6～8は口縁部に強いナデ調整を行い屈曲あるいはくびれさせるもので15世紀後半、9は口縁端部を丸くおさめるもの、10の口縁端部肥厚型と11、12は口縁端部外面に面取りを行うものでともに16世紀前半、1、13はロクロ成形で15世紀代と分類できる。

## ②珠洲（15～29）

15はすり鉢である。口径は24.2cmを測る。口縁端部は上方に面を形成し、外方に少し引き出す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は赤色粒、石英粒、海綿状骨針を含み、砂粒を多く含む。珠洲IV期に属し、13世紀末から14世紀代のものである。

16はすり鉢である。口径は20.8cmを測る。口縁端部は肥厚し、上方に面を形成する。焼成は還元軟質であり、色調は浅黄色を呈する。胎土は砂粒を多く含む。珠洲IV期に属し、13世紀末から14世紀代のものである。

17はすり鉢である。口径は35.4cmを測る。口縁端部は肥厚し、上方に内傾ぎみの面を形成して、断面三角形状をなす。口縁端面には櫛歯波状文を施す。内面に1目の幅3mmの卸目を10目確認できる。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は海綿状骨針を含み、砂粒を多く含む。珠

洲V期に属し、15世紀前半のものである。

18はすり鉢である。口径は41.6cmを測る。口縁端部はやや肥厚し、上方に内傾した面を形成して、断面三角形状をなす。口縁端面には櫛歯波状文を施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は海綿状骨針を含み、砂粒を含む。珠洲V期に属し、15世紀前半のものである。

19はすり鉢の口縁部破片である。口縁端部は肥厚し、上方に面を形成して、断面三角形状をなす。口縁端面には櫛歯波状文を施す。内面に1目の幅2mmの卸目を5目確認できる。焼成は還元硬質で、色調は灰色を呈する。胎土は海綿状骨針を含み、砂粒を含む。珠洲V期に属し、15世紀前半のものである。

20は壺である。口径は15.6cmを測る。短頸であり、口縁部は外反し上外方へのびる。端部は外へ拡張し、断面方頭状を呈する。肩部外面に1本の幅4mmの平行叩きを施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は海綿状骨針を含む。14世紀代のものであろう。

21は壺である。口径は18.9cmを測る。口縁部は内湾し上外方へのびる。端部は肥厚して外へ屈曲し、断面円頭状を呈する。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は砂粒を含む。14世紀代のものであろう。

22は壺である。口径は24.8cmを測る。長頸であり、口縁部は内湾し上外方へのびる。端部は外へ拡張し、断面円頭ぎみの方頭状を呈する。頸部と肩部の境付近の外面に、籠状工具によるものと思われる痕跡を残す。焼成は還元硬質で、色調は灰色を呈する。胎土は砂粒を多く含む。14世紀代のものであろう。

23は壺の体部下半である。輶轄成形である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は砂粒を含む。

24は壺の体部破片である。3cmあたり11本の平行叩きを綾杉状に施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は砂粒を多く含む。

25・26は壺の底部である。底径はそれぞれ11.0cm、8.9cmを測る。静止糸切りによって切り離した後、25は不整方向に撫でる。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は海綿状骨針を含み、砂粒を含む。

27は甕である。口径48.2cmを測る。口縁端部は断面円頭状を呈する。焼成は還元硬質であり、灰色を呈する。胎土は海綿状骨針を含み、砂粒を多く含む。珠洲V期に属し15世紀前半のものである。

28・29は壺甕類の体部破片である。3cmあたり12～13本の平行叩きを施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は海綿状骨針を含み、砂粒を多く含む。

### ③青磁（30・31）

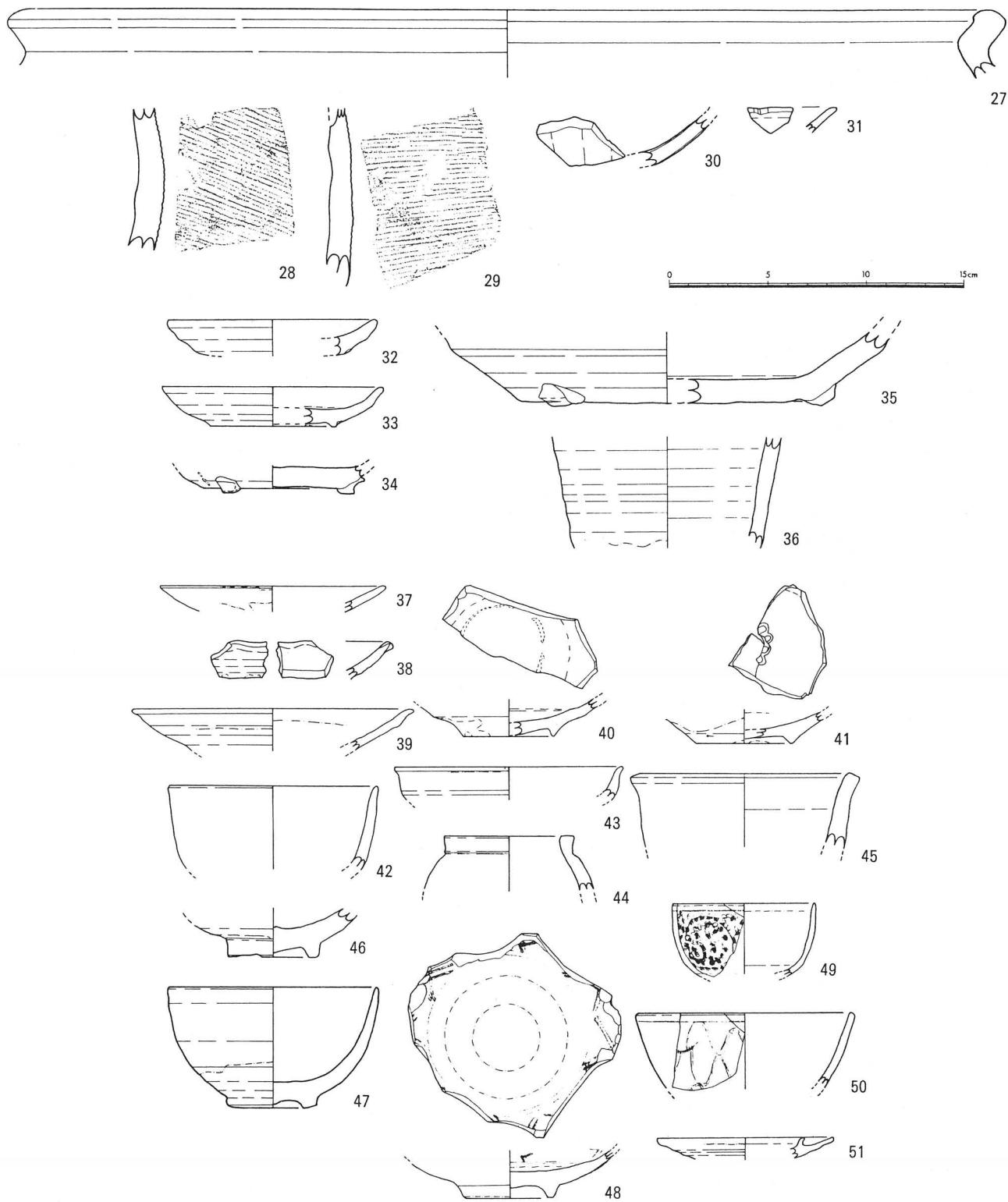
30は椀（龍泉窯系）の体部破片である。内外面に灰オリーブ色の釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。胎土は密である。14世紀代の所産である。

31は椀の口縁部破片である。口唇部に刻みを入れ輪花を呈するもので、内外面に灰オリーブ色の釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。胎土は密である。12世紀後半の所産である。

### ④瀬戸美濃（32～36）

32は皿である。口径10.4cmを測る。外面を回転へら削りの後、回転撫でによって調整する。内外面に浅黄色の灰釉を施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰白色を呈する。胎土は密である。大窯期に属し、16世紀後半代のものであろう。

33は丸皿である。口径11.0cm、底径6.0cm、器高2.0cmを測る。外面を回転へら削りの後、回転



第29図 1区出土遺物② (S = 1 / 3)

27~29 珠洲, 30・31 青磁, 32~36 瀬戸美濃, 37~45 越中瀬戸, 46~51 肥前系陶磁器

撫でによって調整する。内外面に灰オリーブ色の灰釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰白色あるいは、浅黄橙色を呈する。胎土は密である。大窯期に属し、16世紀後半のものである。

34 は香炉の底部である。底径 7.1cm を測る。回転糸切りによって切り離す。脚は低く、つくりが粗製である。貼り付けた際の指頭痕を残す。外面に灰オリーブ色の灰釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。胎土はやや密である。15世紀後半のものであろう。

35 は折縁深皿の底部である。底径 14.8cm を測る。体部外面を回転へら削りの後、回転撫でによって調整する。底部は回転糸切りによって切り離す。脚は低く、つくりが粗製である。貼り付けた際の指頭痕と、工具によってついたと推される押圧痕を残す。内外面に浅黄色の灰釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈する。胎土はやや密である。15世紀末のものであろう。

36 は袋物の体部破片である。内外面を回転撫でによって調整する。外面に明緑灰色の灰釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈する。胎土はやや密である。古瀬戸後期に属すると推す。

#### ⑤越中瀬戸（37～45）

37 は皿である。口径 11.2cm を測る。内外面に浅黄橙色の灰釉を施す。焼成は良好であり、色調は浅黄色を呈す。胎土はやや密であり、石英粒を含む。

38 はひだ皿の口縁部破片である。波状口縁である。内湾ぎみに上外方へのび、端部は断面方頭状に近い、円頭状におさめる。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、色調は浅黄橙色あるいは、灰白色を呈す。胎土はやや密である。

39 は皿である。口径 13.8cm を測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部付近で撫でにより屈曲し外湾する。端部は丸くおさめる。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、灰色を呈す。胎土は密であり、石英粒を含む。

40 は内禿皿の底部である。底径 4.6cm を測る。高台は削りだして作出し、断面三角形状を呈す。釉止めの段を有し、底部内面には重ね焼きの痕跡を残す。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、灰色を呈す。胎土は密であり、石英粒を含む。

41 は内禿皿の底部である。底径 4.7cm を測る。高台は削り込んで作出し、断面三角形状を呈す。底部内面中央に印花文を押印する。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、浅黄色あるいは、にぶい黄橙色を呈す。胎土は密であり、砂粒をわずかに含む。17世紀前半の所産であろう。

42 は丸碗である。口径 10.4cm を測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部付近で屈曲し外方へのびる。端部は丸くおさめる。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、灰白色を呈す。胎土は密である。

43 は向付である。口径 11.5cm を測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部付近で屈曲して外湾する。端部は丸くおさめる。内外面に浅黄色の灰釉を施す。焼成は良好であり、灰白色を呈す。胎土は密である。17世紀前半のものである。

44 は茶入である。口径 5.3cm を測る。体部は内湾し、口縁部は上方へ屈曲する。口縁端部は肥厚し上方に面を形成する。内外面ににぶい赤褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、淡黄色を呈す。胎土はやや粗であり、石英粒を含み、砂粒をわずかに含む。

45 は瓶類である。口径 10.5cm を測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部付近で外湾する。端部は断面方頭状におさめ、外傾する面を形成する。外面に黒褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、浅黄色あるいは、にぶい黄橙色を呈す。胎土は密であり、砂粒をわずかに含む。

#### ⑥肥前系陶磁器（46～51）

46 は唐津碗である。底径は 3.4cm を測る。高台に欠失した部分が 3 個所あり、重ね焼きの結果であると推す。外面を回転削りで調整する。内外面にオリーブ灰色の灰釉を施す。焼成は良好であり、色調はにぶい橙色を呈す。胎土は密である。16 世紀末から 17 世紀初頭のものである。

47 は唐津碗である。口径 10.5cm、底径 3.1cm、器高 6.1cm を測る。内湾ぎみの体部から、口縁部は上外方へのび、端部は尖りぎみに丸くおさめる。底部内面に砂が付着している。外面を回転削りで調整する。内外面に灰オリーブ色の灰釉を施す。焼成は良好であり、色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土はやや密であり、石英粒などの砂粒を多く含む。17 世紀前半のものである。

48 は伊万里皿である。底径は 3.9cm を測る。外面を回転削りで調整する。内外面にやや青みがかかった白色釉を施す。底部内面を蛇の目釉剥ぎし、高台部畳付を釉剥ぎする。内面に二重界線と格子文を描く。焼成は良好であり、胎土は密である。18 世紀代のものである。

49 は伊万里碗である。口径は 7.1cm を測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部尖りぎみに丸くおさめて内面を少し内傾させる。内外面に白色釉を施す。口縁端部を釉剥ぎする。外面に圈線を描き、その間にたこ唐草文を描く。焼成は良好であり、胎土は密である。18 世紀末から 19 世紀初頭のものである。

50 は伊万里碗である。口径は 10.8cm を測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部は丸くおさめる。内外面に白色釉を施す。釉の厚さが比較的薄い。外面に圈線を描き、その下に一重網目文を描く。焼成は良好であり、胎土は密である。17 世紀後半のものである。

51 は信楽系磁器灯明皿である。口径は 5.7cm を測る。外面を回転削りで調整する。内外面に明オリーブ灰色がかかった、白色釉を施す。焼成は良好であり、胎土は密である。

## 2 区（第 30 図）

### ① 土師器皿（1～8）

1 は口縁部破片である。外湾ぎみに上外方へのびる。外面は剥落しているため、調整技法は不明である。非輶轆成形である。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい橙色を呈する。胎土は橙色粒、石英粒を含む。16 世紀代のものである。

2 は口縁部破片である。外湾して上外方へのび、端部付近で撫でのため屈曲する。端部を上方へつまみ出して尖らせ、外面に面を形成する。非輶轆成形であり、一段撫である。焼成は酸化軟質であり、色調は灰褐色あるいは、浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒を含む。16 世紀代のものである。

3 は口縁部破片である。内湾して上外方へのび、端部を丸くおさめる。器壁は比較的厚い。非輶轆成形であり、一段撫である。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は砂粒をわずかに含む。13 世紀前半のものである。

4 は口縁部破片である。内湾ぎみに上外方へのび、端部を断面方頭状ぎみに、丸くおさめる。非輶轆成形であり、一段撫である。焼成は酸化軟質であり、灰褐色あるいは、にぶい黄橙色を呈する。胎土は石英粒、角閃石粒を含む。13 世紀後半のものである。

5 は口径 8.5cm、底径 6.8cm、器高 1.4cm を測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部外面に面を形成する。底部との境は明瞭である。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫である。底部は外面を不整方向に撫でて調整する。焼成は酸化軟質であり、灰黄褐色あるいは、にぶい黄褐色を呈する。胎土は砂粒をわずかに含む。13 世紀前半のものである。

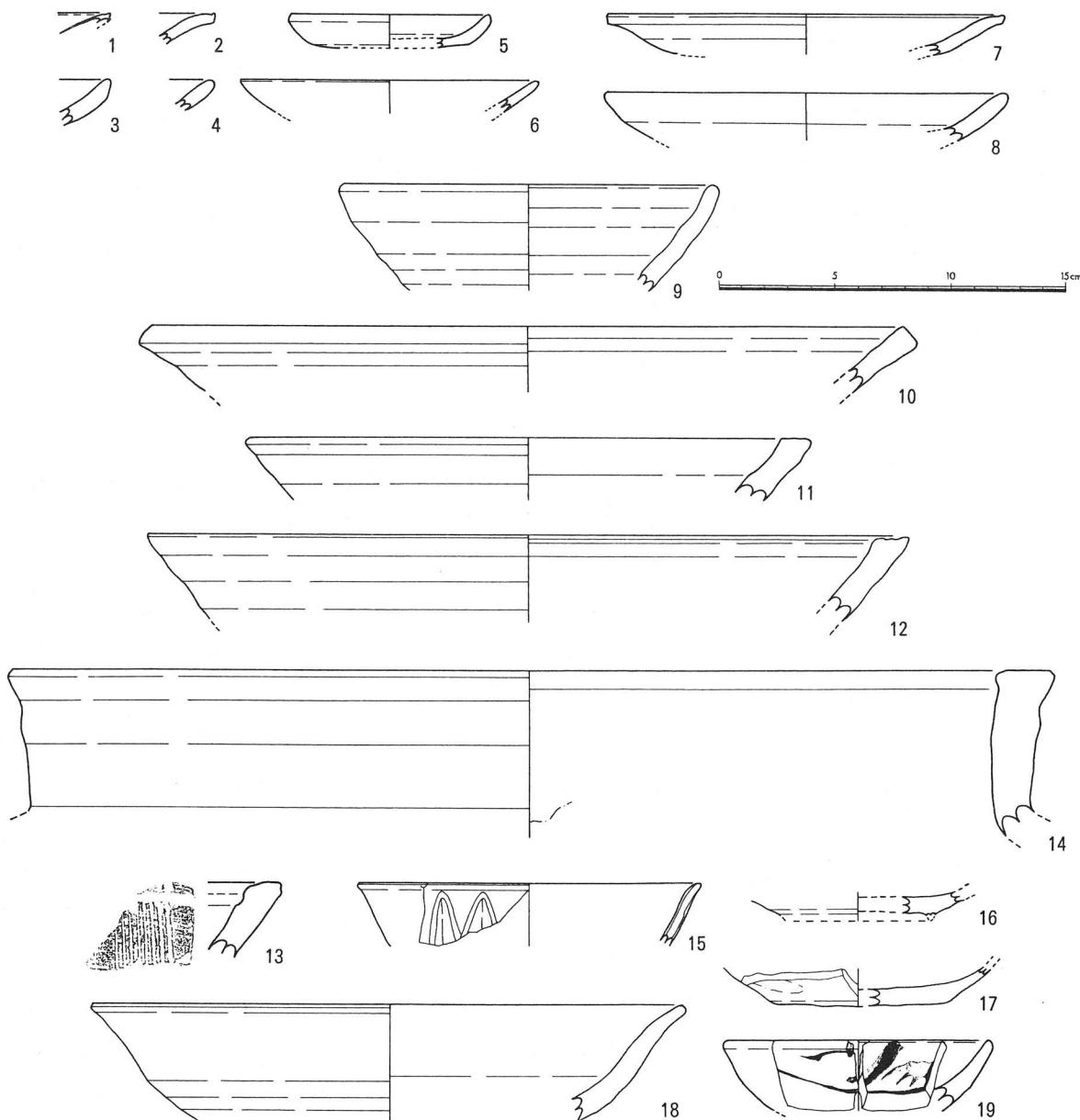
6 は口径 12.7cm を測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部を丸くおさめる。非輶轆成形で

ある。表面を全体的に摩滅しており、調整の詳細は不明である。焼成は酸化軟質であり、浅黄橙色を呈する。胎土は精良である。15世紀後半のものである。

7は口径 17.0cm を測り、大型の皿である。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部を丸くおさめる。器壁は比較的厚い。非轆轤成形であり、口縁部を一段撫でる。焼成は酸化軟質であり、灰黄褐色あるいは、にぶい黄橙色を呈する。胎土は石英粒を含み、砂粒をわずかに含む。13世紀後半のものである。

8は口径 16.9cm を測り、大型の皿である。口縁部は外湾して上外方へのび、端部付近を撫で、外折させる。端部を上方へつまみ出して、外面に面を形成する。非轆轤成形であり、口縁部を一段撫でる。外面を横撫での後、斜上方へ撫でて調整する。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は橙色粒を含む。16世紀前半のものである。

## ②珠洲（9～12）



第30図 2区出土遺物 (S = 1 / 3)

1～8 土師器皿, 9～12 珠洲, 13・14 越前, 15 青磁

9はすり鉢である。口径は15.8cmを測る。口縁端部は断面円頭状をなす。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈す。胎土は石英粒、海綿状骨針を含み、砂粒を多く含む。珠洲Ⅲ期に属し、13世紀後半のものである。

10はすり鉢である。口径は32.2cmを測る。口縁端部は断面方頭状をなす。焼成は還元硬質であり、色調は暗灰色を呈す。胎土は海綿状骨針を含み、砂粒を多く含む。珠洲Ⅳ期に属し、13世紀末から14世紀代のものである。

11はすり鉢である。口径は23.8cmを測る。口縁端部は上方に面を形成し、断面方頭状をなす。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈す。胎土は海綿状骨針を含み、砂粒を多く含む。珠洲Ⅳ期に属し、13世紀末から14世紀代のものである。

12はすり鉢である。口径は32.6cmを測る。口縁端部はやや肥厚し、上方に内傾した面を形成して、断面三角形状をなす。口縁端面に櫛歯波状文を施す。焼成は還元硬質であるが、色調は表面が暗灰色、内胎が浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒、海綿状骨針を含み、砂粒を多く含む。珠洲Ⅴ期に属し、15世紀前半のものである。

#### ③越前（13・14）

13はすり鉢の口縁部破片である。口縁端部はやや内傾し、外面に小さく凹んだ面を形成する。単位幅2.8cmあたり9目の卸目を確認できる。1目あたりの幅は2mmである。卸目の施入後、強い撫でによって、口縁端部直下に一重の凹面を形成する。焼成は酸化硬質であり、色調は表面が赤褐色、内胎が灰色を呈する。胎土は石英粒を含む。15～16世紀代のものである。

14は甕である。口径は40.8cmを測る。口縁部は直立し、端部は肥厚して外方に少し拡張し、上方に面を形成する。内外面に暗オリーブ色の灰釉を施すが、外面は釉が剥落している。焼成は酸化硬質であり、色調は表面が灰色、内胎がにぶい赤褐色を呈する。胎土は砂粒を多く含む。16世紀後半のものであろう。

#### ④青磁（15）

15は碗（龍泉窯系）である。口径は14.7cmを測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部に向かって外湾する。端部は尖りぎみに丸くおさめる。外面に比較的幅狭の籠彫りを施す。内外面に緑灰色の釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈する。胎土はやや密である。14世紀代のものである。

#### ⑤瀬戸美濃（16・17）

16は皿の底部破片である。高台が削れている。外面を回転削りで調整する。内外面に浅黄色の灰釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈する。胎土は密である。16世紀代のものである。

17は卸皿である。底径は7.6cmを測る。底部は回転糸切りによって切り離す。底部内面に卸目を施入する。卸目はよく摩滅している。外面の一部に明緑灰色の釉が確認できる。焼成は良好であり、色調は淡黄色を呈する。胎土はやや密である。15世紀代のものであろう。

#### ⑥越中瀬戸（18）

18は折縁皿か鉢である。口径は25.3cmを測る。口縁部は内湾し上外方へのび、端部に向かって外湾する。端部は丸くおさめる。外面は体部上半を回転撫で、下半を回転籠削りの後回転撫でによって調整する。内外面ににぶい赤褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は橙色粒、石英粒などの砂粒を多く含む。

#### ⑦肥前系磁器（19）

19は伊万里皿である。口径は11.2cmを測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部を丸くおさめる。器壁は比較的厚い。内外面に白色釉を施し、内面に植物文、外面に唐草文を描く。焼成はやや不良である。胎土は密である。18世紀後半の所産である。

### 3区（第31図）

#### ①土師器皿（1～26）

1は口縁部破片である。外湾ぎみに上外方へのび、端部へ向かって内湾する。端部は丸くおさめ、外面に面を形成する。器壁は比較的厚い。非輶轆成形であり、一段撫である。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい橙色を呈する。胎土は橙色粒、石英粒を多く含む。13世紀後半のものである。

2は口縁部破片である。内湾して上外方へのび、端部を尖らせわずかに外反させる。非輶轆成形で、一段撫でを施す。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒を含む。15世紀後半のものである。

3・4は口縁部破片である。内湾して上外方へのび、端部を丸くおさめる。非輶轆成形であり、一段撫である。焼成は酸化軟質であり、色調は淡橙色を呈する。胎土は石英粒などの砂粒をわずかに含む。15世紀後半のものである。

5・6は口縁部破片である。内湾ぎみに上外方へのび、端部付近を撫で、外湾させる。端部は丸くおさめる。非輶轆成形で、一段撫でを施す。焼成は酸化軟質であり、浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒を含む。15～16世紀代のものである。

7・8は口縁部破片である。内湾ぎみに上外方へのび、端部付近で屈曲し外方へのびる。端部を上方で丸くおさめる。非輶轆成形で、幅広い一段撫でを施す。焼成は酸化軟質であり、にぶい橙色を呈する。胎土は石英粒を含む。15～16世紀代のものである。

9・10は口縁部破片である。内湾ぎみに上外方へのび、端部外面を撫で、屈曲させる。端部は丸くおさめる。非輶轆成形であり、一段撫である。焼成は酸化軟質であり、浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒を含む。15～16世紀代のものである。

11は口縁部破片である。内湾ぎみに上外方へのび、端部付近で外湾する。端部は丸くおさめ、外面に面を形成する。非輶轆成形であり、一段撫である。内面に何かの工具でついたであろう刻みが入る。また内面全面に煤が付着する。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は石英粒、海綿状骨針を含む。15～16世紀代のものである。

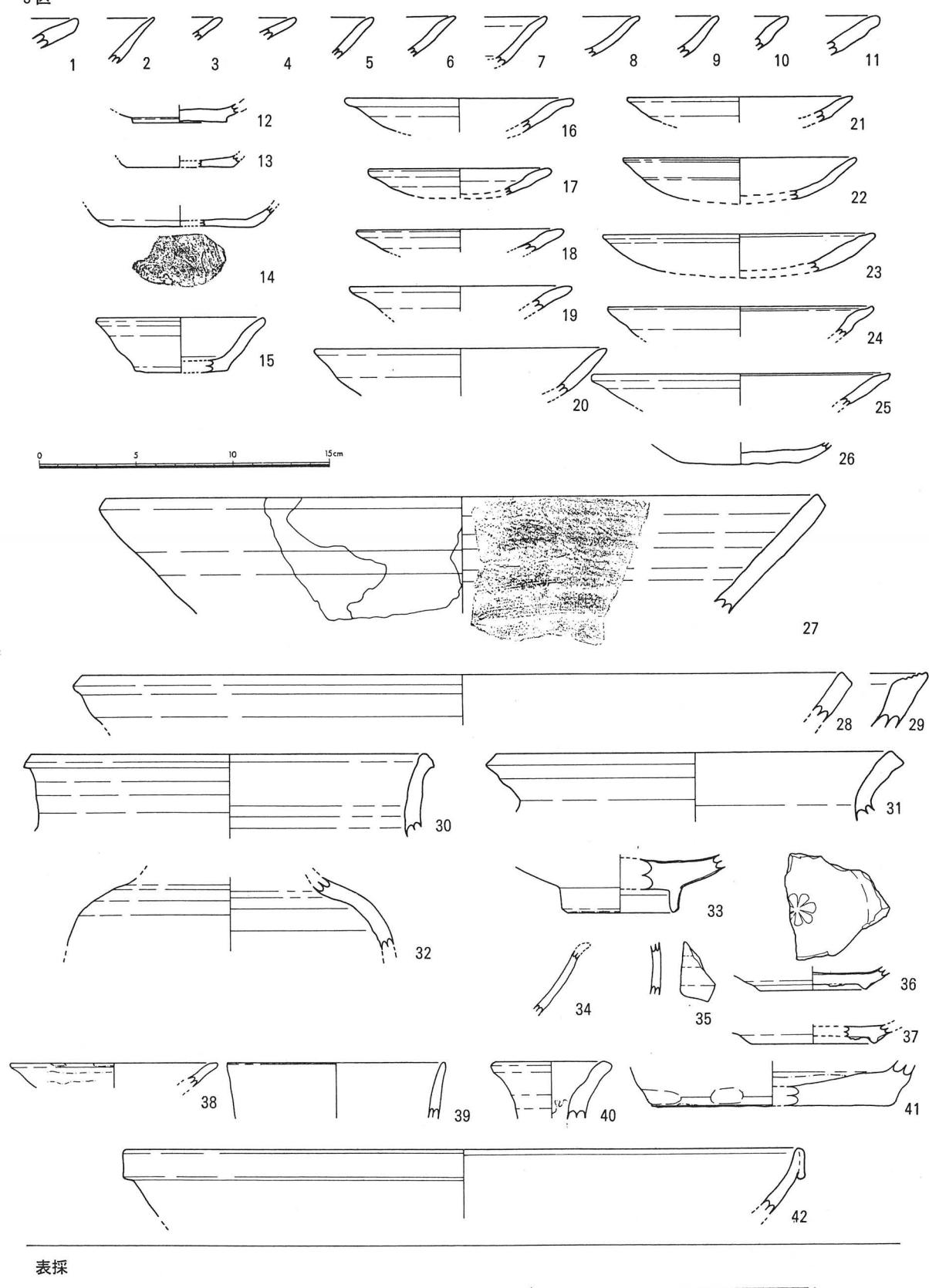
12は底部である。底径は4.7cmを測る。体部との境に段を有す。輶轆成形であり、回転糸切りによって切り離す。焼成は酸化軟質であり、色調は淡黄色を呈す。胎土は石英粒などの砂粒をわずかに含む。15世紀代のものである。

13は底部である。底径は5.4cmを測る。体部との境は明瞭である。輶轆成形であり、切り離す技法は、摩滅のため不明である。焼成は酸化軟質であり、色調は橙色を呈す。胎土は石英粒などの砂粒を僅かに含む。15世紀代のものである。

14は底部である。底径は7.4cmを測る。体部との境は明瞭である。輶轆成形であり、回転糸切りによって切り離す。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈す。胎土は石英粒を含む。15世紀代のものである。

15は口径8.5cm、底径4.7cm、器高2.8cmを測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部付近で外湾する。輶轆成形で、口縁部を一段撫である。底部は回転糸切りによって切り離す。焼成は酸化軟質

3区



表採



第31図 3区出土と表採遺物 (S = 1 / 3)

1～26 土師器皿, 27～32 珠洲, 33・34 中国製磁器, 35～37 濑戸美濃  
38～42 越中瀬戸

で、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒を含み、砂粒を僅かに含む。15世紀代のものである。

16は口径 11.5cm を測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部付近で、撫でのため強く屈曲して外湾する。端部は丸くおさめる。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫でする。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒、角閃石粒を含む。15世紀後半のものである。

17～22の口径はそれぞれ、9.0cm、10.5cm、11.2cm、11.4cm、14.8cm、11.8 cmを測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部付近で外湾する。端部は丸くおさめる。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫でする。17の内面には煤が付着する。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい黄橙色あるいは、褐灰色を呈する。胎土は石英粒などの砂粒を含み、20は角閃石粒、21・22は海綿状骨針を含む。15世紀後半のものである。

23は口径 13.8cm を測り、大型の皿である。口縁部は外湾ぎみに上外方へのびる。端部をわずかに上方へつまみ出す。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫でする。焼成は酸化軟質であり、色調は褐灰色あるいは、灰黄褐色を呈する。胎土は石英粒、海綿状骨針を含む。15世紀後半から16世紀前半のものである。

24は口径 13.5cm を測り、大型の皿である。口縁部は上外方へのび、端部付近でわずかに外反する。端部を上方へつまみ出し、丸くおさめる。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫でする。焼成は酸化軟質であり、色調はにぶい黄橙色を呈する。胎土は石英粒を含む。16世紀前半のものである。

25は口径 15.1cm を測り、大型の皿である。口縁部は外湾して上外方へのびる。端部を上方へつまみ出して尖らせ、外面に面を形成する。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫でする。焼成は酸化軟質であり、色調は表面が灰黄褐色、内胎が黒褐色を呈する。胎土は石英粒を含む。16世紀前半のものである。

26は底部である。底径は 6.2cm を測る。非輶轆成形である。底部外面を指押さえで調整する。体部との境は明瞭である。体部外面は断続的な横撫でで調整をする。底部内面は不整方向の撫でで調整する。焼成は酸化軟質であり、色調は灰黄色を呈する。胎土は石英粒を含む。

12～15はロクロ成形の土師器皿で15世紀代、23～25は口縁端部を上方へ摘み出すタイプで16世紀前半に位置づけられる。

## ②珠洲（27～32）

27はすり鉢である。口径は 36.4cm を測る。体部は直線的に上外方へのび、口縁端部は断面方頭状をなし、外傾する面を形成する。単位幅 1.5cmあたり 10 目の御目を確認できる。1 目あたりの幅は 1 mm である。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は砂粒を含む。珠洲IV期に属し、13世紀末から14世紀代のものである。

28はすり鉢である。口径は 39.0cm を測る。体部は直線的に上外方へのび、端部は外へわずかに肥厚して断面方頭状をなし、外傾する面を形成する。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は石英粒などの砂粒を含む。珠洲IV期に属し、13世紀末から14世紀代のものである。

29はすり鉢の口縁部破片である。口縁端部はやや肥厚して断面三角形状をなし、内傾した面を上方に形成する。口縁端面に櫛歯波状文を施す。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は海綿状骨針を含む。珠洲V期に属し、15世紀前半のものである。

30は壺である。口径は 19.8cm を測る。長頸であり、口縁部は外湾して上外方にのびる。端部は断面方頭状をなし、外に拡張して外傾する面を形成する。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は砂粒を含む。珠洲IV期に属し、13世紀末から14世紀代のものである。

31 は壺である。口径は 19.9cm を測る。全体的に摩滅している。短頸であり、口縁部は外湾して上方にのびる。端部は断面方頭状をなし、外傾する面を形成する。焼成は還元軟質で、色調は灰白色を呈する。胎土は石英粒などの砂粒を含む。珠洲IV期に属し、13世紀末から14世紀代のものである。

32 は壺の肩部である。輶轄によって調整する。焼成は還元硬質であり、色調は灰色を呈する。胎土は砂粒をわずかに含む。

#### ③中国製磁器（33・34）

33 は龍泉窯系青磁碗の底部である。底径は 5.4cm を測る。外面は回転削りで調整する。内外面に灰オリーブ色の釉を施すが、高台内までは施されない。釉の厚さは比較的薄い。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。胎土は粗である。14世紀後半のものである。

34 は白磁碗の口縁部破片である。内湾ぎみに上外方へのびる。外面は回転削りで調整し、端部付近は回転撫でによって調整する。内外面に灰白色の釉を施す。釉の厚さは比較的薄い。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈する。胎土はやや粗である。15～16世紀代のものであろう。

#### ④瀬戸美濃（35～37）

35 は瀬戸美濃碗皿類の体部破片である。内外面に浅黄色の灰釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈する。胎土はやや密である。

36 は瀬戸美濃皿の底部である。底径は 5.4cm を測る。高台は貼り付けて作出す。外面は回転削りの後、回転撫でによって調整する。高台内の底部外面に砂が付着する。底部内面に印花文を押印する。内外面に浅黄色の釉を施す。焼成は良好であり、色調は淡黄色を呈する。胎土はやや粗である。大窯期に属し、16世紀後半のものである。

37 は瀬戸美濃皿の底部である。底径は 6.3cm を測る。高台は貼り付けて作出す。外面は回転削りの後、回転撫でによって調整する。内外面に浅黄色の釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈する。胎土はやや密である。16世紀代のものである。

#### ⑤越中瀬戸（38～42）

38 は皿である。口径は 10.3cm を測る。口縁部は内湾ぎみに上外方へのび、端部付近で外湾する。端部は丸くおさめる。内外面に黒褐色あるいは、暗灰黄色の錆釉を施し、外面に浅黄色の灰釉を二重掛けする。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈す。胎土は密である。

39 は碗である。口径は 11.0cm を測る。口縁部は外湾ぎみに上方へのび、端部は丸くおさめる。内外面に黒褐色の鉄釉を施す。焼成はやや不良で、色調はにぶい黄橙色を呈す。胎土は密である。

40 は徳利である。口径は 5.5cm を測る。外面に褐色あるいは、黒褐色の鉄釉を施す。内面の一部にも釉だれする。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈す。瀬戸美濃である可能性がある。

41 は匣鉢の底部である。底径は 12.4cm を測る。回転糸切りによって切り離す。体部との境の外面に部分的に指押さえする。体部は回転削りの後、回転撫でによって調整する。外面に褐色あるいは、黒褐色の鉄釉を施す。内面の一部にも釉だれする。焼成は良好であり、色調は灰白色を呈す。胎土はやや密であり、石英粒などの砂粒を含む。

42 はすり鉢である。口径は 34.6cm を測る。口縁を折り返して外面に縁帶を作出す。内外面に暗赤褐色の鉄釉を施す。焼成は良好であり、色調は浅黄橙色を呈す。胎土はやや粗で、石英粒を含む。17世紀代のものである。

1は土師器皿である。口径9.2cm、底径4.3cmを測る。体部は内湾して上外方へのびる。口縁部は端部付近で外湾し、端部は丸くおさめる。非輶轆成形であり、口縁部を一段撫する。焼成は酸化軟質であり、色調は浅黄橙色を呈する。胎土は石英粒、角閃石粒を含む。15世紀後半のものである。

2は龍泉窯系青磁碗の体部破片である。外面に比較的深くない籠彫りを施す。内外面にオリーブ灰色の釉を施す。焼成は良好であり、色調は灰色を呈する。胎土は密である。14世紀代のものである。

3は伊万里皿である。口径12.0cmを測る。口縁部は内湾して上外方へのび、端部は丸くおさめる。外面に濁りぎみの白色釉を施し、内面に文様を描く。焼成は良好であり、胎土は密である。18世紀から19世紀代のものであろう。

#### 石製品（第32図1～12）

##### 砥石

石製品は表面採集資料である4を除き、すべて包含層から出土した。1・2・11が1区から、6が2区から、3・5・7～10・12が3区から出土した。砥石は素材となる石材の質によって、砥ぎの用途を異ならせている。

##### ①仕上げ砥（1～4）

1は頁岩製砥石である。残存長3.0cm、残存幅1.9cm、厚さ0.8cmを測り、重さ4.8gを量る。表面積の最も広い面を砥面として利用しており、表裏2面を使用している。長側面と短側面のそれぞれ一面に、砥山から切り出す際に鋸痕が残存している。また砥面の片側にも、鋸以外の器具によってついた、「小割り痕」と推測できる加工痕が残存する。石材は現、京都府に産する「鳴滝石」であり、黄色～緑灰色を呈す。

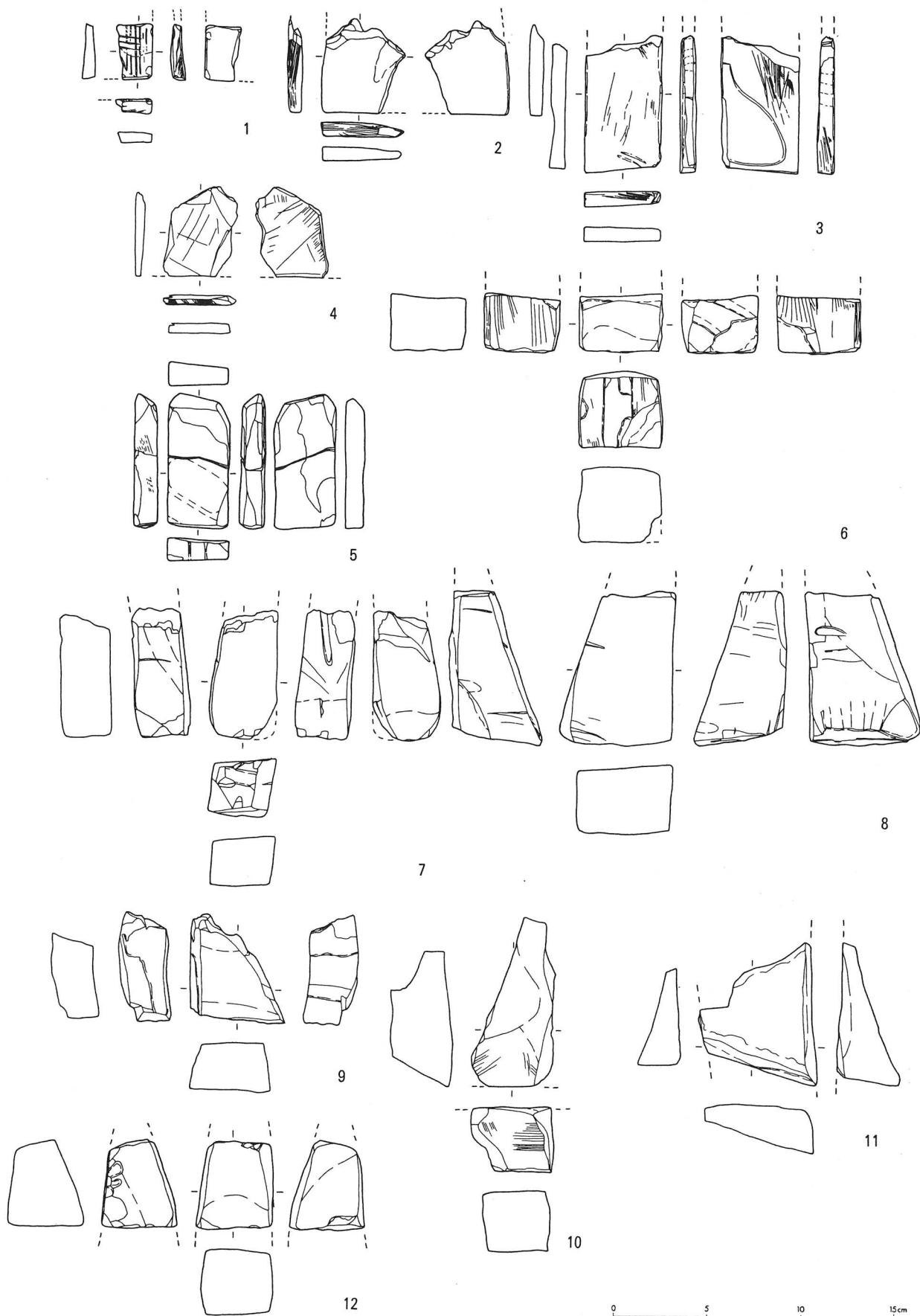
2は頁岩製砥石である。残存長5.0cm、残存幅4.45cm、厚さ0.8cmを測り、重さ20.2gを量る。表面積の最も広い面を砥面として利用しており、表裏2面を使用している。長側面と短側面のそれぞれ一面に、砥山から切り出す際に鋸痕が残存している。そのうち長側面では、鋸で切り出すのを途中で止め、残りを折り取っていることが確認できる。石材は鳴滝石であり、緑灰色を呈す。

3は頁岩製砥石である。残存長7.3cm、幅4.0cm、厚さ0.85cmを測り、重さ38.6gを量る。表面積の最も広い面を砥面として利用しており、表裏2面を使用している。長側面と短側面のそれぞれ一面に、砥山から切り出す際に鋸痕が残存している。そのうち短側面では、鋸で切り出すのを途中で止め、残りを折り取っていることが確認できる。また長側面の片側に、長側縁とは垂直の方向につけられた、平滑な加工痕が残存している。この痕跡は鋸以外の器具（鑿か？）によってついたものであり、梅原胡摩堂遺跡の頁岩（鳴滝石）製砥石に類似した例を見ることができる。石材は「鳴滝石」であり、黄色を呈す。

4は泥岩製硯の破片であり、砥石に転用されている。最大長4.7cm、最大幅3.9cm、厚さ0.5cmを測り、重さ13.0gを量る。表面積の最も広い面を砥面として利用しており、表裏2面を使用している。ただし砥面についての擦痕は、硯製作時に磨かれてついたものを含む可能性を残す。短側面の一方に、鋸痕が残存している。石材は現、滋賀県に産する「高嶋石」である可能性が高く、近世の所産である可能性が高い。色調は暗灰色を呈す。

##### ②中砥（5～11）

5は流紋岩質凝灰岩製砥石である。残存長7.1cm、残存幅3.25cm、厚さ1.3cmを測り、重さ49.2gを量る。表面積の最も広い面を砥面として利用しており、表裏2面を使用している。そのほか短側



第32図 砥石 (S = 1 / 3)

面の一方が、傾斜する複数の面で形成されており、これらの面も砥面として利用されている。仕上げ砥石とは異なる研ぎ方が示唆される。それと対向する短側面には、鑿痕と推する加工痕が残存する。また長側面の一方には、鋸痕と推する加工痕が薄く残存している。石材は現、愛媛県砥部近郊に産する「伊予砥」であり、白色系の色調を呈す。

6は流紋岩製砥石である。残存長3.10cm、幅4.0cm、厚さ4.0cmを量り、重さ81.6gを量る。砥面1面と欠失した短側面1面以外の全ての面に、切り出し時の鋸痕を残している。原型は断面正方形に近い角柱状であったと推される。短側面には、対向する両側縁の2方から鋸で切り出し、中央部を残して途中で止め、残りを折り取っていることが確認できる。このような切断の仕方は、鳴滝石をはじめとする仕上げ砥石のそれとは異なる。石材は現、熊本県天草に産するものの可能性が高いが、伊予砥の可能性もある。灰白色系の色調を呈す。

7は流紋岩製砥石である。残存長6.8cm、残存幅3.6cm、厚さ3.1cmを測り、重さ110.6gを量る。短側面を除く4面全てを使用している。短側面の一方は平坦な面を残していることから、成品状態をほぼとどめている可能性を有する。石材は伊予砥である可能性が高く、白色系の地に、黄褐色の流紋という色調を呈す。

8は流紋岩製砥石である。残存長8.15cm、残存幅6.15cm、厚さ4.9cmを測り、重さ269.6gを測る。短側面を除く4面全てを使用している。一方の短側面に向かって大きく研ぎ減りした結果、砥面が傾斜して、平面形がいわゆる「撥形」のようになっている。このような形態の砥石は古代の資料においても見ることができる。石材は伊予砥である可能性が高く、白色系の色調を呈す。

9は流紋岩製砥石である。重さ79.4gを測る。加工痕を残した面がないので、ここでは最も表面積の大きい砥面を主面と措定して、図を作成した。砥面と長側面2面とを使用している。石材は伊予砥の可能性が高く、白色系の地に、黄褐色の流紋という色調を呈す。

10は流紋岩製砥石である。残存長8.9cm、残存幅4.4cm、厚さ3.45cmを測り、重さ147.6gを量る。短側面に、砥山から切り出す際にいた、鋸痕であろう加工痕が残存している。砥面1面と短側面を除く他の面は、全て欠失している。元は比較的大型の砥石であったことが推測される。この石材は、中名I・V遺跡などの婦中町に所在する中世遺跡から出土する一方、現状では他県において確認されていないという点や、比較的大型・不整形な形態である点などを考慮すると、現、富山県内のどこから原礫の状態で搬入された可能性が高い。硬質緻密であり、黄色系の色調を呈す。

11は流紋岩製砥石である。重さ95.6gを量る。大部分を剥落している。石材は11と同じ、現、富山県産のものである。硬質緻密であり、黄色系の色調を呈す。

### ③荒砥

12は砂岩製砥石である。残存長4.7cm、残存幅4.1cm、厚さ4.0cmを測り、重さ106.2gを量る。3面を使用している。石材は「大村砥」（長崎大村か紀州大村かの区別は不明）の可能性を有する。色調は灰色を呈す。

## (4) 出土遺物の検討

### (1) 石器組成からみた遺跡の性格

石器組成は tool としての石器内訳が、打製石斧 47、磨製石斧 5、石皿 1、石錘 1、計 54 に示されるように極めて偏っている。それぞれの石器の時期推定が不可能なため、伴出した縄文土器から縄文時代中期～晚期の長期間に亘る時間幅の中での捉え方しかできず、長期間に小規模な生産活動が集積した結果が、調査で明らかになった石器組成を示しているにすぎない。しかしこれだけ偏向した組成を示すことは、時代を異にする活動の集合とはいえ、調査の行われた地点における生業活動を反映していることは想像に難くない。

石器組成の 87 % を打製石斧が占めており、この場での活動が打製石斧を中心とする活動であることは明らかである。打製石斧は一般には土掘り具と考えられており、柄をつけて鍬や鋤のような用途が想定されている。近年では、刃部の使用痕研究から打製石斧での木材伐採・加工の用途も主張されているが、北陸地方の一般的な縄文時代遺跡では、蛇紋岩製の磨製石斧と凝灰岩などの打製石斧が一定量共存しており、磨製石斧と打製石斧の用途の使い分けが考えられる。現状では打製石斧は古典的縄文農耕論の論拠とされたように土掘り具とみなす方が妥当である。

吉野遺跡では住居や墓などの定住を示す遺構は検出されず、また出土した縄文土器も微細な細片が主体で調査範囲全体に 370 点余り出土している。土器片のほとんどが無文か縄文のみで、飾られた土器は少ない。

また、遺跡の北東約 1 km にはこの台地上で最大規模を誇る縄文中期初頭～晩期末の早月上野遺跡が存在しており、遺物の分布範囲は吉野遺跡の約 500 m 東まで広がっている。早月上野遺跡では多数の竪穴住居跡をはじめ、多用な石器群、完形を含む多数の縄文土器が出土しており、地域の中核の拠点的集落の様相を呈している。早月上野遺跡周辺では、遺跡から北西に開けた肥沃な平坦な台地広がり、吉野遺跡を含めた周辺部の分布調査では僅かな土器片と打製石斧が採集されている地点が多数存在する。早月上野遺跡が集団生活の拠点であるとすれば、周辺で遺構を伴わず、少量の土器片と打製石斧を出土する遺跡は生産活動の場と考えることができる。

早月上野遺跡との関係を考慮し、石器組成を考えると、今回調査した吉野遺跡は早月上野遺跡の畠のような役割を果たしていた可能性が高いと考えられる。縄文農耕の問題は棚上げするとしても、石器組成と打製石斧以外の各石器にみられる量的な問題、破損個所など吉野遺跡が早月上野集落の付属する生産活動の場であるとの想定を支持している。こうした視点で、従来の調査で打製石斧が単独で出土した遺跡などを再検討すれば、集落と周辺に広がる生産活動の領域問題を解く手がかりを得ることができるであろう。

### (2) 中・近世の遺物について

出土遺物のうち、中世期のものは 13～16 世紀（鎌倉～室町時代）にいたるまでの土器・陶磁器などが一定量見つかった。土師器や瀬戸美濃、青磁・白磁などの碗・皿の供膳具、珠洲や越前焼の擂鉢や壺・甕などの調理具・貯蔵具などの存在は、一般的な集落の出土組成を示している。さらに近年、中世遺物の中でも注目されている石製品である砥石を見ても、鉄製品の日常的なメンテナンスに使用する仕上げ砥や中砥が定量出土していることは概期の集落の存在を裏付けるものといえよう。但し発掘調査では明確に中世に属する遺構が検出されなかったため、集落構造や規模などは不明である。

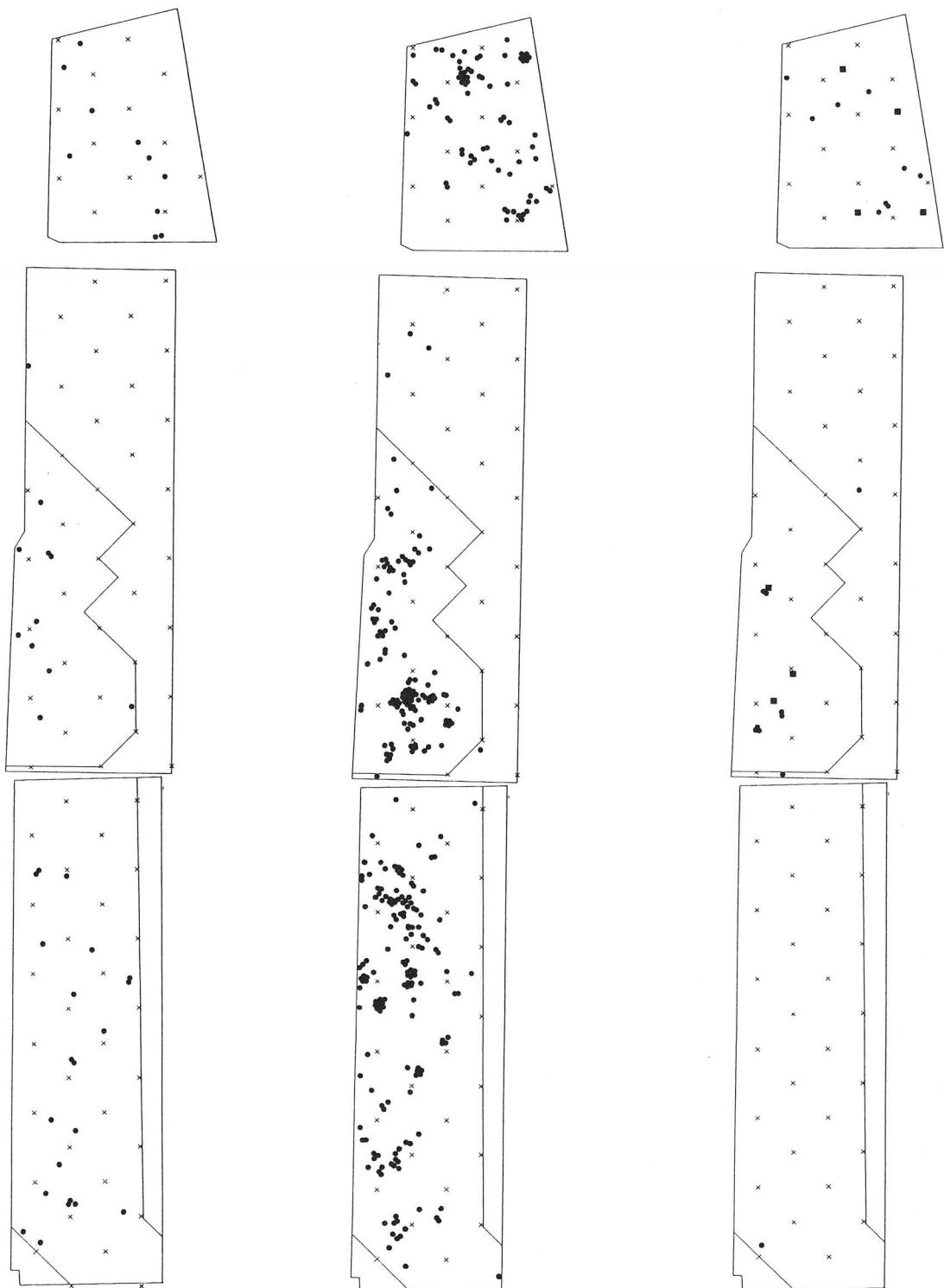
遺物の中でも伝世が少なく、遺跡の存続時期を比較的よく示す土師器皿（かわらけ）を見ると、13世紀と15～16世紀の2時期にまとめることができる。出土量においては15～16世紀前半に属するものが大半で、土器皿の分布状況は第1区と第3区に集中している。この傾向は他の種類の遺物においても概ね同様である。第1区においては、13～14世紀の比較的古相の遺物も多く、概期の集落が本調査区周辺から展開していったものと考えられる。遺構密度と遺物分布状況から、調査区第1区を含むその周辺に中世期の集落が存在していたといえるだろう。次年度（平成12年度）の調査区において、集落遺構が確認出来る可能性は高い。

これに対し近世の遺物は17～19世紀の年代幅はあるものの量的にはコンテナ1箱分と非常に少ない。平成8年度に調査した近世集落の出遺跡の出土遺物がコンテナ20箱を数えることからも集落の存在を伺わせる量ではない。また、第2区において18～19世紀（江戸時代後期）に属する溝（用水）跡が検出されたことで近世（江戸時代）においてはこの付近は耕作地（水田）として機能していたと考えができる。それ以降、現代にいたるまで水田として使用されてきたことが分かった。

吉野遺跡の発掘調査では、住居跡など一般の集落が残る遺跡の調査とは異なり、その土地が各時代においてどのように使用されていたのかを復元、推測できる遺跡として注目される。人類が生活していく中で、各時代の人々がどのような土地利用を行ってきたのかを考える上で重要な遺跡と云えよう。

## 6. 調査のまとめ

1. 吉野遺跡は早月川と角川に挟まれた洪積台地上に形成された遺跡で、縄文時代中～晚期と中・近世（鎌倉～江戸時代）にかけての複合遺跡である。
2. 検出された遺構は、調査区全体では柱穴状のピット群や土坑、風倒木痕、川跡である。第1区では素掘りの井戸が1基、第2区からは溝（用水）跡2基、掘立柱建物跡1棟、第3区より焼土や炭化物の詰まった土坑1基を検出した。溝（用水）跡は18～19世紀に比定できるが、それ以外は時期の特定はできない。
3. 主な遺物は縄文土器（中～晚期）、石器（打製石斧や磨製石斧・石皿）、剥片や石核、中世土器・陶磁器（土師器皿・珠洲焼・瀬戸美濃焼・青磁など）や砥石、近世陶磁器（唐津焼・伊万里焼・越中瀬戸焼）、鉄滓、鉄片などがある。
4. 吉野遺跡のうち今年度調査区では、石器組成や土器の少なさから、縄文時代では生産活動的場所（畑のようなもの）であったと想定できる。中世においては小規模な集落、近世以降は耕作地（水田）として使用されたと考えられる。

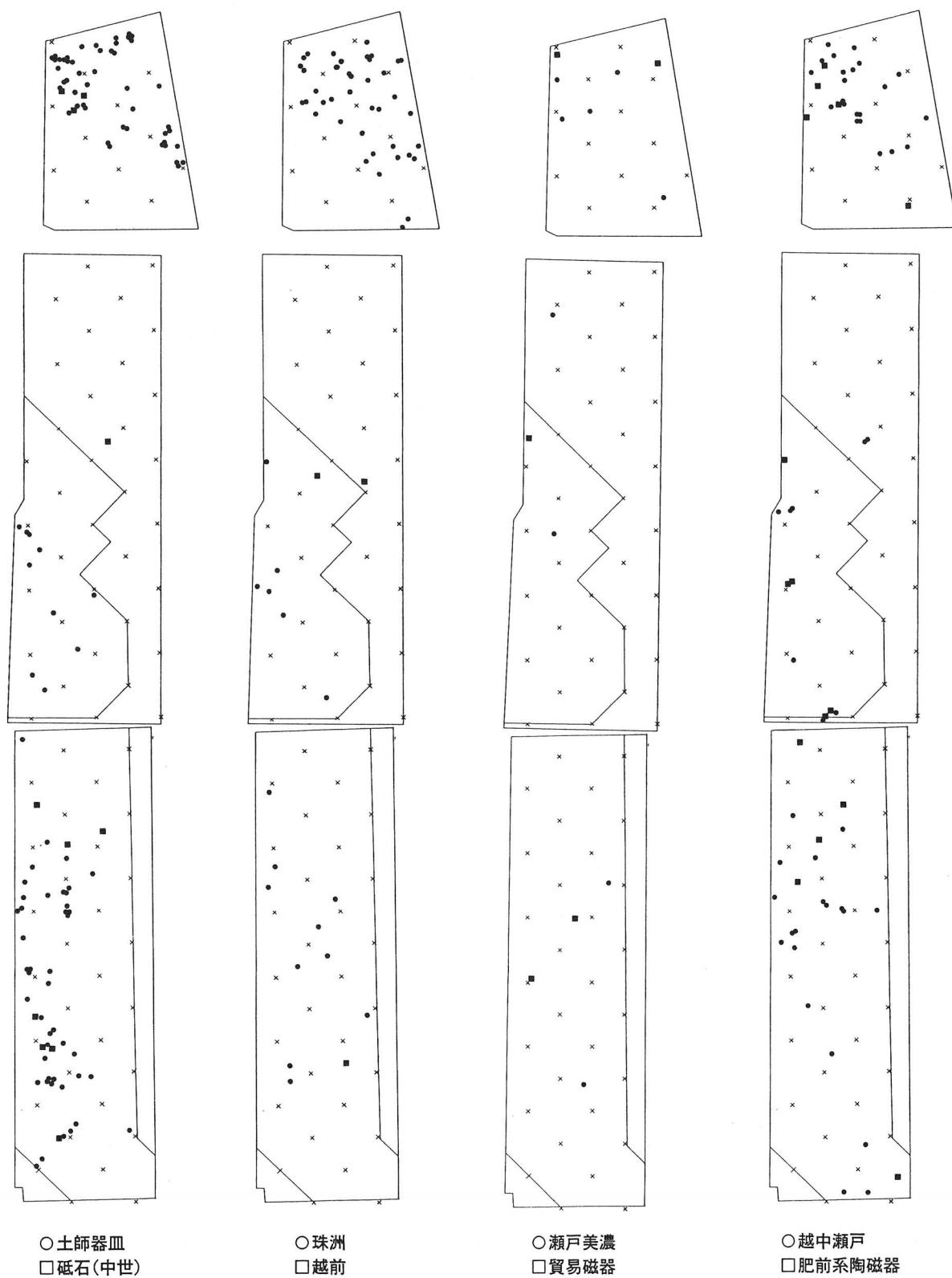


打製石斧

縄文土器

○弥生～古墳時代の土器  
□古代土師器

第33図 種類別遺物分布図（1）

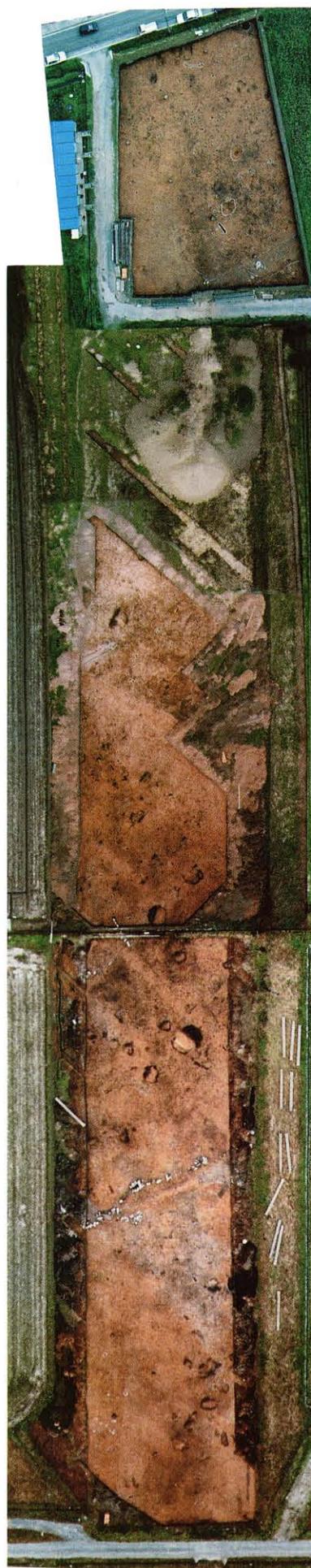


第34図 種類別遺物分布図（2）

# 写 真 図 版



図版1 (調査区全体写真)



図版2



1区表土削ぎ風景



2区表土削ぎ風景



1区調査前



2区調査前



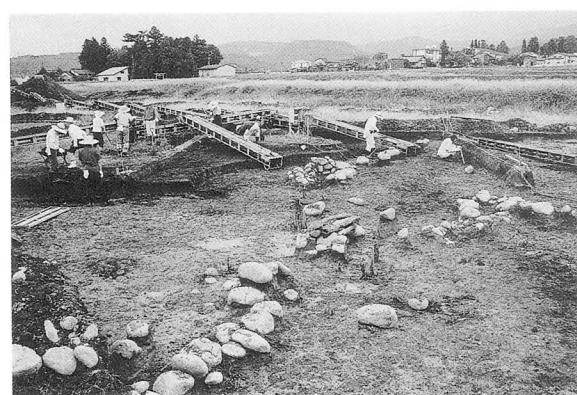
発掘調査風景



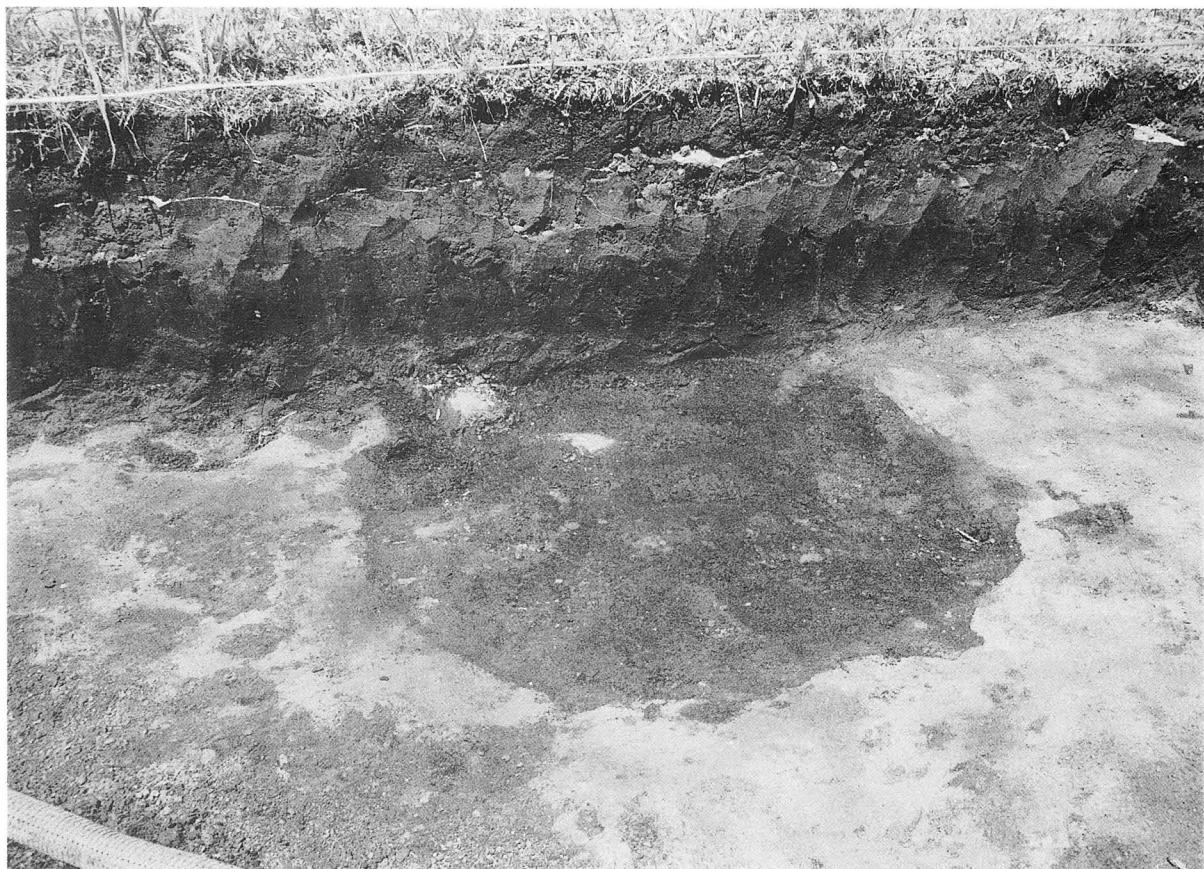
発掘調査風景



1区川跡



3区川跡



1区井戸 S E 1 (南より)



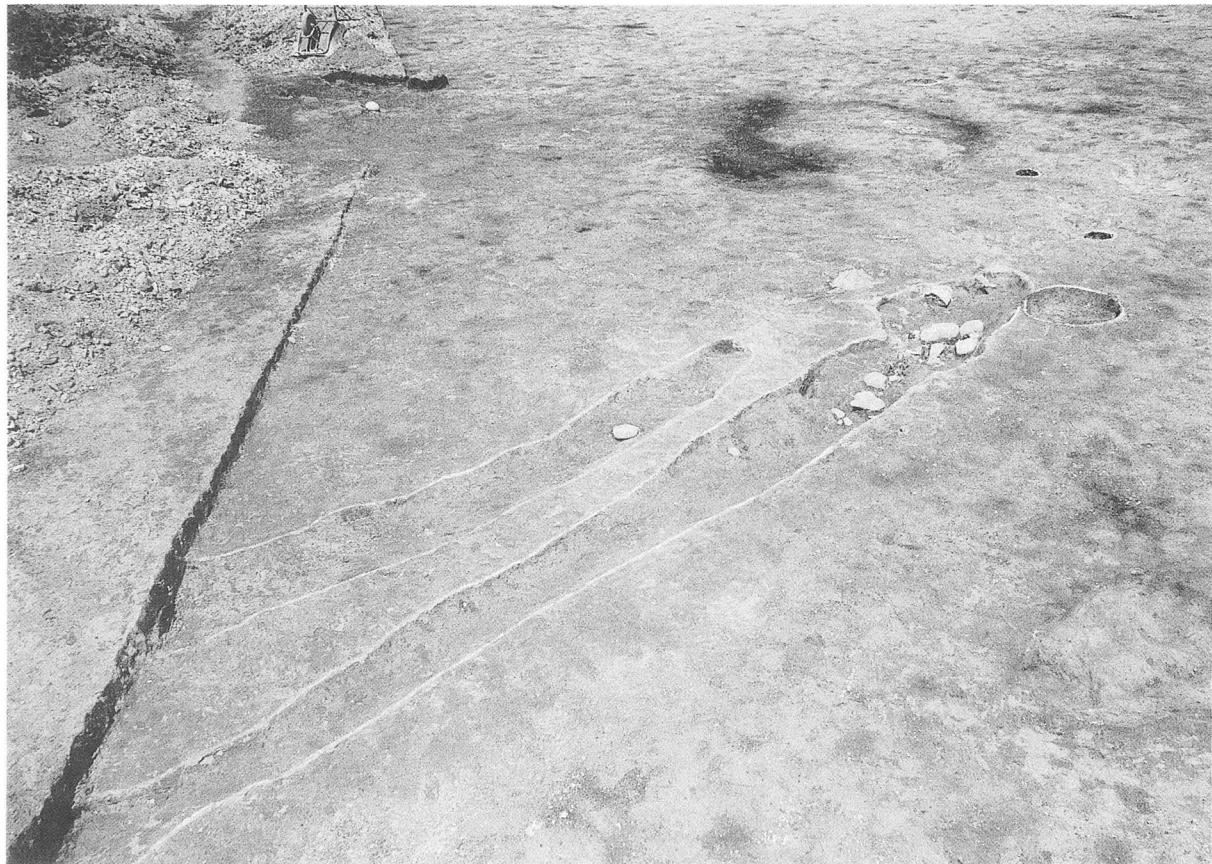
1区 S E 1 層位



1区井戸SE1(南より)



2区掘立柱建物跡(西より)



2区SD1, SD2(西より)



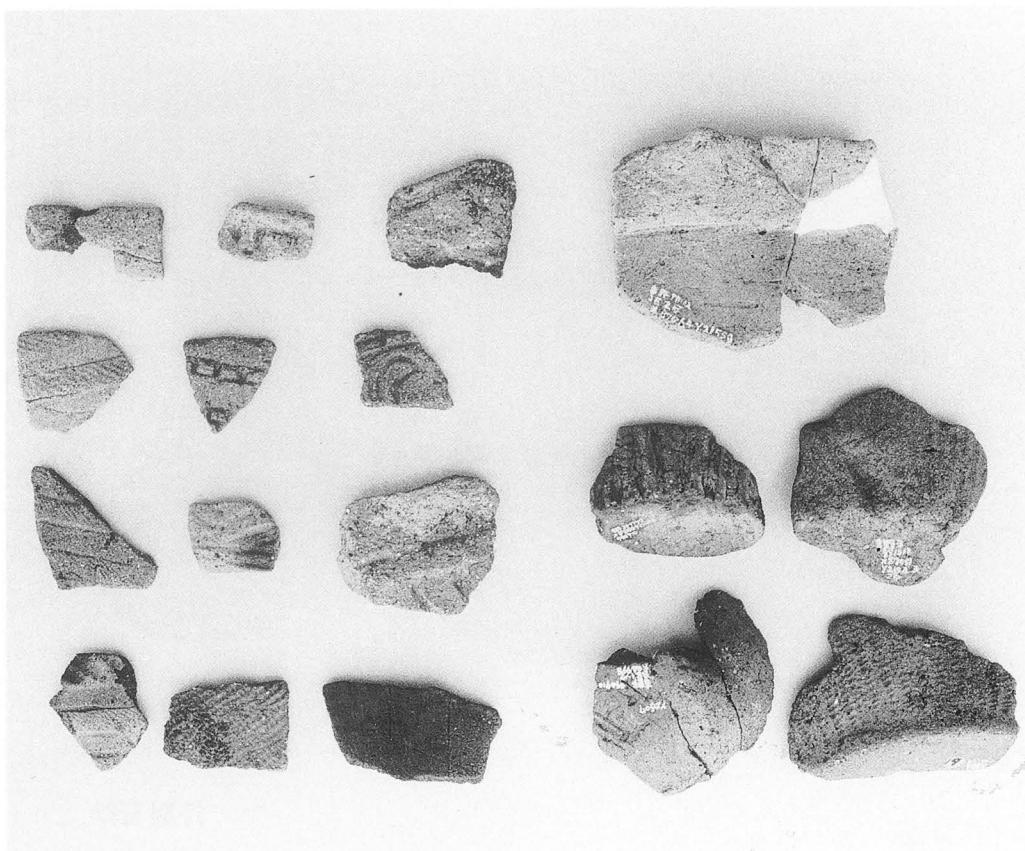
SD1石・杭検出状況



3区土坑出土縄文土器



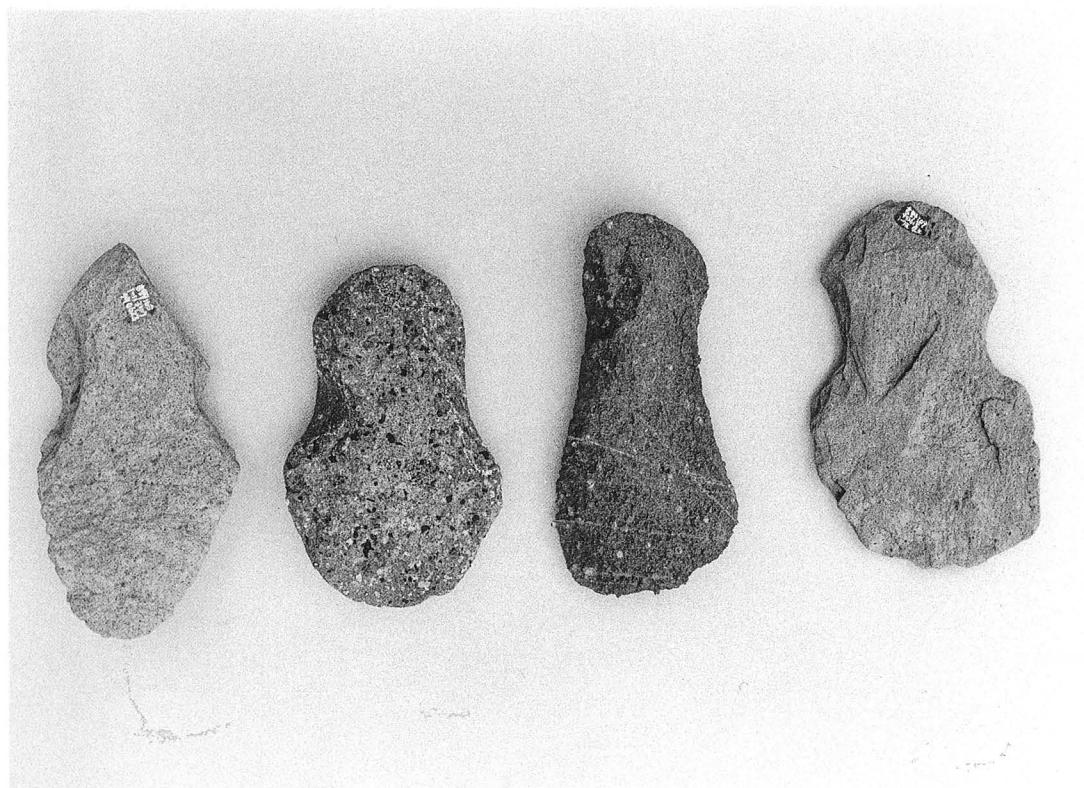
3区焼土土坑



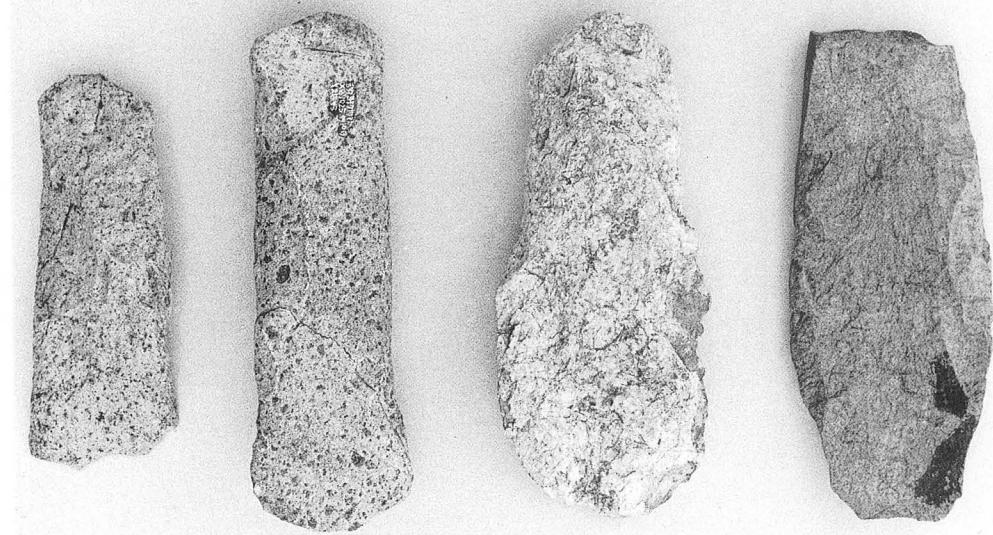
縄文土器



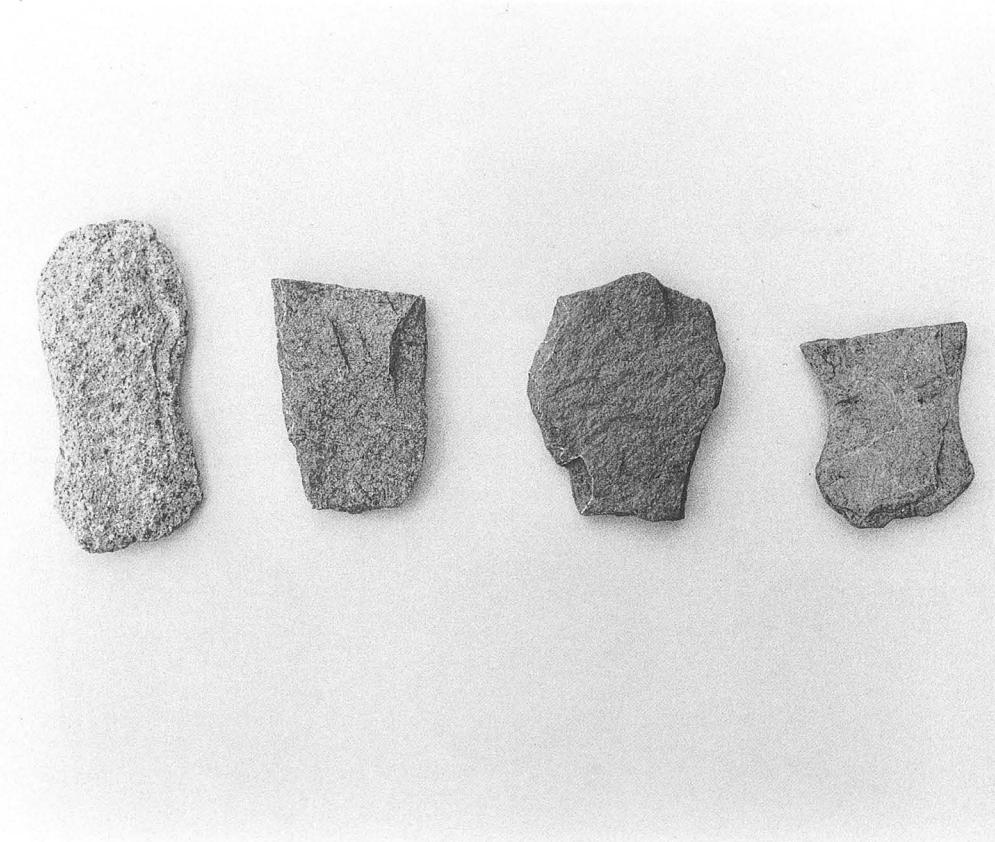
打製石斧



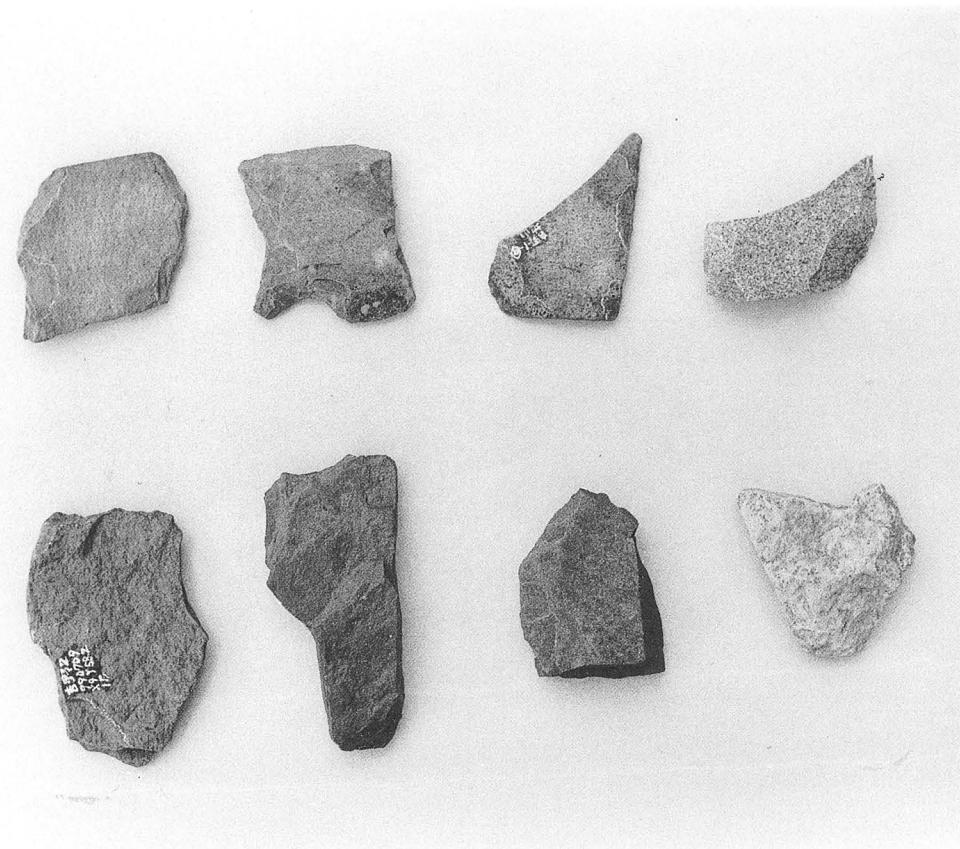
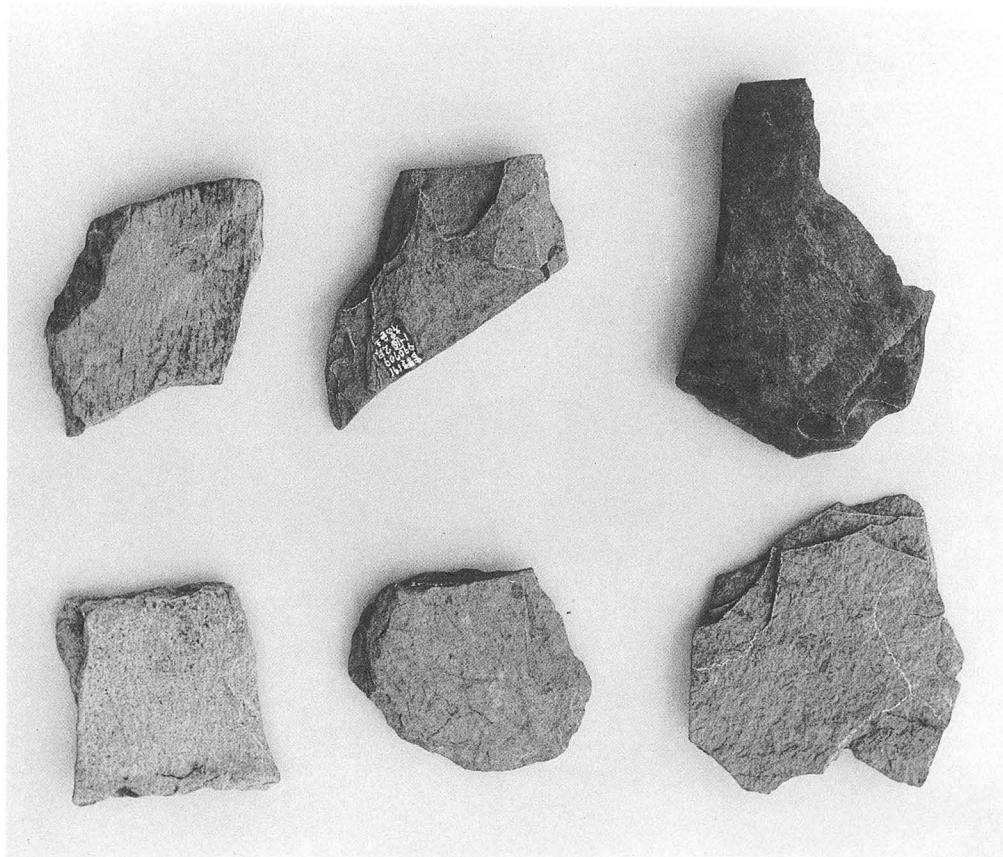
打製石斧



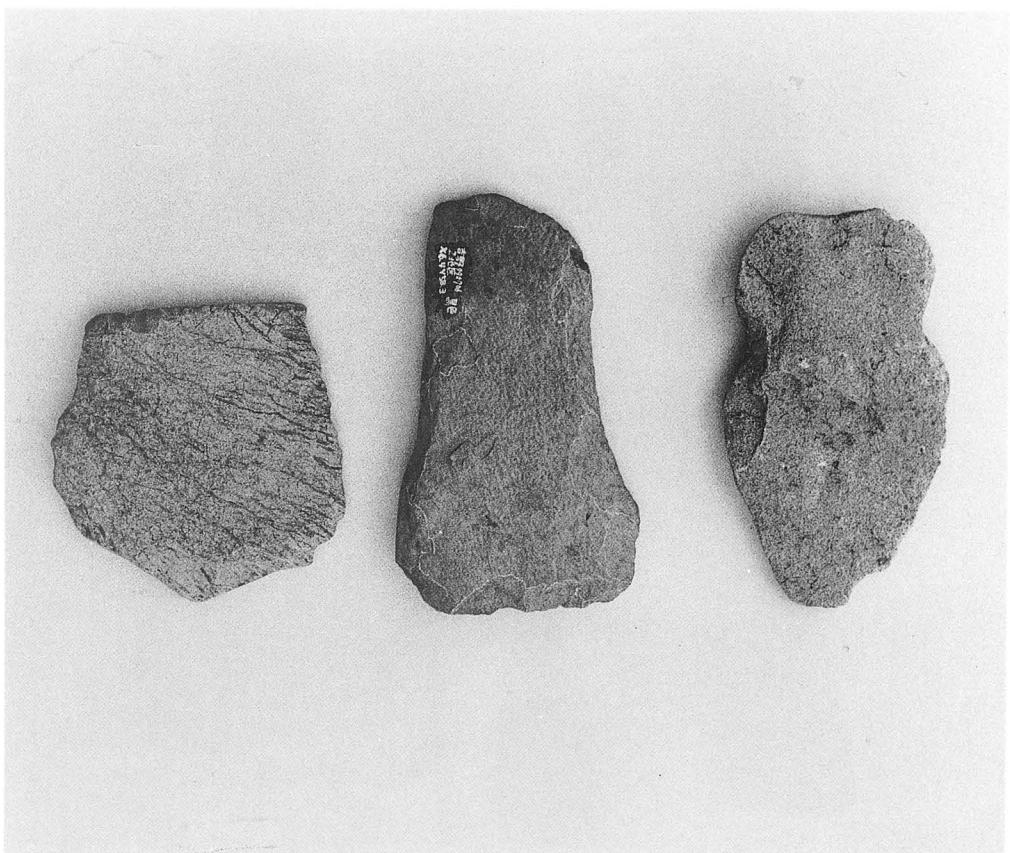
打製石斧



打製石斧



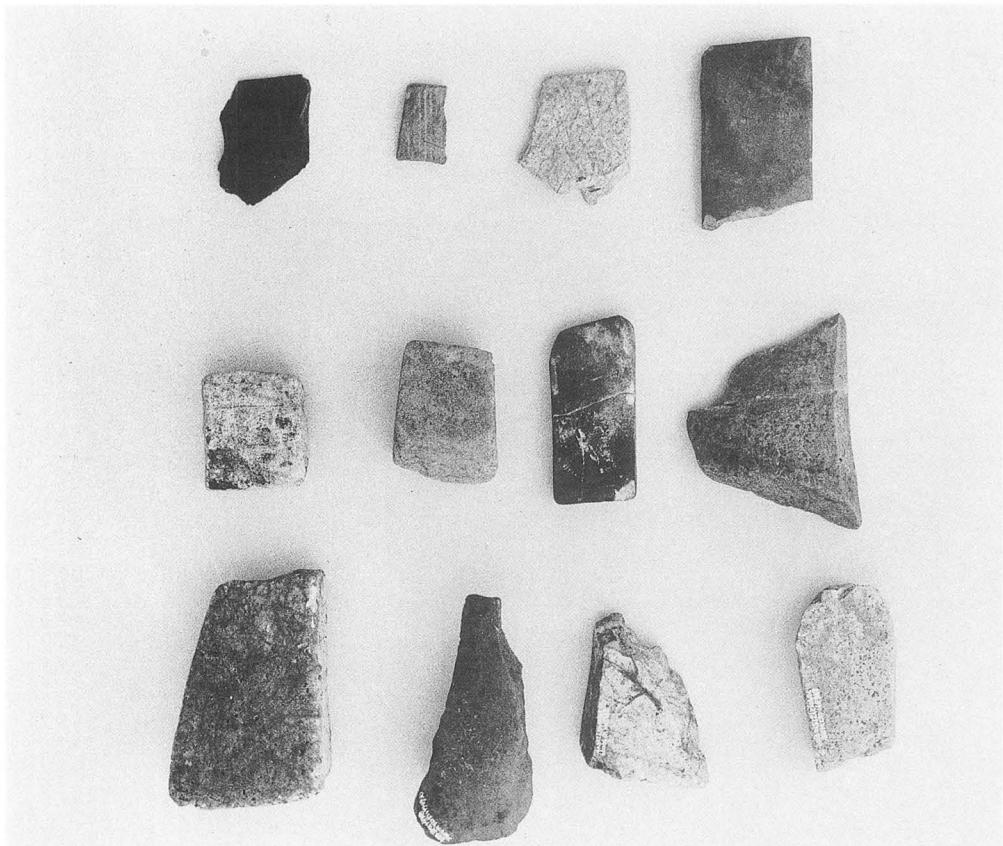
打製石斧



打製石斧



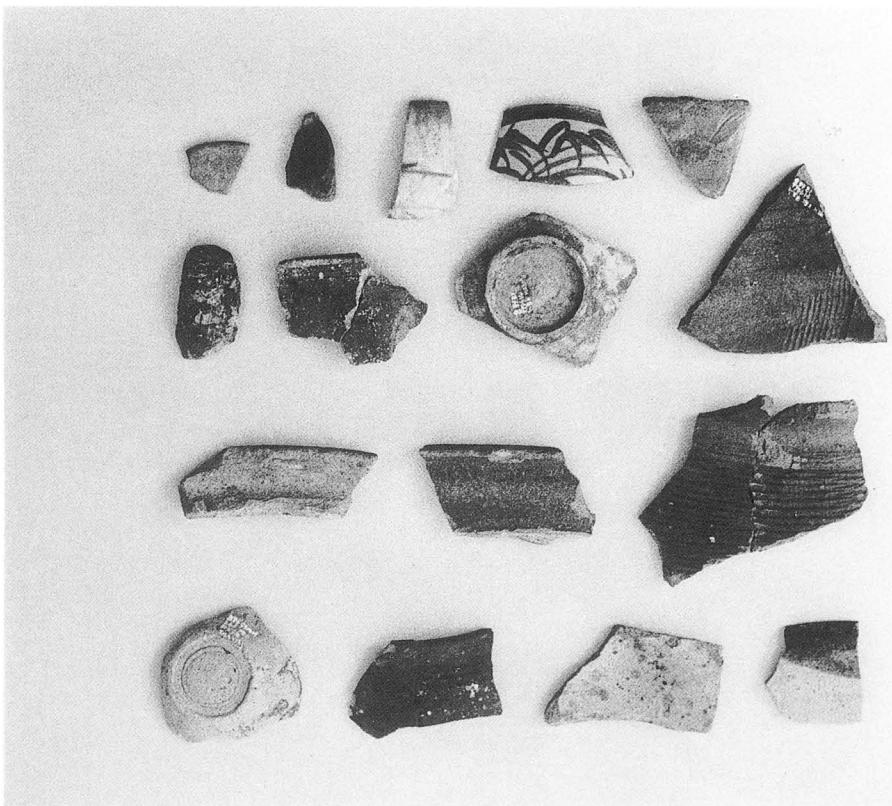
石錘・磨製石斧



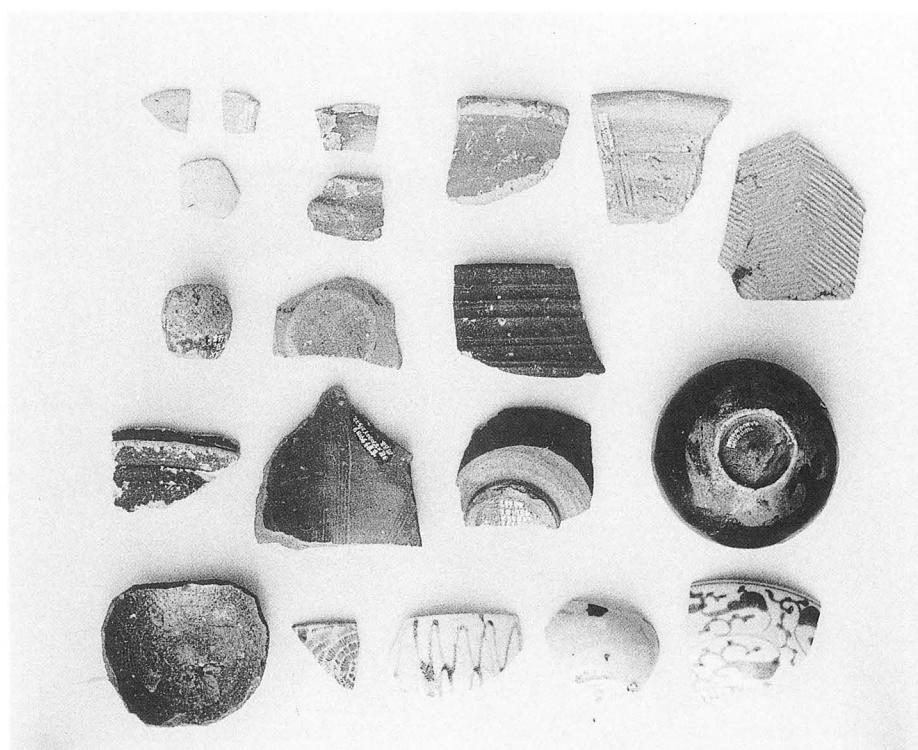
砥石



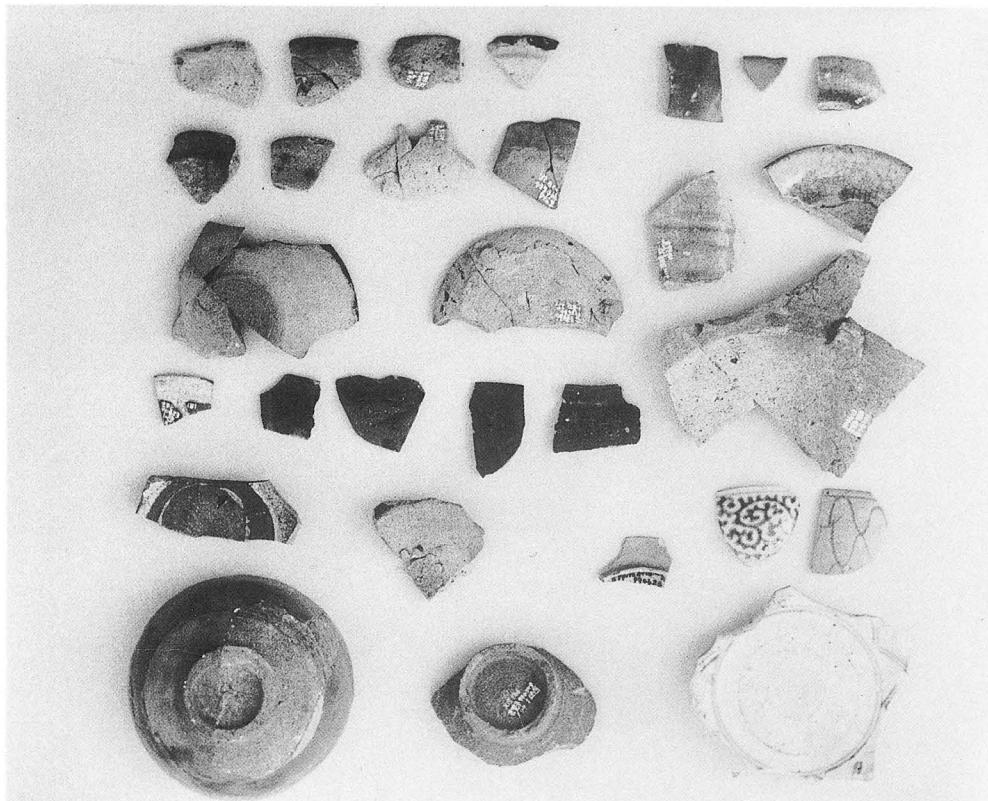
石皿



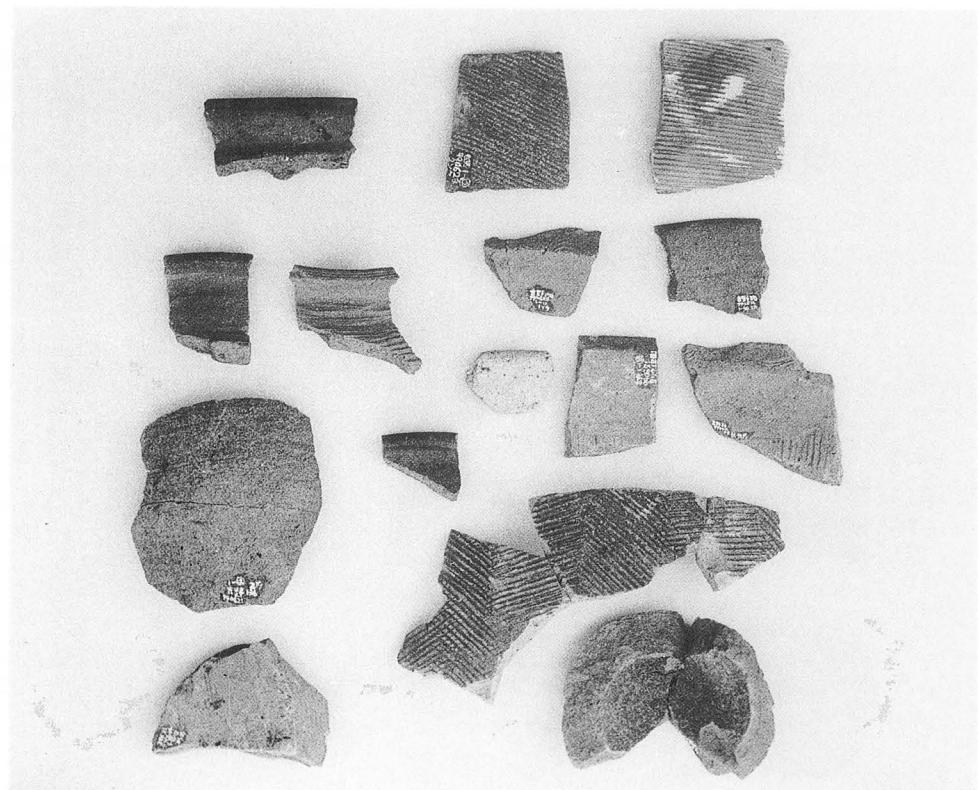
上 3段 1区川跡出土遺物  
下 1段 2区用水跡



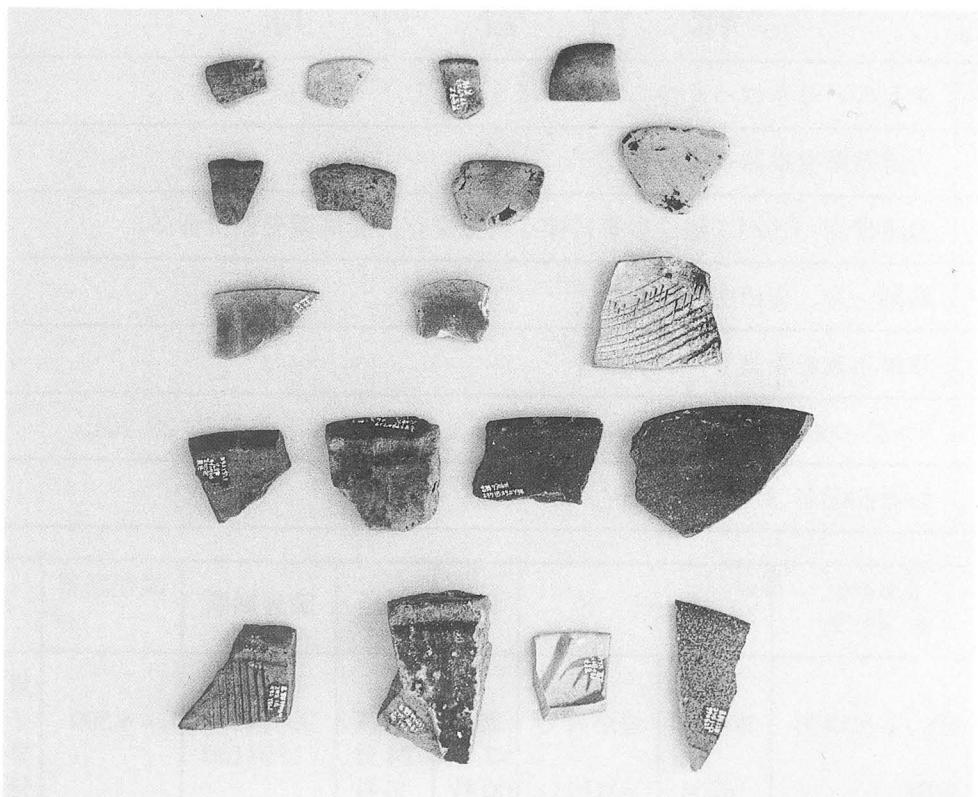
3区川跡出土遺物



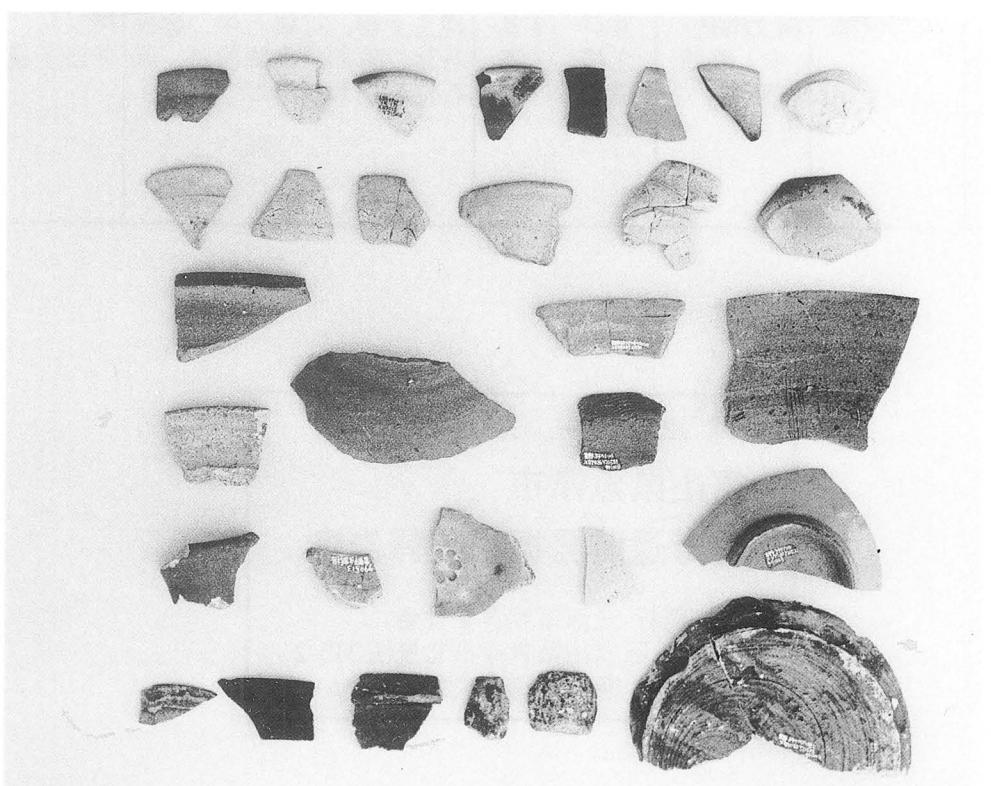
1区 出土遺物



1区 出土遺物



2区 出土遺物



3区 出土遺物

# 報告書抄録

ふりがな	よしのいせきはっくつちょうさほうこくしょ
書名	吉野遺跡発掘調査報告書
シリーズ名	魚津滑川バイパス建設事業に伴う埋蔵文化財発掘調査報告書(5)
編集者名	麻柄一志、塩田明弘
編集機関	魚津市教育委員会
所在地	〒937-0066 富山県魚津市北鬼江313-2 TEL 0765-23-1045
発行年月日	西暦2000年3月31日

ふりがな 所収遺跡	ふりがな 所在地	コード		北緯	東経	調査期間	調査面積 m <sup>2</sup>	調査原因
よしのいせき 吉野遺跡	とやまけんうおづし 富山県魚津市 よしの 吉野	市町村	遺跡番号	36度 47分 00秒	137度 24分 30秒	990513～ 991130	6,500	魚津滑川バ イパス建設 事業に伴う 発掘調査

所収遺跡名	主別	主な時代	主な遺構	主な遺物		特記事項
吉野遺跡	集落遺跡	縄文時代 中・晩期 中世 近世	井戸 土坑 溝 ピット	1基	縄文土器、打製石斧、磨製 石斧、珠洲、土師器皿、砥 石、越中瀬戸など	縄文時代の打製石 斧が多量に出土

平成12年3月31日発行

## 富山県魚津市 吉野遺跡発掘調査報告書

編集・発行 魚津市教育委員会  
富山県魚津市北鬼江313-2  
印刷 魚津印刷株式会社

